

明治十九年三月二十三日内務省贈付

長谷川泰譯



斯泰涅爾小兒科 卷上

濟生學舎藏版



斯泰涅爾小兒科卷上目次

第一套

診法論	一丁
頭部診法論	九丁
胸部診法論	十丁
消化器診法論	十五丁

第二套

神經系之疾病	
(甲)腦及腦膜病	二十三丁
(一)腦及腦膜貧血	同丁
(二)腦及腦膜之充血	三十丁
(三)頭腔出血(腦及腦膜出血)	三十六丁
(四)腦竇トロンボ一セ	四十二丁
(五)剛腦膜炎及剛腦膜血瘍	四十七丁



- (六)軟腦膜炎(單純腦膜炎) 五十丁
- (七)結核性腦膜炎 五十六丁
- (八)腦炎 六十六丁
- (九)腦肥大及硬結 七十丁
- (十)腦水腫(腦及腦膜內ニ於ル漿液滲出) 七十四丁
- (甲)先天性腦水腫 七十五丁
- (乙)後天性腦水腫 七十八丁
- (十一)腦及腦膜之腫瘍 八十七丁
- (十二)精神病 九十四丁
- (甲)精神機能亢進 同丁
- (乙)精神機能沈抑 九十六丁
- (丙)精神機能衰弱 九十八丁
- (十三)先天性結構異常 百一丁
- (十四)頭蓋細小 同丁

- (十五)腦貌優屈 百三丁
- (十六)頭血瘍 百六丁
- (乙)脊髓及脊髓膜之疾病 百九丁
- (一)脊髓及脊髓膜充血 百十丁
- (二)脊髓膜炎 百十一丁
- (三)越里埜密性腦脊髓膜炎 百十四丁
- (四)脊髓及脊髓膜之新生物 百十七丁
- (五)脊椎破裂 百十九丁
- (六)知覺神經病(神經知覺機能亢進) 百二十二丁
- (七)運動神經病 百二十七丁
- (八)驚風(搐搦) 同丁
- (甲)直接性搐搦 百二十八丁
- (乙)間接症候性即反射性搐搦 百三十丁
- (九)牙關緊急及破傷風 百三十四丁



- (ハ)點頭痙攣 百四十丁
- (ニ)小舞蹈病 百四十三丁
- (ホ)大舞蹈病 百五十二丁
- (ヘ)電氣舞蹈病 百五十五丁
- (ト)癲癇 百五十六丁
- (チ)運動性麻痺 百六十一丁
- (リ)眞之攣縮 百七十三丁
- (ヌ)神經性顔面痙削 百七十五丁

第三套

呼吸器疾病之縮

初生兒之假死

- (甲)鼻腔之疾病 百七十六丁
- (一)鼻腔加答兒 百七十九丁
- (二)衄血 同丁
- (三)衄血 百八十三丁

(三)鼻腔ノ新生物及鼻中隔ノ膿瘍

(乙)喉頭之疾病

- (一)喉頭加答兒及偽性格魯弗 百八十五丁
- (二)格魯弗 百八十九丁
- (三)格魯弗 同丁
- (三)喉頭腫瘍 百九十五丁
- (四)聲門痙攣 二百九丁
- (四)聲門痙攣 二百十四丁
- (五)聲門帶麻痺 二百二十丁
- (六)氣道之異物 二百二十四丁
- (丙)氣管之疾病 二百二十七丁
- (丁)甲狀腺之疾病 二百三十丁
- 甲狀腺肥大 同丁
- (戊)氣管枝及肺之病 二百三十三丁
- (一)急性慢性及乾性氣管枝加答兒 同丁
- (二)百日咳 二百四十丁

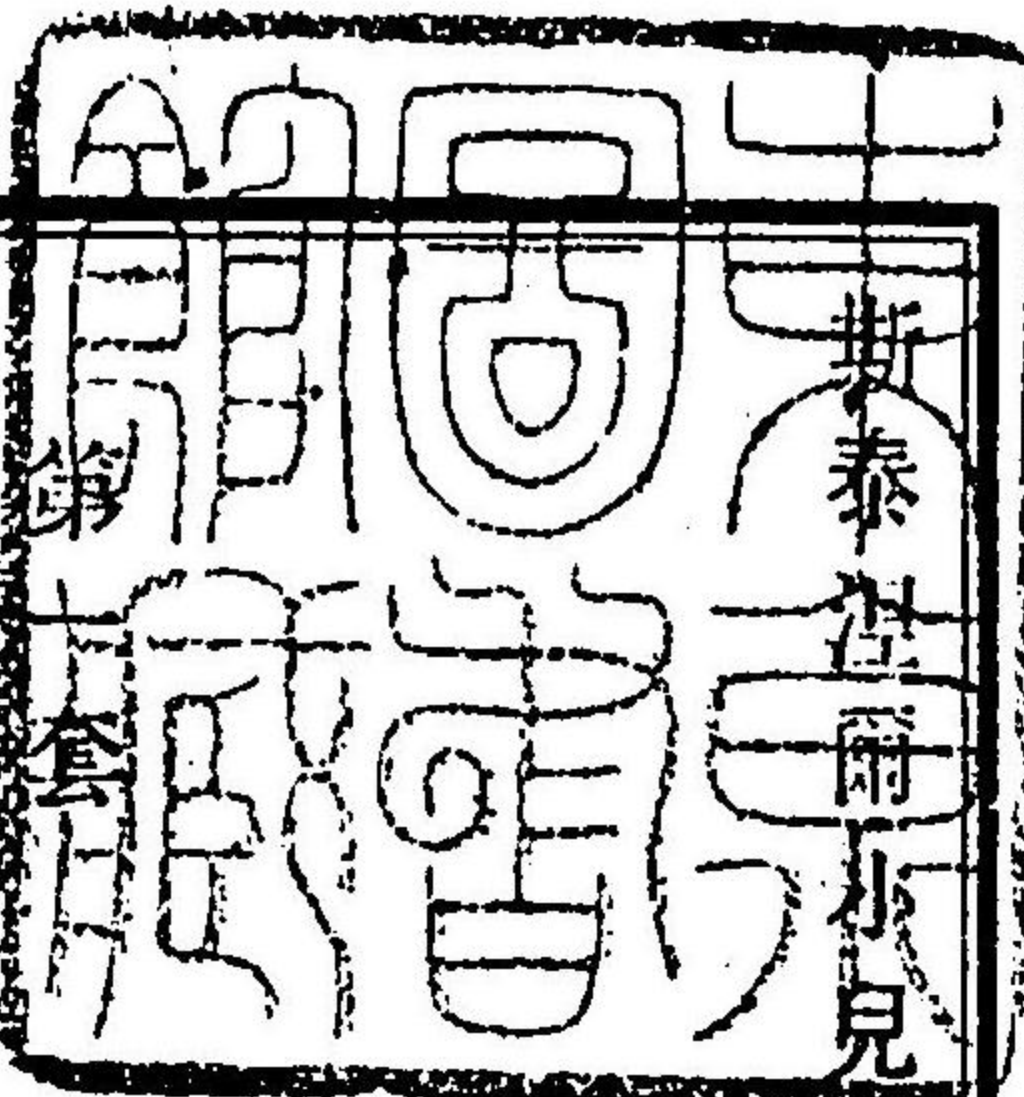


(三)肺炎	二百四十九丁
(イ)加答兒性肺炎	二百五十丁
(ロ)格魯弗性肺炎	二百五十七丁
(四)肺氣腫	二百六十八丁
(五)肺アテレクターゼ(即肺萎縮)	二百七十二丁
(六)肺勞	二百七十七丁
(イ)結核性肺勞	二百七十八丁
(ロ)慢性肺炎及氣管枝炎ヨリ起ル肺勞	二百八十一丁
(七)肺壞疽	二百八十八丁
(八)胸膜炎	二百九十一丁
第四套	
血行器及水脈系器病之論	二百九十九丁
總論及生理要項	三百一丁
(一)卵圓孔開通	

(二)ボタリー管開通	三百二丁
(三)心室交通	三百三丁
(四)先天性肺動脈狹窄	三百五丁
(五)先天性三尖瓣狹窄	三百七丁
(六)先天性大動脈狹窄	三百八丁
(七)心囊炎	同丁
(八)心囊水腫	三百十二丁
(九)心内膜炎及瓣膜異常	三百十四丁
(十)血管腫瘍 末梢血管擴張 腫海綿性腫瘍	三百十八丁
(十一)水脈腺炎	三百二十二丁
(十二)水脈性貧血 一名假性白血病	三百三十丁

目次 終





診法論

長谷川泰 譯

凡ソ患兒ノ診斷ハ諸般ノ困難及ヒ障得ト相伴フカ故ニ確實ニ辨別スルニハ其障得ヲ除カサルヲ得ス蓋シ小兒ハ言語セス自覺患恙ヲ訴フルヲ能ハス且ツ執拗嫉忌恐怖煩躁シテ頗ル診察シ難ク動モスレハ全ク診察スルヲ能ハス是ヲ以テ小兒ニ愛戀セラル、所以ヲ理會スルニ非サレハ其診察甚々難シ故ニ小兒家ハ先ツ小兒ト相友愛シ殊ニ初回ノ診察ニ於テハ務メテ醫士ノ姿態ヲ脱却シ小兒ノ注目ヲ玩器等ノ他物ニ轉セシメ頗ル友戯ノ狀ヲナシ以テ診察ノ目的ヲ達スルヲ要ス此



注意ハ殊ニ六ヶ月乃至三歳ノ小兒ニ須要ニシテ乳兒及ヒ既ニ成長セ  
ル小兒ハ診察稍易シ是レ甲ハ尙未ク意識辨別ナク乙ハ粗才智思慮ア  
レハナリ

予ハ小兒ヲ診スルニ當リ患兒危急ニシテ直チニ患部ノ診察ヲ要スル  
ニ非サレハ先ツ其概徴何如ヲ觀察シ次テ各症各器ヲ特別ニ診斷セリ  
小兒ヲ裸體ニシ其臥床ノ位置ヲ恰好ニシテ充分ニ明瞭ニシ若シ然ス  
ルヲ能ハサレハ小兒ヲ窗邊ノ机上ニ置ク可シ

概徴ハ身体精神ノ性情作用ノ梗概ニシテ小兒ニ抵觸シ若クハ之ヲ煩  
擾セサルモ尙ホ辨識ス可ク大抵其詳定確實詳細ナレハ各種ノ診法ヲ  
行ハサルモ鑑別粗ハ既ニ眞實ニ近ク或ハ判然鑑別ス可シ

其概徴ノ第一ニ屬スル者ハ小兒ノ發育及榮養ナリ初生男兒ノ長サハ  
平均四十九センチメートル初生女兒ハ四十八センチメートルナレ  
既ニ初生ノ第一週間ニ於テ速カニ成長シ第一歳ニ於テ大約十六セン  
チメートル乃至二十センチメートル第二歳ニ於テ大約八センチメー

トル乃至十センチメートル第三歳ニ於テ大約七乃至八センチメートル  
ル第四歳ニ於テ大約六センチメートル第五歳ヨリ第十五歳乃至第十  
六歳ニ至ルノ間大約一歳毎ニ五センチメートル乃至六センチメートル  
ル成長ス初生兒ノ重サハ平均三千乃至四千瓦爾謨ナリ

發育ノ通常ナル小兒ノ体重ハ毎日一ポンド乃至三ポンド増盛ス  
小兒ヲ其年齢ト比較シテ一目スレハ其榮養及ヒ發育通常ナルカ將ク  
然ラサルカハ自ラ明ナリ身体短小ニシテ脂肪少ナク若クハ缺乏シ筋  
肉ノ結構薄弱ニシ弛緩シ皮膚皺襞ヲ生スルハ發育成長ノ機障礙セラ  
ル、ノ徴ニシテ其原因或ハ餌養缺乏ニアリ或ハ疾病ニアリ

其他各器ノ大小其權衡ヲ得ルヤ否ニ注目スヘシ其尤モ記スヘキハ初  
生兒及ヒ乳兒ノ頭首ト肚腹ハ概ノ稍大ナルヘキヲ知ラサル可クス腦  
水腫頭蓋細小尙僂病慢性腸加答兒脊柱潰爛ハ著シク此比例ヲ障礙ス  
小兒ノ臥狀及ヒ運動モ亦概徴ニ屬ス乃チ健全ナル小兒ハ穩臥シ醒覺  
間ハ嬉喜活潑運動ス失神狀ヲナシテ臥スルハ無力及ヒ衰弱ノ徴ニシ



兼テ人事不省ナルカ或ハ唯半ハ省覺ヲ具ヒ直視シ眼目動カス眼瞼半開スルハ危篤ナル腦病ノ徵ナリ煩躁轉側スルハ熱性諸患及ヒ腦刺衝ニ發シ屢々下脚ヲ抛却シ且ツ屢々下腹ニ牽掣シ兼テ哭聲ノ痛苦ナルハ不消化及疝痛ノ徵ニシテ兩脚ヲ絶ヘス牽掣スルハ腹膜炎ニ起リ一脚ヲ牽掣スルハ膝蓋炎、髌臼炎、腰筋炎ニ發ス

靜穩ニ仰臥若クハ左右側臥シ鬱悶シ兼テ呼吸促迫スルハ胸臈及腹膜ノ炎症ニ起リ頭首甚シク後屈スルハ滲出性腦患及ヒ格魯弗ノ徵ナリ又屢々頭首ヲ鉛直線ニ轉動シ枕子ヲ摩察シ或ハ之ヲ鑽開シ一手若クハ兩手ニ不隨意運動ヲ起シ時トシテ一脚ヲ外方ニ抛却シ他脚ヲ安靜ニスルハ腦患ノ徵ナリ終始伏臥スルハ羞視ノ徵ニシテ殊ニ腺病性眼炎ニ見ル所ナリ半坐ノ位置ヲ取リ呼吸大ニ不利スルハ心竇及ヒ胸膜ニ多量ノ液汁滲出スルノ徵ナリ弛張性若クハ緊張性筋肉痙攣及ヒ一筋系若クハ數筋系ノ麻痺ハ神經中樞若クハ其末梢ニ患恙アルノ徵ナリ又意識アレハ筋肉不隨意ノ運動ヲナスハ舞蹈病ニ固有ノ一徵ナリ

其他概徵ニ屬スルモノハ面貌ナリ

健康ニシテ榮養ノ宜シキ乳兒殊ニ初生ノ第一週ニ於テハ別ニ著ルシキ面貌ナシト雖モ或ル疾病ノ感動ニ因リ變シテ醜惡トナリ多少ノ特徵ヲ呈ハシ頗ル鑑別ノ要訣トス可キアリ即チ老衰ノ面貌ヲ呈ハシ皮膚尙甚シク皺襞ヲ生スルハ慢性瘦削諸病殊ニ腸管及ヒ肺ノ慢性瘦削諸病ノ徵ナリ纒カニ二三時乃至二三日間ニ顔面ノ憔悴ヲ來タシテ眼窩陷沒シ鼻、頰、口唇、尖銳トナルハ急性肚腹痛、殊ニ小兒霍亂、化膿性腹膜炎及ヒ格魯弗兼實布帝里性胃炎ノ徵ナリ顔面ニ疼痛狀ヲ帶ヒ兼テ前頭諸筋ニ皺襞ヲ生スルハ腦刺衝ノ徵ニシテ呼吸毎ニ鼻翼甚シク鼓動スルハ炎性肺患ノ徵ナリ又顔面膨腫シ眼瞼浮腫スルハ水腫、腎臟腺肉質炎及ヒ百日咳ノ徵ナリ

概徵ヲ診スルノ後但シ概徵ヲ診スルノ際傍人及看護者ニ疾病ノ誘因、時間、現今ニ至ルマテノ經過ニ於ル一二ノ要領ヲ尋問ス可シ各器ヲ診スルヲ要ス第一ニ脈搏、体温、呼吸ノ度、如何ヲ檢ス可シ是レ此等ノ諸機



能ハ輕微ノ原因ニ由リテ著ルシク攪亂セラレ動モスレハ誤診ヲ來ス  
コアレハナリ

診察スルノ際、患兒睡眠スレハ脈搏及ヒ体温ノ正シキ狀況ヲ認メ易ス  
シト雖モ之ニ反シ患兒煩躁シテ抑制シ難ク且ツ號泣スレハ診脈甚ク  
難ク或ハ全ク診脈スル能ハス脈度直チニ十五至乃至二十至増進ス此  
ノ如キ者ニ於テハ更ニ好機會ヲ待チ或ハ稍安靜スルヲ窺フテ再診ス  
可シ

兒齡ノ階級ニ隨ヒ脈搏平均シテ左ノ如シ然レモ大ニ差等アル者トス  
(リルリー氏ハバルテーツ氏ワルラ  
イ氏及ヒ他諸氏ノ算定ニ係ル)

從初生至第二月一百六十至乃至一百三十至 從第二月至第六月一百  
三十至乃至一百二十至 從第六月至第一歲一百二十至乃至一百十至  
從第一歲至第三歲一百十至乃至一百至 從第三歲至第五歲一百至  
乃至九十至 從第五歲至第十歲九十至乃至八十至 從第十歲至第十  
四歲八十至乃至七十至

凡ソ小兒ノ熱狀ヲ認メントスルニ体温ノ増盛ヲ證スルハ脈度ノ亢進  
ヨリモ緊要トス概シテ之ヲ論スルニ小兒ニ於テハ脈線ト体温ノ線ト  
併行ス實驗ニ據ルニ脈線ハ無熱ノ狀態ニ於テ小兒四歲以下ナレハ脉  
温線ニ均シク大兒ナレハ脉温線ヨリ下リ熱性諸病ニ於テ小兒四歲以  
下ナレハ脉温線ヲ超ヒ大兒ナレハ脉温線ニ均シ蓋シ脈性及脈調ハ脈  
數ヨリ緊要ナリ即チ脈搏不整寬徐ナルハ腦病及ヒ心臟異常ニ見ル處  
ニノ間々神經性貧血ニ於テハ別ニ著シキ旨趣ナキモ然ルコトアリ脈搏  
唯寬徐ニシテ脈狀整然タルハ初生兒ノ蜂窠織硬結、腎臟腺肉質炎及ヒ黃  
疸ニ見ル處ナリ又早朝脉温非常ニ亢進シ脈搏一百四十至乃至一百六  
十至トナルハ格魯弗性肺炎ニアラサレハ急性發疹病ノ將サニ起ラン  
トスルノ徵ナリ蓋シ脉温ヲ仔細ニ計ルハ熱病ノ經過ヲ辨識スルニ緊  
要ニシテ缺ク可カラス

熱度ノ梗概ヲ識ルニハ手掌ヲ以テ肌熱ヲ試ムレハ足レリトス但シ此  
法ヲ行フヤ頭、胸、肚腹、四肢ヲ檢査スルヲ要ス是レ身軀ノ各部ニ脉温ノ



分佈不齊ナルヤ否ヤヲ認ム可ケレハナリ是ヲ以テ結核性腦膜炎ニ於テハ頭熱著ルシク増進スレモ下脚ニハ減却シ窒扶斯ニ於テハ額及肚腹殆ント劇熱ヲ發シ急性發疹病ニ於テハ全身皮膚ノ熱度非常ニ増進ス蓋シ詳細ニ血温ヲ計ラント欲セハ須ク直腸若クハ腋下ニ驗温器ヲ插入シテ検査セスンハアル可ラス

初生兒ノ体温ハ大人ヨリモ攝氏ノ四分ノ一度乃至半度高シ(後來ニ至レハ聊カ高キノミ)小兒ハ胃寒、鼻感冒、不消化、口腔炎、加答兒性咽頭炎等ニ由リテ往々体温驟カニ亢進ス然レモ又直チニ下降ス

熱性諸患ノ初起ニ於ル惡寒ノ發作ハ患兒愈々嬰孩ナレハ愈々稀レニシテ設令之ヲ發スルモ多クハ充分ナラズ往々惡寒ヲ起サス之ニ反シ驚風狀ノ發作ヲ發シ或ハ又大兒ニ於テハ譫妄ヲ起ス其原因蓋シ体温増進スルカ爲メニ腦ノ刺衝セラル、ニアルナラン

体温ノ非常ニ下降スルハ小兒霍亂ニ於ル血液及ヒ液汁ノ脫却、瘦削性ノ貧血兒、血行障礙殊ニ靜脈血行障礙、心臟異常、初生兒蜂窠織硬結、肺氣

腫、假死虚脱、死戰ニ見ル處ナリ蓋シ皮熱ヲ檢スルニ當リ兼テ皮膚乾燥スルヤ否ヤ滋潤スルヤ否ヤ發疹スルヤ否ヤ發疹スレハ其疹性何如ヲ検査セスンハアル可ラス

### 頭部診法論

頭部ヲ診スルニハ先ツ其大小形狀ヲ檢ス可シ乃チ腦水腫、佝僂病、腦肥大ニ於テハ頭部非常ニ大ナリ先天性若クハ縫際癒合早キニ過クルヨリ起ル頭蓋細小ニ於テハ頭部非常ニ小ナリ腦水腫ニ於テハ發大スル頭顱、楔形ヲナシ頭顱圓形或ハ卵圓形ヲナシ佝僂病ニ於テハ發大スル頭顱、楔形ヲナシ前頭骨及顱頂骨ノ各突處著シク突腫ス其他須要ナルハ縫際及大顱門ノ状態ナリ乃チ通常第二月ニ於テ縫際動搖セス初メ後顱門次チ側顱門終リニ大顱門癒合ス但シ大顱門ハ第十五月第二十月ニ至リ癒合スルヲ常トス然レモ權衡常ヲ失ヘハ或ハ化骨早キニ過キ或ハ縫際及顱門非常ニ久ク動搖シ依然膨開ス頭内充血、滲出、漏血、漿液漏出、及ヒ腦肥大ニ於テハ縫際及顱門劇ク擴張シ且ツ少ク隆起ス腦貧血、腦萎縮ニ



於テハ沈陷シ加之骨縁相層疊ス又大顛門ニハ複性運動ヲ認ム即チ一  
ハ呼吸性運動ニシテ呼氣ノ間顛門腫起シ吸氣ノ際弛縱ス一ハ脈搏性  
運動ナリ

大顛門ヲ聽診スルニ多クハ呼吸音嗽音ニ兼テ多少高朗ナル心收縮的  
吹音ヲ聽取ス然レモ其存否毫モ辨法ニ益アルコトナシ  
腦病ハ近來檢眼鏡ノ助ケテ假テ之ヲ診斷チナス此法殊ニ急性結核及  
眼動脈ノ變細管ニムボリーヲ判決スルニ須要ナリ

頭部ヲ診スルノ際兼テ才智ノ狀態及運動障礙ノ存否ヲ認メ得ルナリ

### 胸臟診法論

概シテ之ヲ論スルニ小兒胸臟ノ理學的診斷ハ大人ヨリモ難ク隨テ其  
成績モ亦確實ナラス是ヲ以テ殊ニ注意シテ之ヲ認定スルヲ要ス蓋シ  
其然ル所以ハ臟器ノ細小ナルト組織ノ軟弱ナルト躁擾ノ大ナルト言  
語セサルト呼吸ノ往々軟弱且頗ル淺表ニシテ充分ナラサルトニ由ル  
望診ニ由リテ呼吸ノ度數及其性質ヲ認ム可シ蓋シ呼吸ノ數及ヒ其性

質ハ音ニ兒齡ニ從ヒ大ニ異ナルノミナラス亦頗ル變換シ易シ予カ頻  
回ノ實驗ニ據レハ健康ノ乳兒ハ一分時間呼吸二十四乃至三十ニ必  
然調節セス是レ特リ醒覺躁擾間ノミナラス睡中ニ於ルモ亦然リ又大  
兒ノ呼吸ト脈搏トノ比例ハ一呼吸四至乃至五至ナリ然レモ呼吸器病  
ノ爲メニ呼吸面減少スレハ呼吸ノ數愈増進シテ一分時間六十八乃至  
至之ヨリ以上ニ至ル

呼吸非常ニ頻數ナルハ劇性熱患ノ經過中例之急性發疹病胸臟炎症及  
ヒ骨系患尙俛病ニ見ル所ナリ

呼吸甚シク寛慢ナルハ腦壓迫ニ由ル一分時間十六乃至十二加之八ニ  
減シ通常不等ニノ調節セス或ハ寛慢且頗ル淺表ニノ聽取シ難ク或ハ  
高朗ニノ兼テ深大息ヲナス

初生兒及乳兒ハ殊ニ腹式呼吸ヲ發ス後來初メテ男兒ヨリハ女兒ニ多  
シトス間錯性トナリ或ハ殊ニ上胸筋ニ由リテ營マル

所謂肺圍溝橫隔膜附着ノ處吸氣ノ時劇ク収縮スル者ハ必ス呼吸機ニ



障碍アルノ徴ニシテ其障碍或ハ肺中ニアリ(肺炎)或ハ氣道ニアリ(格魯弗及氣管枝炎)或ハ骨系若クハ筋系ニアル(佝僂病)ノ別アルコトナシ  
 小兒ニ理學診斷ヲ行フコトハ打診板及ヒ聽胸器ヲ用ヒサルヲ善シトス然レモ患兒ノ多數殊ニ嬰兒ニ於テ肺患ヲ診定スルニ當リ單ニ背面ノヨチ診スルヲ以テ足レリトセズ橫襟兒ハ伏臥若クハ橫臥セシメテ診ス可シ既ニ直保スヘキ小兒ハ兒母若クハ乳母ノ腕上ニ安ンセシム可シ凡ソ小兒號泣努責スレハ下背部殊ニ右側ノ打診音暫時短且鈍ナリ此生理的鈍音ヲ病的鈍音ト誤ラサルカ爲メニ患兒安靜スルヲ待チテ診察スヘシ是レ殊ニ注意ス可キ要訣トス又小兒腕上ニ保支セラレテ母胸ニ密着スレハ一時其偏胸ニ濁音ヲ發ス  
 反對試驗法ヲナサント欲セハ宜ク小兒ヲ他ノ腕上ニ置キ尙ホ一回打診ス可シ

打診及聽診法ヲ行フニハ兩胸ヲ極メテ確實ニ比較セスンハアル可カラス且小兒ヲ打診スルニハ輕打スルヲ要ス強打スレハ疼痛衝逆シ再

ヒ診斷ヲ行ヒ難ク動モスレハ全ク之ヲ行フコト能ハサルコトアリ

聽診法(直チニ耳ヲ以テ聽キ唯心臟異常ニ於テノミ聽胸器ヲ用フ)ヲ行フコト記ス可キ要件ニアリ即チ嬰兒ノ氣胞音ハ大兒ヨリモ銳ク間々高朗且ツ銳利ニシテ未熟ノ醫士ハ氣管枝音ト誤ル一ナリ虛弱兒ニ於テハ肺質ノ炎性硬結ノ爲メニ健肺ニ氣管枝音ノ波及スル一ナリ

觸診法ハ小兒ニ忽諸ス可ラス此法ニ由テ聲音震頓及ヒ高朗ナル多數性水泡音ノ存否ヲ決定スヘシ

小兒家ハ胸臟ノ理學診法ニ兼テ二箇ノ呼吸症ニ注目ス可シ即チ咳嗽及ヒ號泣是レナリ

咳嗽ハ其原因ニ從ヒ鑑別ニ緊要ノ諸徴ヲ呈ハス即チ單純加苔兒性咳嗽ハ寬鬆コシテ痛楚ナク(唯氣道ノ分泌物僅少ナレハ畧ホ笛聲ヲナシ且ツ其響清亮ナリ)炎性諸患ニ於テハ短小乾燥截絶且ツ痛楚ヲ帶フ澁滯嘎嘶シ吼ルカ如キ者ハ急性喉頭加苔兒ニ發シ格魯弗ニ於テハ更ニ劇甚ナリ呼吸衝突シ吸氣高朗且ツ徐長ナル痙咳ハ百日咳ノ徴ナリ乾



燥シテ刺衝性ヲ帶ヒ殊ニ夜間ニ發スル者ハ慢性氣管枝腺炎ニ起リ極  
メテ乾燥シ晝夜連綿頻數ナル者ハ結核勞ニ起リ又瘵性ヲ帶ヒ頑固ニ  
シテ晝夜甚シク困却シ睡眠ノ間全ク休靜スル乾咳ハ可婚期ノ貧血神  
經性ノ少女ニ起ル

痰ハ肺病ノ鑒別ニ緊要ノ一徵ナリ六七歳ニ至ルマテノ間全ク闕如ス  
唯稀レニ百日咳ニ於ルカ如ク嘔吐作用ニ由リテ咯出セラル、ノミ  
號泣往々疼痛狀ノ感覺ヲ訴フル比類ノ通辯ト云フモ可ナリ但シ其音  
調形狀及持長ニ許多ノ特徴ヲ呈ハス

通常高朗徐長ナル號泣ハ呼氣ト相伴フ稀レニ呼氣間ニ短吸氣ヲ發シ  
高朗ニノ聽取ス可キアリ但シ乙性ノ者ハ殊ニ躁擾拗執惡習ノ小兒號  
泣スル時ニ見ル者トス

號泣高朗ニシテカアリ連綿トシテ止マズ咳嗽ヲ帶ヒサルハ通常呼吸  
器重患ノ徵ニアラス必ス痲痛ト相伴フモノナリ窒息ノ響ナキ者ハ滲  
出性喉頭病ニ起リ哭聲擁蔽シ輒ク滯滞スル者ハ喉頭加答兒ニ起リ哭

聲連續セス清亮竄透シ忽然止テ斷割スルカ如キ呼氣性ノ者ハ腦刺衝  
及腦水腫ニ發ス又困苦ナル號泣微弱ナル呻吟若クハ哀ム可キ泣聲ヲ  
發シ兼テ顔面攀縮シテ疼痛ノ狀ヲ呈ハス者ハ危篤ナル炎性及虛脫性  
疾患ニ於テ見ル所ナリ

消化器診法論

消化器ノ診法ハ小兒病ノ鑒別ニ緊要ノ一法ニシテ口腔咽頭ノ望診、肚腹  
及吐下物ノ検査之ニ屬ス蓋シ口腔及ヒ咽頭ハ別ニ之ヲ診ス可キ事故  
ナキモ其検査ヲ忽諸ス可ラス乳兒ノ口ヲ開クニハ少シク下唇若クハ  
頤ニ觸ルレハ足レリ速カニ指頭ヲ舌根ニ送入シテ少シク之ヲ擠下シ  
以テ咽頭ヲ窺フ可シ若シ検査ノ際、號泣スレハ之ニ由リテ既ニ口内ヲ  
望診ス可キ者ナリ

成長スル小兒殊ニ性質怯懦、愛眷甚シキニ過キ或ハ養育宜キヲ得サル  
者ハ輒ク口ヲ開クヲ甚ク稀レニシテ往々說諭時ヲ移スノモナラス止  
ムヲ得ス鼻孔ヲ塞キ猛力ヲ用フ可キコアリ口ヲ開クヤ否ヤ直チニ匙



柄ヲ舌根マテ挿入ス可シ之ニ由リテ輕易ノ乾嘔ヲ起シ以テ咽頭諸器  
 ナ觀察ス可シ此猛力ヲ用ヒテ咽頭ヲ検査スルニハ豫メ小兒ノ手足ヲ  
 緊抑シ移動セシメサルハ記ス可キ一事ニシテ然ラサレハ徒勞ノ患アリ  
 舌狀諸般ノ口腔炎、麻疹、痘瘡ノ初起、小兒ニ緊要且危篤ナル咽頭痛、口蓋  
 破裂、懸壅垂又裂ノ如キ形狀缺損及他ノ缺損ハ此法ヲ以テ檢出ス可シ  
 猩紅熱、實布帝里亞流行ノ際ニハ病兒ノ現患如何ヲ問ハス盡ク其口腔  
 及咽頭ヲ検査スルヲ要ス  
 凡ソ小兒ノ肚腹ヲ診スルニハ粗ホ足ヲ集合シテ仰臥セシム可シ然レ  
 モ腹皮緊張シテ躁擾號泣スル者ハ診察シ難ク動モスレハ診察シ能ハ  
 ス小兒ヲ看護者ノ腕上ニ置キ其小兒ヲ取置スルノ際、兒背ヨリ手ヲ送  
 入シテ肚腹上ヲ輕接ス可シ小兒若シ疼痛ヲ覺ユレハ直チニ之ニ應答  
 スルニ號泣ヲ以テス  
 肚腹ヲ診スルニハ望診、觸診、打診ノ諸法ヲ行フ可シ

望診ハ肚腹ノ身軀ニ於ル權衡、大小、形狀、腹皮ノ性質及ヒ臍部ノ如何ヲ  
 認ム可キ者ニシテ殊ニ臍部ノ望診ハ緊要ナリ  
 觸診スレハ腹皮ノ熱度、硬軟、抗抵ノ強弱、其他疼痛ノ存否、下腹腺質器ノ  
 發大、新生物及ヒ腫瘍ヲ發見ス可シ  
 打診ヲ行ヒハ指ヲ以テ輕々打撃ス可シ肚腹膨脹、瓦斯ヨリ起ルカ將ク  
 游離液聚積即チ滲出物ヨリ起ルカヲ判決ス可シ以上ノ三法ヲ合用ス  
 レハ下條ノ據證ヲ得ルモノナリ  
 肚腹ノ膨脹或ハ往々全腹ニ及ホシ或ハ一部ヲ局ス  
 全肚腹甚シク膨脹スルハ夥ク腸内ニ瓦斯生スルヨリ起ル又梨子狀半  
 球圓形ヲナシ且ツ多少緊張ノ彈力ヲ帶ヒ疼痛ヲ挾ミ或ハ疼痛ナシ打  
 診スルニ一種清亮ノ鼓音ヲ發スルハ不消化、腸加答兒、殊ニ慢性腸加答  
 兒、室扶斯及ヒ腸間膜腺結核ニ見ル處ナリ又肚腹膨脹シテ鼓狀ヲナシ  
 抗抵増進シ打診音短濁之ヲ接スルニ疼痛劇甚ナルハ蔓延性腹膜炎ノ  
 徴ナリ



桶樽狀ニ膨脹シテ打診音短ク下垂セル部ニハ全ク鈍クノ手掌ヲ以テ之ヲ打ツモ大疼痛ナキ者ハ腹水ノ徴ナリ  
 心下ノ膨脹ハ胃鼓脹若クハ大腸横行部ノ瓦斯膨脹ヨリ起ル中腹部就中臍圍ノ膨脹ハ腸間膜腺ノ結核ニ發シ或ハ腹膜腔中ニ發生セシ大ナキ膿瘍ニ由ル然ルキハ通常臍部尖出シテ球狀ヲナシ緊張シ波動ヲ生シ疼痛アリ  
 左季肋部穹窿シ抗抵増盛シ疼痛全ク缺ケ或ハ少ク疼痛アルハ慢性脾臟肥大及ヒ左腎癌ニ見ル所ナリ  
 右腸骨部ノ腫痛ハ盲腸周圍炎ニ起リ奎扶斯ニ於テモ亦同部ニ輕微ノ腫痛ヲ發ス又腰筋膿瘍ニ於テハ右腸骨部稀レニ左腸骨部腫痛シ皮膚赤色ヲナシ或ハ然ラス打診スルニ濁音ヲ發シ且ツ其方側ノ脚ヲ運轉スル能ハス  
 下腹ノ穹窿ハ膀胱ノ甚シク充滿スルヨリ起ル尤モ多ク稀レニ限嵩性腹膜炎ニ發ス甲患ハ泄尿スレハ膨脹消却スレヒ乙病ハ穹窿抗抵打

診ノ濁音依然トシテ去ラス

肚腹ノ陷沒ハ危險ノ腦病殊ニ結核性腦膜炎ノ一徴ナリ或ハ腸患殊ニ小兒霍亂腸腺炎赤痢ノ一徴ナリ乃チ腹皮ハ殊ニ腦病ニ於テ著ルシク萎縮シ所謂小舟狀陷沒容易ニ脊柱ニ觸ル可ク且ツ腸ハ腹壁ヲ望ムコト不動若クハ時々蠕動スル紆廻ヲナス凡ソ肚腹ノ疼痛中左ノ二種ハ特別ニ辨スルヲ要ス

不消化風氣膨脹泄瀉便秘ノ經過中ニ發スル疝痛ハ發作狀ニ起リ之ニ次クニ通常久時若クハ暫時ノ間歇ヲ以テシ多クハ熱ヲ挾マズ號泣劇甚連綿シ且ツ風氣膨脹ヲ起ス肚腹ニ劇シク下肢ヲ牽制シ瓦斯及尿ヲ泄スノ後消却スルヲ常トス  
 腹膜炎及腰筋炎ノ疼痛ハ疝痛ト相異ナリ乃チ其經過ノ經久ナル熱症ノ存スル號泣ノ弱クシテ抑塞シ且ツ泣啜スル終始仰臥シテ運動ヲ嫌厭スル瓦斯若クハ尿ヲ漏スノ前若クハ其際ニ亢進スル是レナリ  
 嘔吐ハ小兒ニ普通ノ一症ニシテ或ハ輕易一過ナルアリ或ハ頗ル劇甚



ニシテ他病ノ症候ヲナスアリ、而シテ確實ニ之ヲ了解シ真正ニ鑒別セントスルニハ必ス嘔吐ノ原因、嘔吐ノ状態、吐物ノ量及ヒ其性質及之レト相伴フ他候ヲ辨識セスンハアル可ラス蓋シ小兒ハ胃ノ位置尙ホ鉛直ナルヲ以テ非常ニ嘔吐ヲ起シ易シ蓋シ其嘔吐ハ胃壁自家ノ直達器械的刺衝、若クハ化學的性刺衝ヨリ起リ、食物若クハ胃中ニ來ル異物、例之、蠅蟲、嘔、胆汁、嘔、下スル貨幣等ヨリ起リ或ハ胃ノ器質病ヨリ起リ或ハ交感ヨリ來リ就中迷走神經ノ分佈スル臟器ノ疾病ヨリス然レモ亦腦、殊ニ延髓患及ヒ血液病殊ニ急性傳染病ノ初起ニ於ル中樞神經系ノ刺衝ヨリ發スルコトアリ

所謂常習嘔吐一ニ乳兒ノ乾酪ト名クル者ハ嘔吐作用ニ非ス、現ニ吸フ所ノ乳汁ヲ翻逆スルニ過キス毫モ病的コトアラス許多ノ小兒ニ於テハ直チニ吸乳後或ハ暫クアリ乳汁ノ一分ヲ全ク變化セス若クハ乳清ニ類スル酸液トナシテ翻逆スルヤ頗ル容易ニシテ乾嘔セス又顔面變色歪斜セス吸乳後小兒ヲ震盪スレハ更ニ吐逆シ易シ此嘔吐ハ特リ吸

乳ノ小兒ニ起リ人工ニ榮養スル者ニハ稀レナリ

暫時若クハ久時間、嘔吐ニ先チ惡心、乾嘔ヲ起シ之カ爲メニ無力萎衰シ額及ヒ四肢厥冷シ顔面蒼白憔悴シ脈細數、呼吸淺表ナルハ胃ヨリ來ル者ニシテ自他原因ヨリ起ル者ニ比スレハ善長ナリ

惡心、乾嘔ナク卒然水樣粘液狀白色若クハ黃色ノ液汁ヲ吐逆多クハ弧狀ニ迷出ス、スルハ腦刺衝ノ一徵ニシテ結核性腦膜炎、腦水腫、武雷土病等ニ來ルモノコト重患ノ通徴ナリ

吐物ノ性質ニ注目スレハ頗ル益アリ食後直チニ吐逆スルモ食物尙ホ多少變化シ或ハ吐物中ニ粘液、胆汁、穿レニハ血液、及格魯弗狀實布帝里性滲出物ノ殘片、蛔蟲、ブール、鷄口瘡、黴元ヲ混ス吐物ヲ顯微鏡ニテ檢査スルハ通シ鑒別ニ須要ナリ

下利ハ其度數、性質、疼痛ノ有無及ヒ何時泄利セシヤヲ尋問スヘシ泄利モシ大便アラハ檢査ヲ忽諸ス可カラズ何トナレハ假令明瞭ニ便狀ヲ説明スルモ實物ヲ一見スルニ如カサレハナリ稀液、糞米汁狀ヲナスカ



急性腸加答兒即チ虎列刺性腸炎將チ灰白黃色濃綠色ニシテ多少粘液  
 小塊ヲ混スルカ單純腸加答兒慢性腸加答兒ヲ検査スルハ鑒別ニ關シ  
 可カラス  
 切片狀ニシテ帶黃色若クハ帶黃綠色中ニ白色乾酪塊ヲ混スル者ハ不  
 消化ノ徵ナリ渣滓狀ニシテ灰白色ヲ帶ヒ其狀粘土ノ如クナル者ハ胆  
 汁ノ缺乏スル徵ナリ血線狀若クハ血塊及膿ヲ混スルモノハ腸粘膜損  
 傷ノ徵ナリ腸腺炎室扶斯痢病腸結核急性腸加答兒ノ便及ヒ粘土狀ニ  
 シテ膽液ヲ帶ヒス唯膿渣物狀ノ粘液塊ヨリ成ル者ハ臭氣ナク或ハ少  
 シク臭氣ヲ帶フ乳兒ノ不消化及ヒ急性腸加答兒ニ於テハ酸氣ヲ帶ヒ  
 慢性潰爛性腸炎及ヒ腸結核ニ於テハ其臭氣竄透シテ腐肉ノ如シ  
 顯微鏡ヲ以テ大便ヲ検査シ蟲卵ヲ發見シ以テ内臟蟲ノ存否ヲ確定ス  
 可シ  
 其他診斷ニ要スルハ臍部、肛門、陰部ノ検査ナリ殊ニ肛門、陰部ヲ然リト  
 ス何トナレハ遺傳ノ梅毒ハ初メ此部ニ發シ且尤モ著シケレハナリ

凡ソ患兒ヲ充分ニ診斷スルニハ他覺症ヲ検査スルノ外更ニ既往症ヲ  
 詳悉スルヲ要ス而シテ其既往症ハ父母及ヒ看護者ニ尋問ズルニ非サレ  
 ハ識得ス可クサルハ固ヨリ論ヲ待タズ即チ其父母殊ニ妊娠間ニ於ル  
 母體ノ健否如何、遺傳病例之腺病、結核病、其血族ニ發スルノ有無血族ノ  
 小兒生死如何、何病ニ由リテ死セシヤ、患兒今尙ホ吸乳スルルハ母乳ナ  
 ルカ、乳母ノ乳ナルカ、將チ人工榮養法ヲ行フカ、人工榮養ナレハ其食養  
 ノ方法如何、成長スル患兒ニ於テハ何時何患ヲ以テ齒牙發生始マリ且  
 ツ經過セシヤヲ問フ可シ蓋シ以上ノ諸件ニ於ル父母及看護者ノ陳述  
 ナ聴取シテ服膺シ決シテ其一事ヲ忽諸スル勿レ

第二套

神經系之疾病 *Krankheiten des Nervensystem*

[甲]腦及腦膜病 *Krankheiten des Gehirns und seiner Häut*

○ [一]腦及腦膜貧血 *Anemie des Gehirns und seiner*

*Häute, Hydrocephaloid.*



腦貧血ハ兒齡ニ多キ一症ニシテ急慢二性ノ諸患ヨリ起ル蓋シ小兒ノ腦貧血ハ危險ノ症候ヲ起ズ大人ヨリモ迅速ナリ腦貧血ト腦ノ機能障礙ト關涉親密ナル所以ノ理ハ尙ホ未ク詳カナラス然レモ腦水分ノ量變換スレハ一定ノ腦患ヲ起スハ疑ヲ容ル可ラス而シテ其症候急性腦水腫ト相類似スルヲ以テマルシヤルハル氏ハヒドロセバロイド腦類水腫ノ名ヲ下セリ方今尙之ヲ襲用ス

病軀解剖腦及腦膜貧血ハ一般ナルアリ局處ナルアリ就中全腦貧血尤モ多シ腦膜ノ血管細クシテ萎縮シ少量ノ蒼白色血液ヲ含ミ蜘蛛膜蜂巢織中ニ多量ノ澄明液ヲ見ル腦小ニシテ軟紆廻細クシテ薄廣ク灰白質蒼白色ヲナシ乳兒ニ於テハ其白髓質トノ境界判然クラス白髓質ノ切剖面ヲ檢スルニ毫モ血斑ヲ見ズ或ハ頗ル纒カニ小血斑ヲ見ハシ白色若クハ乳白色ヲナシ顯微鏡ヲ以テ檢スルニ屢神經結組織及ヒ髮細管ノ脂化スルヲ見ル腦室ノ大カ通常ニ異ナラス或ハ多少發大シ澄液充滿シ脈絡叢著シク青白色ヲナシ腦質乾キ或ハ多少濕ヒ剛腦膜竇ニハ

少量ノ水様血液及青白赤色ノ凝固纖維原ヲ含ム腦ノ局處貧血ハ稀レナリト雖モ或ハ腫瘍ト併發シ或ハ腦脈管トロンボーセ及エムボリトニ繼發ス

症候

腦貧血ノ症候ハ其急性ナルト慢性ナルト乳兒ニ起ルト大兒ニ起ルトニ隨テ稍相異ナリ虛脫病ヨリ繼發スル者ニ於テハ全身貧血及瘦削ニ兼テ顔面青白土色ヲ帶ヒ稜角ヲ生シ額上皺襞ヲ起シ額及顳額ノ靜脈露出シ頭皮擴張シ前額門扁平トナリ或ハ沈陷シテ盆ノ如ク或ハ又顳頂骨ト後頭骨稀レニハ前頭骨ト相層疊シテ壇階狀ヲナシ輒ク手ヲ以テ觸知ス可シ後頭ノ毛髮僅少ニシテ頗ル乾燥ス頭首ヲ後屈シテ轉動摩擦シ若クハ之ヲ拋却シ或ハ屢頭ヲ擣ミ顔面苦痛ヲ帶テ牽縮シ頭髮睫毛鼻耳ヲ摸索シ眼瞼ノ運動寬慢ニシテ多クハ半開シ瞳孔初メ收縮ノ終リニ散大シ眼球上竄シ大不安ト失神及ヒ短眠ト相交換シ卒然大眼ヲ開キ瞬ヲ凝シ驚起シテ痛哭シ再ヒ夢寐ニ陥リ上肢ハ攀縮シ下肢



ハ痙縮シ或ハ肚腹ニ牽掣セラレ加之往々全身強直ス以上尤モ緊要ニシテ尤モ多ク發スル腦症ナリ又動モスレハ現ニ取ル所ノ食料及ビ飲液ヲ直チニ反復嘔吐シ或ハ便秘シ或ハ泄瀉シ時トシテ水様若クハ粘液狀膿性ノ下利死ニ至ルマテ連綿ス肚腹多クハ膨脹ノ緊張シ或ハ往々柔軟ニシテ泥ノ如ク腹皮ヲ撮上スレハ指ヲ放ツモ依然皺變チナス呼吸頗ル微淺ニシテ患者ニ親接スルモ之ヲ認ムルヲ能ハス躰温沈降シ脈頻數トナル然レモ腦膜炎ニ於ケルカ如ク脈搏寬徐ナラス又不整ナラス

急性ノ者ハ以上ノ病狀既ニ二三日間ニ發ス慢性虛脫病ニ於テハ之ヲ發スル寛慢ニシテ或ハ時機ニ投シテ應當ノ治療ヲ施セハ治スルアリ或ハ死亡スルアリ但シ死亡ニ趣ク者尤モ多シ

一歳乃至二歳ノ小兒ニ於テハ腦貧血以上ノ方法ヲ以テ起リ所謂ヒドロセパロイドナル疾病ヲ發スト雖モ成長スル小兒ニ於テハ患狀全ク相異ナリ室扶斯ニ續發スル腦貧血ハ時トシテ著ルシク精神ノ障礙ヲ

起スヲアリト雖モ唯一過ナルヲ常トス即チ未ク室扶斯ヲ患ヒサルノ前活潑伶俐且ツ強記ナリシ者遲鈍トナリ考慮ノ力乏ク顔貌活潑鋭敏ナラスシテ其狀宛モ痴呆ノ如ク微笑シテ答ヒス或ハ嬉戯ニ耽ケ父母之ヲ喚ヘモ應答セス約メ之ヲ謂ハ精神機能減却ノ症ヲ發ス又驟カニ成長スル殊ニ從七歳至十歳之間虛弱ノ小兒ニ於テ發育異常ヨリ起ル腦貧血ハ多少腦ノ抵抗力ヲ減殺ス即チ執拗悲愁ノ氣質精神作用ノ厭惡頻回反復スル頭痛眩暈五神謬錯失氣熟眠セスシテ切齒シ睡中悲哀呻吟スル等ハ此ノ如キ小兒ニ見ル所ナリ然レモ早晚消散シテ痕迹更ニナキニ至ル者トス

局處腦貧血ノ症候ハ分明ナル者尙未タ少ナシ

原因凡テ小兒ノ虛脫性諸病ハ皆腦貧血ノ原因トナル然レトモ急性胃腸炎腸腺炎及ヒ痢病ノ經過中ニ於ル多量ノ下利ノ後ニ起リ或ハ食料ノ不長若クハ缺乏ヨリ起リ乳兒ヨリハ人工榮養ヲ行フ小兒ニ屢見ル所ナリ或ハ斷乳早キニ過キ若クハ豫備セサル斷乳ヨリ起リ或ハ劇性



室扶斯熱ノ後ニ起リ或ハ發育成長ノ異常ヨリ起リ或ハ脫血ノ後ヨリ起ルヲ尤モ多シトス局處腦貧血ノ原因ハ動脈ノ狹窄及ヒ頭腔ヲ狹窄スル諸患腫瘍漿液溢出結締織肥大腦硬結ニアリ

鑑別殊ニ其原因ニ基キ且ツ既往及ヒ現今ノ虛脫ノ状態ニ注目ス可シ其全身貧血ノ徵確然ナルト腦膜炎ノ正徵其經過中ニ缺クルトニ由リ以テ腦充血及ヒ腦膜炎ト相辨別ス可シ又極幼ノ乳兒ニ於テ腦貧血ヲ化膿性腦膜炎ト誤診スルハ強チ診斷ノ粗漏ト謂フ可カラス何トナレハ化膿性腦膜炎ノ全ク腦貧血ニ均シキ症候ヲ以テ經過スルハ人ノ能ク知ル所ナレハナリ

豫後豫後ノ善良ナルヤ否ハ其原因ヲ除キ得可キト然ラザルトニ關ス概シテ之ヲ謂ハ、病兒愈幼弱ナレハ愈不良ナル者ナリ然レモ活路ノ望ナキ者モ必ス不治トナス可カラス何トナレハ往々小兒ノ身軀ハ時期ヲ誤ラス應當ノ藥石ヲ投スレハ反應ヲ起シ實ニ驚ク可キコトアレハナリ

療法療法ニ二般ノ別アリ曰沈衰スル腦力ヲ奮起ス曰主トシテ腦貧血ノ基礎タル原因ヲ直チニ除ク是レナリ病室ハ風氣ヲ流通シ少ク温度ヲ高クス可シ列氏ノ十七度乃至十八度何トナレハ衰弱甚シキ病兒ハ躰温ノ發生非常ニ沈陷スレハナリ足部及胸部ニ温燻ヲ貼スルモ亦均シク此目的ヲ達ス可シ暫時間温浴ヲ施シ肚腹及下肢ニ衝動藥ヲ塗擦シ時々熱醋ヲ以テ兒休ヲ拂拭スレハ治癒ヲ助クル者トス内服藥中殊ニ葡萄酒ヲ每一時十五滴二十滴乃至半噶匙ヲ與ヒ或ハルーム酒ニ水ヲ和シテ投ス可シ又他ノ衝動藥例ハ礮砂加亞過子精醋酸鈣丁幾癖香ヲ用フ可シ又小兒現ニ斷乳スルカ若クハ斷乳尙未ダ久シカラサル者ニ於テハ適應スル乳母ヲ比類ノ良藥トス又人工榮養法ヲ行フカ或ハ斷乳既ニ久シキ者ニハ肉羹汁及牛乳ヲ混和スル少量ノ燕麥漿若クハ大麥漿ヲ頻回與フ可シ生肉ニ葡萄酒二三滴注加スレハ往々受容ス可シ凡テ食料ヲ吐逆スル小兒ニハ益アリトス又脫血若クハ室扶斯ノ後及發育障礙ニ於ル腦貧血ニハ幾那製劑殊ニ幾那越幾斯鐵麥酒葡萄酒



酒、消化シ易キ滋養物及良好ノ大氣ヲ以テ適當ノ醫藥トス  
 凡テ虚脱ヲ起シ、精力ヲ減殺スル藥石ハ、腦貧血ニ嚴禁ス可シ、殊ニ慢性  
 虚脱病ニ於テハ、腦貧血ノ初起若クハ、既ニ時日ヲ經シ者ヲ限制スル豫  
 防法ヲ行ハス、ソノハアル可カラズ、予ハ實驗ニ由ルニ、殊ニ脱血後ノ腦貧  
 血ニ輸血法ノ奏効何如ヲ認ムルコト能ハス

(二) 腦及腦膜之充血 *Hyperämie des Gehirns und der Meningeu.*

腦及腦膜ノ充血ハ、小兒ニ屢發スル一症ニシテ、或ハ原發スルアリ、或ハ  
 繼發スルアリ、或ハ急性ナルアリ、或ハ慢性ナルアリ、蓋シ腦充血ノ小兒  
 ニ頻數ナル所以ノ理ハ、頭蓋ノ尙未タ縫合セサルト、初生ノ第一歳ニ於  
 テ、腦ノ發育殊ニ速カナルト、他病ニ累及セラル、素因、腦ニ著ルシキト  
 シ、以テ辨明スヘシ  
 病體解剖、腦及腦膜ノ充血ハ、大抵全腦ヲ煩ハス者ニ、局處ナルハ稀レ  
 ナリ、而シテ頭皮ニ血液頗ル多シ、殊ニ頭骨ノ黯青赤色ヲナスヲ以テ未ク  
 頭蓋ヲ開カサルモ、既ニ腦及腦膜ニ血液頗ル饒多ナルヲ徵ス可シ、膨腫

充滿ナル、剛腦膜竇中ニ一半ハ液狀一半ハ凝固スル血液ヲ見ル、剛腦膜  
 帶紅藍色透明ニシテ、充血ノ極度ニ於テハ、乾燥緊張ス、軟腦膜ノ血管ハ  
 細枝別ニ至ルマテ、充血シ、梭屈、蜿蜒シ、加之擴大シテ、靜脈怒張狀ヲナス  
 器械性原因、例之ハ、頸腺肥大ハ、唯腫瘍ト相應スル、腦ノ一側ニ充血ヲ起  
 ス、甚シキハ、腦腫起シ、腦溝狹窄シ、灰白質、黯赤色ヲ帶ヒ、大小ノ血斑、白髓  
 質中ニ撒布シ、或ハ處々ニ數箇ノ血斑相混一スルアリ、又腦充血、經久劇  
 甚ナレハ、兼テ剛腦膜及ヒ、腦ノ水腫、所謂、腦水腫ヲ起シ、稀レニハ、血液滲  
 出シ、脈絡叢頗ル血液饒多ニシテ、時トシテ、小囊ヲ有スルコトアリ、又大兒  
 ニ於テハ、腦充血、經久ナレハ、蜘蛛膜乳狀ニ混濁シ、バツヒ、チン、氏顆粒、肝  
 發大ス、但シ、稀有ノ事トス

症候及經過、腦及腦膜充血ノ患者ニ相通シテ、一般ナル症候ヲ論列スル  
 ハ、容易ナラス、即チ其誘因、充血ノ度及ヒ、年齡ノ異ナルニ從テ、變換シ、或  
 ハ、腦刺衝ノ徵候著シルシキアリ、或ハ、腦壓迫ノ徵候擢ニスルアリ、蓋シ  
 通常甲症ノ乙症ニ先驅スルハ、通規ナリト雖モ、或ハ直チニ沈抑症ヲ以



テ起ルアリ殊ニ滞留性充血ニ於テ然リトス顔面多少赤色ヲ呈ハシ一側若クハ他側ノ頰ニ一過ノ潮紅ヲ來タシ眼結膜充血シ衄血ヲ發シ瞳孔收縮シ頭蓋尙未タ癒合セサル者ニ於テハ前頰門甚シク隆起シテ搏動シ頭熱、就中、額、後頭、灼熱シ直チニ啼泣忿怒シ或ハ直チニ狂暴興奮シ羞明、惡心、嘔吐ヲ起シ成長スル小兒ニ於テハ頭痛、謔語ヲ發シ音響ノ感格甚シク睡眠安穩ナラスシテ屢驚起シ切齒シ輕易ノ筋肉痙攣若クハ全身痙攣ヲ起スハ腦刺衝ノ徵ニシテ矢啞嗜眠、困睡ノ狀態、精神使役ノ厭惡、頭部ノ壓重、瞳孔散大、暫時ノ麻痺、呼吸困難、脈細數ハ腦沈抑ノ徵ナリ

腦及腦膜ノ充血ハ往々其發スルヤ卒然ニシテ其消散スルモ亦迅速ナルアリ然レモ頑固ナル原因ノ感動ニ由リテ連綿シ上ニ論スル諸症ヲ起スアリ吾人曾テ百日咳ニ於テ此ノ如ク連綿シ若クハ頻回再感スル充血ノ適例ヲ目撃セリ即チ其經過中病兒多クハ險症ノ峰起スル滞留性充血ヲ起ス者トス

腦及腦膜充血ハ治癒ニ轉歸スルコト尤モ多シト雖モ其小兒ノ腦ニ於テ危險ナルコトヲ忽カセニセス必ス炎性滲出、血液漏出ニ轉歸シ得ヘキニ注目ス可シ

原因腦及腦膜ノ充血ハ血管ノ弛緩、脈管運動神經ノ麻痺ヨリ起リ或ハ腦質ノ弛緩ヨリ起リ或ハ血質ノ變換、血液中毒性充血ヨリ起リ或ハ血行ノ障礙ヨリ起リ或ハ稀レニ血管ノ局處患恙ヨリ起ル但シ血管ノ脂化ハ既ニ小兒ニ於テ見ル所ナリ

以上論スル甲原因若クハ乙原因ノ感入スルニ從ヒ充血ヲ區別シテ實性腦灌漑及虛性滯溜性充血トナス實性充血ハ或ハ體温亢進ノ爲メニ熱性諸患ニ起リ或ハ齒牙發生ノ際ニ起リ或ハ劇熱ノ感受、日射ニ起リ或ハ過度ノ精神勞動ニ起リ或ハ急性傳染諸患、例ハ猩紅熱、麻疹、痘瘡、室扶斯、實布希里質斯ノ經過中ニ起ル、猩紅熱、麻疹等ニ於テハ血液ノ中毒ノ變化ノ外更ニ血温増盛スル者ナリ或ハ殊ニ身體發育期ニ於ル精神ノ刺衝モ亦急性腦充血ノ誘因トナル或ハ又稀レニハ亞兒、箇兒性飲液



ニ耽リ若クハ麻醉藥ヲ服スルヨリ起ルアリ而シテ淤溜性腦充血、虛性  
 腦充血ハ或ハ難産ノ爲メニ初生兒ニ起リ或ハ小血行、或ハ肺ヨリ心ニ  
 至リ或ハ心ヨリ肺ニ至ルノ障礙ヨリ起リ或ハ喉頭格魯弗、百日咳、格魯  
 弗性若クハ加答兒性肺炎、劇性ノ胸膜炎、滲出、先天性心臟病、若クハ後天  
 性心臟瓣膜病、仰儀病性胸殼變換ヨリ起リ且此等ノ病ニ由リテ其充血  
 保續セラル、或ハ又頸腫瘍大血管ニ近接セル水脈腺ノ肥大、及扁桃腺ノ  
 強キ肥大ハ腦ヨリ靜脈血ノ還流ヲ器械的ニ妨クテ虛性腦充血ヲ起  
 ス、或ハ又便秘、肝腫脹、劇甚且連綿ノ弛張性筋痙攣、及慢性筋痙攣モ亦時  
 トシテ然ルコトアリ

鑑別此疾ヲ腦ノ重患ト誤診セサラント欲セハ宜シク以上ノ諸症ニ兼  
 テ其原因ニ注目ス可シ蓋シ其原因ノ詳ナルト其症候多クハ一過コシ  
 テ變換スルノ徵アルト危篤經久ナル運動性障礙ノナキト、殊ニ神經系  
 ノ局處ニ於ル、同時ニ他病ヲ證見スルカ若クハ腦患暫ク經過スルノ後  
 直チニ他病ノ發露スルトニ由リテ多クハ判然鑑別スヘシ然リト雖ト

モ殊ニ一歳乃至三歳ノ小兒ニ於テ腦症ヲ其初起ニ發見スルハ時トシ  
 テ鑑別上ノ一大難事ナルコトアリ

豫後充血ノ原因唯一過コシテ輒ク除却ス可ク、或ハ血行ノ障礙直チニ  
 回復平均スルヲ期ス可キモノハ、預後凡テ佳ナリト雖モ之ニ反シテ連  
 綿感動シ生命ヲ殞ス可キ腦變化ノ恐アル状態ヨリ起リ且之ニ由リテ  
 充血ノ保續セラル、者ハ不佳ナリ又血液中毒性腦充血及日射性腦充  
 血ハ瞬間ニ生命ヲ殞ス可キ者トスレハ實性腦充血ハ、虛性腦充血ニ比  
 スレハ豫後佳ナル者ナリ

療法腦及腦膜充血ノ療法ニ二般ノ別アリ曰根治法曰姑息法是レナリ  
 曖昧決シ難ク若クハ危急ナル者ニ於テハ往々先ツ姑息法ヲ行ハス  
 ハアル可ラサルアリ即チ凡テ障礙トナル衣類、緊結スル帶等ヲ脱スル  
 ノ後就中緊要ナルハ頭ヲ高クシ風氣ノ流通スル寒涼ノ室内ニ靜臥セ  
 シムルナリ頭部ニ寒捲法ヲ施シ氷帽ヲ被ラシメ芥子精ヲ塗擦シテ皮  
 膚ニ誘導法ヲ行ヒ醋泥若クハ山苜菜泥ヲ以テ下肢ヲ包裹シ兼テ頻回



頭部ニ滴浴法ヲ行ヘハ多クハ治癒ノ効ヲ奏スル者ナリ又刺戟下泄瀉腸法下劑例ハ甘汞〇〇四乃至〇〇八ヲ數回頓服セシメ若クハ維也納瀉利水ヲ與フレハ眞ニ治癒ヲ扶クル者ナリ搐搦ヲ起ス者ニハ亞鉛花每服〇〇二乃至〇〇四ヲ與ヒ或ハ甘汞〇〇四乃至〇〇八ヲ伍シテ與フ可シ瀉血ノ小兒ニ禁ス可キハ固ヨリ論ヲ待タヌ又劇甚危急ナル沈抑ノ徴ヲ發スル腦充血例ハ日射劇甚ナル百日咳ノ發作蔓延スル肺炎、初生兒ノ假死ニ起ルカ如キハ宜シク礮砂加亞過子精葡萄酒龍腦麝香温浴熱醋摩擦等ノ衝動藥ヲ投スヘシ而シテ根治法ハ其原因ヲ探究シ力可及時ハ内服藥若シハ外科手術ヲ以テ之ヲ除クヘシ

〔三〕頭腔出血 腦膜及腦出血 Haemorrhagia-meningum et cerebri.

初生兒ニ屢起ル腦膜卒中ハ姑ク之レヲ措キ本來頭腔出血ハ小兒ニ稀レナル者ナリ其理蓋シ脈壁ノ破裂シ易キノ性及運血力ノ脈壁ニ於ル權衡不適ハ大人ニ比スレハ頻數且ツ劇甚ナラサルニアリ即チ卒中ニ最多ノ原因ヲ占ムル糜爛性變質劇甚ノ心臟異常腦瘦削及腦炎等小兒

ノ時期ニ發スルハ只稀ニ見ル所ナリ

頭腔ノ出血ヲ解剖學ニ基キ大別シテ二トナス曰ク腦膜間出血曰ク腦出血是レナリ甲ハ軟腦膜及ヒ蜘蛛膜ノ空洞中ニ起ル者ヲ謂ヒ乙ハ腦實質ニ起ル者ヲ謂フ然レモ兩種相合併スルヲアリ而シテ腦質卒中ニ二別アリ曰ク髮細管出血曰ク出血竈是レナリ

病休解剖腦膜間出血ハ小ナル豌豆ノ如クナルアリ或ハ大ナルターレ爾獨逸銀ノ如ク若クハ之ヨリ以上ナルアリ腦ノ根底殊ニ後葉ベドナル氏ニ起ルチ尤モ多シトス然レトモ稀レニハ大腦ノ穹窿部ニ發スル

アリ而シテ其經過スル時間ノ長短ニ從ヒ或ハ尙依然流動スルアリ或ハ凝固スルアリ或ハ一半若クハ大半吸收セラル、アリ或ハ唯鏽樣茶褐色若クハ汚黃色ノ色素ヲ遺スアリ

蜘蛛膜空洞中ノ出血ハ往々著ルシト脊髓ノ蜘蛛膜間ニ達スルアリ又極メテ稀レニ血液滲出シテ囊狀ヲナスアリ予曾テ剛腦膜炎ノ患者ニ於テ此ノ如キ滲出ヲ目撃セリ



髮細管出血ハ小帽子針頭乃至稜子大ナルアリ或ハ流解シ易キ血點若クハ細線トナリテ腦ノ灰白質若クハ白髓質ニ起ルアリ且往々白髓質軟解ス

出血竈ハ長形ヲナシ或ハ圓形ヲナシ其大サ一様ナラス扁豆大乃至胡桃大ヲナス單純ナルアリ錯雜スルアリ或ハ腦ノ中心ヲ占ムルアリ或ハ外表ニアルアリ

腦室出血ハ極メテ稀ナル一症ナリ又滲出セシ血液ノ退行變形ヨリ起ル所ノ卒中性肝腫、囊、癥痕ハ古來小兒ノ病體解剖ニ罕レニ見シトアリ或ル患兒殊ニ初生兒ニ於テハ腦卒中ノ外別ニ證見ス可キ腦變化ナシト雖モ他ノ患兒ニ於テハ之ト一齊ニエムボリト、トロンボ一セ、腦炎、剛腦膜炎、腦水腫、腦腫瘍若クハ腦瘦削ノ併發セシテ見シトアリ或ハ又腦出血ト親密ニ相關涉シテ原因トナリ若クハ之カ誘因トナル所ノ他臟ノ疾病ヲ見ルトアリ

證候及經過小ナル腦膜間出血ハ毫モ病狀ニ驗ス可キ患恙ヲ見ス設

令之レアルモ輕微ナルヲ通則トスレモ之ニ反シ大ナル出血殊ニ蜘蛛膜ニ發スル者ハ腦壓迫ノ諸症ヲ起ス即チ小兒臥シテ微睡狀ヲナシ號泣セス或ハ微ク泣聲ヲ放テ顔面淺藍色ヲナシ皮膚厥冷シ前大頤門緊張シテ多少穹窿シ初メニハ其搏動劇甚ナレモ終リニハ微弱トナリ瞳孔劇ク縮小シ角膜少ク混濁シ加之軟化シ眼目震動シ四肢全ク麻痺シ或ハ聊カ攣縮シテ時々肉跳ヲ起シ脈細徐、呼吸寬慢淺吸氣ト深吸氣ト相交換シ上固常ノ如ク或ハ頻回下利嘔吐ヲ起シ吸乳シ難ク且直チ乳房ヲ放却シ或ハ牙關緊急シテ全ク之ヲ含ムコト能ハス此腦膜間出血ノ經過ハ四日乃至十八日トス然レモ他ノ合併病ニ由リテ差違アルハ固ヨリ明ナル所ナリ

出血竈ハ初生兒及乳兒ニ於テハ稀ナリト雖モ大兒ニ於テハ多ク見ル所ニシテ忽然身神爽快ノ際ニ起リ或ハ頭痛、刺衝機大亢進、睡眠不安等ノ症候前驅シテ發ス然レモ概シテ之ヲ論スレハ腦出血ノ小兒ニ於ルヤ壯年及老年ニ於ルカ如ク危篤ノ患恙ヲ以テ起ルハ稀レナリト過ナ



ル人事不省、知覺微弱若シハ全失筋ノ一系殊ニ半身ノ麻痺、輕易若シハ劇甚ナル搖擲性ノ肉跳、失語、嘔下、困難、暴急、心跳、寬慢、呼吸不整ニシテ、聲ヲナスハ腦出血ノ症候ナリ然レモ多少差違アル者トス

小兒時ノ原發性腦出血ハ稀レニシテ其症候ハ合併セル他ノ腦諸患ノ爲メニ屢増加シ且ツ變換スル者ナリ又髮細管出血ハ其大サ微少ナレハ隨テ之ニ應スル症候モ亦僅少ナルヲ以テ生前之ヲ徵知スルヲ能ハサレモ其大ナル者ニ於テ予ハ往々病初ニ搖擲大不安ヲ起シ嗜眠直ニ之ニ繼發シ死ニ至ルマテ連綿スルヲ目撃セリ又或ル病兒ニ於テハ麻痺ノ起ルニ至リテ父母初メテ其疾病ナルヲ察スルアリ腦出血ノ繼發病ハ腦炎、出血、竈周圍ノ軟化、及多少頑固ナル麻痺ナリ

原因 年齡ヲ以テ論スルニ腦出血ハ初生兒及初生ノ第一週ヨリ第四週ノ間ニ於テ尤モ多ク之ヨリ可婚期ニ至リ頗ル稀レナリ小童ハ之ニ罹ルヲ稍少女ヨリ多シ出血ノ近因ニ屬スル細脈管ノ破碎ハ近誘因若クハ遠誘因ニ由リテ發ス蓋シ腦ノ髮細管脂化ハ腦卒中ノ原因中稀レナ

リト雖モ肥健若クハ榮養過度ナル小兒ニ全ク前兆ナク或ハ輕易ノ前兆アリテ出血ノ徵ヲ發スルハ則チ此原因ヨリ起ル者ナリ腦及腦膜充血、腦竇及腦膜靜脈ノトロンボジヤ、心臟異常若クハ色素ノ游泳ヨリ起ルエムボリ、及腦腫瘍、腦炎、剛腦膜炎、腦水腫、分娩ニ於ルカ如キ頭蓋骨外傷ハ其近誘因ナリ假死、大ナル動脈幹及ヒ心臟ノ先天性異常、後天性心臟異常、先天性甲狀腺及胸腺肥大、氣管枝腺、殊ニ心臟ニ近接セル者、肥大、及其乾酪化、百日咳、初生兒ノ牙關緊急、破傷風、腹膜炎ニ繼發スル臍壞疽、蛋白性腎臟炎及ヒ膿毒症、猩紅熱、麻疹、痘瘡、室扶斯、紫斑病ノ如キ血液變換ハ其遠誘因ナリ又急性傳染病ハ腦充血ニ兼テ動モスレハ腦脈管壁ノ榮養障礙、脂化ヲ起サ、ルヲ得ス予ハ僅々ナレモ自ラ之ヲ目撃セシテアリ蓋シ急性傳染病ニ於テハ他臟、肝臟、心臟モ亦急性脂化ヲ發ス

豫後 豫後ハ腦充血ナラシ推察スルカ或ハ之ヲ確定セシ時ハ〔異常容〕

〔其原因、症候、劇易、及病兒ノ體質ニ注目スルヲ緊要トス蓋シ小ナル〕

出血ハ生命ヲ殞スノ患ナク快復ス可シト雖モ大ナル出血ハ必常死亡



ニ陥ル者ナリ殊ニ初生兒ノ腦膜間出血ニ於テ然リトス予カ曾テ實驗セシ所ニ據ルニ出血竈ニ罹ルノ後麻痺ヲ遺シ二年乃至三年ヲ經テ初メテ癒ヘシ者僅々二三名ニシテ其他ハ百方治療ヲ施セモ効ナク麻痺セシ四肢次第ニ瘦削セリ

療法小兒腦出血ノ近因及遠因コトハ注目スレハ既ニ其療法毫モ偉効ナキヲ自ラ明カナリ蓋シ腦出血ノ原因ヲ除却スルヲ極テ僅微ナルカ或ハ全ク能ハサルカ故ニ姑息法ヲ行フノ外他策ナシ即チ腦充血及腦膜充血ニ應用セシ藥石ヲ投ス可シ豫防法トシテ凡テ出血ヲ起シ且之ヲ持續セシムル原因ヲ除却ス可シ又後患ナル麻痺ノ療法ハ本條ニ讓リテ茲ニ論セズ

〔四〕腦竇トローボンセ Hirsinus thrombose

剛腦膜竇凝血ノ小兒ノ時期ニ發スルヤ原發ナルアリ繼發ナルアリ而シテ判然病狀ニ認ム可ク若クハ疑察ス可キ固有病機ヲ呈ハスアリ或ハ唯危篤ナル腦病ノ併發症若クハ繼發症ナルアリ爲メニ多少症狀ノ

混錯シテ固有徵候ノ缺クルコトアリ

病體解剖通常剛腦膜竇ヲ膨滿擴張スル凝血ハ質緻密ニシテ粗ホ堅ク茶褐色若クハ茶褐黄色ノ凝塊ニシテ其表面或ハ滑澤或ハ不平ニシテ稍凹凸シ其游離セシ末端或ハ圓形ヲナシ或ハ圓錐狀ヲナシ其全徑若クハ其一點脈管ノ側壁ト緊ク繋着シ或ハ寬ク連結ス往々凝塊ニ由テ其靜脈ノ變色軟化膿潰加之閉塞ヲ起ス者トス而シテ凝塊ノ部位ハ實驗ニ據ルニ横竇直竇ニ尤モ多ク縱竇ニハ稀レニシテ海綿竇岩狀竇圓狀竇ニハ更ニ稀レナリ(ゲルハルド氏)予カ實驗セシ腦竇トロンボーゼノ病兒十七名中七名ハ縱竇二名ハ縱竇及横竇一名ハ縱竇横竇S狀竇五名ハ横竇二名ハS狀竇ニアリ  
以上十七名中腦膜靜脈ノ多少填塞セシ者五名慢性腦水腫ヲ發セシ者五名及剛腦膜炎ヲ發セシ者四名内血瘍ヲ發セシ者二名腦膜間卒中ヲ發セシ者二名頸靜脈填塞ヲ發セシ者一名肺ニエムボリーノ轉移セシ者一名ナリキ



其他急慢二性ノ胃腸加答兒、全身結核、岩狀骨ノカリース、氣膿胸、肺壞疽、  
佝僂病、肺炎及ヒ既ニ快復セシ頭蓋骨傷ハトロンボーセチ起ス患兒ニ  
見ル處ナリ

症候單純腦竇トロンボーセ即チ同時ニ危篤ナル腦患ノ合併セサル者  
ニ於テハ頭内血行ノ障礙ヨリ起ル一二ノ症候ヲ認ム可シト雖モ之ニ  
反シテ他ノ腦患ヲ挾ム者ニ於テハ之ヲ發見シ難シ或ハ全ク發見スル  
能ハス顯著ナル單純腦竇トロンボーセハ虛脫下利、コレライシフアンツム小兒霍亂、急性胃腸  
加答兒、慢性腸腺炎ノ後ニ見ル處ニ全身麻痺、頭骨疊陷、大顛門陷沒、神  
識朦朧、嗜眠、困睡、及腦壓迫ノ徵候、例之、顔面神經及動眼神經ノ區域ニ於  
ル麻痺、項背筋強直、間歇性全身痙攣等ノ外、猶血行器ノ一部ニ腦竇トロ  
ンボーセチ診斷ス可キ特異ノ患恙ヲ發ス

左ノ實驗五條ハ諸家ノ決定スル處ナリ

〔一〕橫竇多クハ之ト共ニ下岩狀竇即チ内頸靜脈ノ起始填塞スレハ概シ  
テ頸圍ノ靜脈ニ血液大ニ充滿スト雖モ患側ノ外頸靜脈ハ健側ノ外頸

靜脈ニ比スレハ空虚ナリゲルハルド氏及フギユニノ氏

〔二〕凝塊若シ顛顛骨ノ乳嘴突起ニ於ルサントリコ氏排泄場ヲ透過シテ  
橫竇ヨリ耳後靜脈ニ波及スル時ニハ耳後ニ一箇ノ區限スル水腫様ノ  
硬腫瘍ヲ起スグリーシンゲル氏モス氏

〔三〕海綿竇ノ填塞ハ此竇中ニ血液ノ大半ヲ注ク所ノ眼靜脈ニ作用ヲ發  
シ之ニ由リテ眼底靜脈ノ充血ヲ起ス即チ檢眼鏡ヲ以テ之ヲ發見ス可  
シ其他輕易ノ眼球突出フギユニノ氏上眼瞼若クハ全半顔ノ浮腫ゲノ  
ウヅルレ氏ヲ起スコアリ

〔四〕海綿竇ノ凝塊ハ其直達壓迫ニ由リテ第五對神經ノ第一枝及第三對  
神經眼動神經ノ刺衝亢進若クハ麻痺症ヲ起スホイブテル氏

〔五〕上縱竇ノ凝血ニ於テハ顔面蒼色トナリ大顛門ヨリ顛顛部ニ達スル  
靜脈枝別即チ大顛門ヨリ顛顛部ニ走ル所ノ靜脈網擴張シ額及鼻ニ汗  
ヲ發シ衄血ヲ起スツシ氏ノ說予モ亦屢之ヲ確證セリ

殊ニ慢性虛脫病ニ於テトロンボーセノ初起ヲ確定スルハ容易ナラス



其經過緩カニ一日ヨリ三週ニ至ルノ差アリ其他症狀、膿毒症ニ均シキ  
アリ或ハ腦貧血ニ類スルアリ或ハ腦質炎ニ類スルアリ而シテ其轉期  
ハ必常死ニ趣ク然レモグリーシソグエル氏及他氏ハ快復ニ趣クテ目撃  
セリト云フ予カ實驗ニ由ルニ唯頗ル一局處ナル凝塊ニ於テ之ヲ目撃  
セシ而已

原因年齢ヲ以テ論スルニ第一二歳ヲ多シトス或ハ又初生兒ニ於テ之  
ヲ見ルコトアリ

予カ實驗セシ患者十七名中、一歳ノ者六名、二歳ノ者五名、三歳ノ者三名、  
四歳ノ者一名、五歳ノ者一名、九歳ノ者一名ナリシ  
腦質トロンボーセノ原因或ハ全身血行ノ寛慢若クハ靜脈壓迫ヨリ起  
ル所ノ局處血行障礙ニアリ或ハ小兒霍亂コレラニ於ルカ如キ血液濃厚ニア  
リ或ハ剛腦膜炎ニアリ或ハ頭蓋ノ外傷及頭蓋骨、殊ニ岩狀骨ノカリ  
スニアリ是ヲ以テ腦質トロンボーセヲ大別シテ虛脱性及ヒ炎性ノ二  
種トナス即チ急慢二性ノ胃腸加答兒、結核、腺病、佝僂病、氣膿胸、膿毒、及ヒ

小兒ヲ衰弱セシムル虛脱諸病ヨリ起ル者ハ甲種ニ屬シ外傷、剛腦膜炎、  
及岩狀骨ノカリースヨリ起ルモノハ乙種ニ屬ス

療法時機ニ投シテ豫防法ヲ行ヘハ多クハ尙ホ虛脱性トロンボーセヲ  
未發ニ防禦ス可シ即チ凝塊ノ未タ起ラサルノ前凡テ其原因トナル疾  
患ヲ抑制スルヲ要ス虛脱性トロンボーセニ於テハ衝動藥、赤葡萄酒、肉  
羹汁、生肉、肉汁ヲ與ヒ既ニ斷乳セシ小兒ニ於テハ乳母ヲ添ヒ醋酸鉄丁  
幾、麝香等ヲ試用シ炎性トロンボーセニ於テハ消炎法ヲ稱用ス可シ然  
レモ概シテ之ヲ論スレハ効績甚タ少シ

〔五〕剛腦膜炎 Pachymeningitis 及剛腦膜血瘍 Hematom der Dura mater.

剛腦膜炎ヲ分チテ内外二性トナス其尤モ多キハ内性ナリ而シテ原發  
性ノ者ハ甚タ稀レコシテ通常他患ト相伴フ

病體解剖外剛腦膜炎ニ於テハ剛腦膜ノ外面ニ多少發生スル血管網、單  
一ナル小斑點及大血斑ノ外更ニ時トシテ少量若クハ多量ノ膿汁聚積  
ヲ見ルアリ又殊ニ頭蓋骨ノ損傷ヲ兼ヌル際ニハ往々血液ニ富ミ網狀



チナス所ノ骨肥厚チ起シ剛腦膜チ剝離スレハ所在之ニ附着シ甚シキハ全ク化骨スルアリ

内剛腦膜炎ノ正徴ハ殊ニ血管ノ微細ニ纏絡スル義膜チ生シ其義膜間ニ小ナル溢血若クハ大ナル溢血チ見ル是レナリ又剛腦膜靜脈ノ一枝及靜脈竇中ニ一半ハ黯赤色一半ハ銹茶褐色ナル凝塊チ含ムアリ岩狀骨カリースヨリ起ル者ハ殊ニ銹茶褐色ノ凝塊チ起ス又剛腦膜炎ノ軟腦膜ニ累及シテ炎症ノ徴チ起スアリ

剛腦膜ト軟腦膜ノ間ニ發スル大溢血ハ血瘍チ起ス多クハ腦ノ穹窿部ニ發スレヒ會テ予カ六歳ノ一小兒ニ目撃セシカ如ク稀レニハ頭底ニ發スルアリ此小兒ニ於テハ幅サ三寸ニシテ扁圓形チナス囊チ前頭窩ニ發シ其囊壁粗ホ厚ク中ニ血水様ノ液汁チ含ミ著シク腦チ壓迫シテ其瘦削チ起セリ稀レニハ剛腦膜炎ニ兼テ小腦ニ膿瘍チ起ス者アリ  
症候及經過剛腦膜炎ノ症候ハ本病チ確然辨別ス可キ特徴チ有スルコトナシ其炎症ノ急慢ト出血ノ多少ト其發起ノ急漸トニ從ヒ病狀一様

ナラス病初ニハ其症候腦充血若クハ單純腦膜炎ニ類シ更ニ經過スルカ若クハ瀕死ノ際ニハ腦水腫ニ均シ大兒ハ頭痛チ訴ヒ外傷ニ於テハ損傷スル頭部ニ頭痛チ發シ内耳炎ニ於テハ其病側ニ頭痛チ起ス一歳乃至三歳ノ小兒ニ於テハ不安チ起スト頻回頭チ撮ムト號泣及ヒ泣聲チ發スルトニ由リテ頭痛チ疑察ス可ク更ニ經過スレハ惡心嘔吐眩暈輕易ノ搖擲失神嗜眠困睡チ起ス又驟カニ血液溢出スル者ハ瞬間ニ死チ致ス然レヒ時トノ全ク此諸症ナク生前ニハ嗜眠ノ外更ニ他症チ認メサルアリ其經過或ハ短クシテ一二週ナルアリ或ハ長クシテ三四月乃至之ヨリ以上ナルアリ又剛腦膜ノ血瘍ハ多クハ腦出血竈ノ徴チ發シ且時日チ期シテ癲癇狀ノ痙攣チ起ス會テ予カ實驗セシ齡六ヶ月ノ小兒ハ此ノ如キ痙攣初メ唯毎二週乃至毎三週一發シ次チ毎週一發シ終リニ毎日一發シ毫モ麻痺症チ挾マス終リノ二週ニ於テ結核性腦膜炎ノ病狀チ發セリ

原因剛腦膜炎及ヒ血瘍ノ原因中ノ主タルモノハ外傷ナリ其他頭蓋骨



殊ニ岩狀骨ノカリース、頭皮炎、頭皮化膿、顔面羅斯、膿毒全腦肥大、全腦硬結ヨリ起リ或ハ肺病腸患若クハ佝僂病ノ爲メニ瘦削セシ小兒ニ於テハ虛脱性、トロンボーシスニ由リテ誘起セラレ或ハ急性傳染病ノ經過中ニ起ル從一歲至四歲ノ小兒尤モ屢之ニ罹ル然レモ男女ノ差別アルヲナシ

療法鑑別ノ確實ナラサルト多クハ死亡ニ陥ルトヨ由テ療法ハ姑息ニ過キス藥石ハ軟腦膜炎及腦水腫ニ用フ可キモノヨリ外ナラス乃チ頻回寒暄法ヲ行ヒ皮膚及腸管ヲ誘導シ搔癢ヲ起ス者ニハ亞鉛花、コロラルヒメラート、阿片ヲ投ス可シ然レモ多クハ効績ナシ虛脱スル者ニ於テハ良好ノ榮養ニ注意シ經過ノ寛慢ナル者ニハ鐵劑、幾那劑ヲ投ス可シ

〔六〕軟腦膜炎 (單純腦膜炎) Meningitis simplex Leptomeningitis.

單純腦膜炎ハ比較的少ナキ疾患、腦病患者一千名中大約八名乃至十名ニシテ頗ル稀レニ特發シ多クハ他病ニ繼發ス

病體解剖、腦ノ半圓球ノ穹窿部ニ起ルヲ尤モ多シ然レモ亦往々腦底ニモ解剖的變化ヲ起スヲアリ軟腦膜ノ血管甚シク充血シ所在ニ血斑ヲ起シ擴張スル大靜脈ノ經過ヲ沿フテ少量若シハ多量ノ滲漏物漿液狀醋漬肉狀膿狀ヲナシ多少硬シテ綠黃色ヲ帶ヒ以テ紆廻間ニ波及ス又劇性ノ者ニ於テハ腦ノ穹窿面及根底面ニ厚サ一リニ一ノ膿皮ヲ被リ宛モ帽ヲ被ルカ如シ又腦ノ側室ニ漿液狀稀レコハ膿狀ノ溢出ヲ起スヲアレモ或ハ殆ント空虚ナルアリ又腦底ノ滲出物ハ脊髓膜ニ連及シ穹窿部ノ滲出物ハ往々腦ノ灰白質ヲ侵シ且灰白質劇シク充血シ若クハ軟化シ又經過寛慢ナル者ニ於テハ滲出物乳狀ニ混濁シテ硬塊若クハ乾酪塊ニ化スルアリ又靜脈竇中ニ一半凝固スル血液ヲ含ミ或ハ凝塊ヲ見ルヲアリ

症候概シテ之ヲ論スルニ單純腦膜炎ニ於テハ諸症迅速且ツ激烈ニ起ルヲ通則トス即チ榮養尙ホ佳良ナル者若クハ既ニ虛脱病ニ由リテ衰弱シ者忽然人事不省トナリ劇性及輕易ノ搔癢死ニ至ルマテ連綿シ



加之三十六時乃至四十八時ノ後死亡ニ陥ル而シテ此搖擗困睡性ノ病  
 形ハ乳兒ニ尤モ多シ此症候ト一齊ニ全身發熱シ頭熱甚シク面色或ハ  
 青ク或ハ赤ク變換定リナク切齒シ大不安ヲ起シ屢嘔吐ヲ發ス搖擗弛  
 張スレハ小兒大ニ衰弱シテ失神ヲ來シ或ハ眞ノ困睡ニ陥リ頻回ノ搖  
 擗ニ由リテ打起セラル又大兒ニ於テハ病初往々戰慄ヲ發シ直チニ之  
 ニ次クニ劇甚ノ頭痛嘔吐眩暈羞明ヲ以テシ瞳孔初メ收縮シ終リニ散  
 大ス又乳兒及嬰兒ニ於テハ屢両手ヲ頭部ニ送り楚痛ノ號叫若クハ微  
 泣聲ヲ放ツ病初ニ於テハ尙神識ノ存スル休憩時間アリト雖モ神識直  
 チニ消却シテ終始醒覺セス且ツ搖擗ト局所若クハ蔓延性ノ麻痺ト相  
 伴フ  
 額門尙未ク縫合セサレハ多少隆起シテ搏跳シ沈抑症起ルニ至リ再ヒ  
 稍陷没フ脈搏初メ頻數ナレハ沈抑症増進スルニ隨ヒ再ヒ寛徐トナリ  
 且ツ呼吸不整トナル然レモ結核性腦膜炎ニ於ルカ如ク甚シカラス且  
 必發セス又肚腹ノ形狀多クハ變ヒス或ハ甚シク鼓脹狀ヲナシ或ハ柔

軟ナリ或ハ稍沈陷ス通常便秘スレモ平常ノ如ク毎日上固ス或ハ泄瀉  
 スルアリ

嬰兒ニ於テハ單純腦膜炎此ノ如ク激烈ナル搖擗形ヲ取ラス時トシテ  
 唯劇甚ナル沈抑困睡性ノ徵ヲ呈ハシ乃チ甚ダシク失神シ次第ニ困睡  
 ニ陥リ死前二三時初メテ二三回搖擗ヲ發シ或ハ全ク之ヲ見ス此ノ如  
 キ小兒ヲ剖觀スレハ夥シク滲出物ヲ見ルニ由リテ其沈抑諸症ノ劇甚  
 ナル所以ヲ證明ス可シ又化膿性殊ニ外傷性腦膜炎ニ於テハ時トシテ  
 少量若クハ多量ノ膿汁一側或ハ兩側ノ耳ヨリ漏出シテ激烈ナル刺衝  
 症候寛解スルヲアリ單純腦膜炎ノ經過ハ二日乃至十四日ノ差アリ治  
 癒ニ轉期スルハ稀レニシテ設令治癒スルモ全治ニ趣クハ稀レナリ而  
 シテ精神ノ障礙耳聾失明攣縮麻痺ハ憐ム可キ續症ニシテ動モスレハ  
 畢生連綿ス

原因單純腦膜炎ノ小兒ニ起ルヤ從初生至可婚期其年齡ノ別ナク又男  
 女ノ別ナシ或ハ母胎ニ舍ルノ間之ニ罹ルヲアリ而シテ原發單純腦膜



炎ハ榮養佳良若クハ不良ナル小兒ニ於テ日射胃寒外傷過度ノ精神刺  
 衝ヨリ起ルト雖モ既往ノ状態并ニ現症ヲ検査スルモ更ニ其證據ナキ  
 コト屢之アリ繼發性腦膜炎ハ顔面及頭髮部ノ羅斯急性發疹病室扶斯  
 肺炎稀レコハ武雷土病ノ經過中、就中初生兒及ヒ乳兒ノ膿毒、眼窩骨膜  
 炎、骨膜炎、内耳炎、腦漏、剛腦膜炎、脾日炎ニ發ス予ハ曾テ妊娠間母胎ノ疾  
 病、痘瘡及ヒ痔熱ヨリ胎兒腦膜炎ノ起ルヲ目撃セシコアリ  
 鑿別忽然タル發顯迅速ナル經過ニ兼テ既往症及原因ヲ探究スレハ鑿  
 別ス可シ腦病徐々ニ發シ兼テ腺病若クハ結核ノ徵アレハ必ス單純腦  
 膜炎ニアラスノ結核性腦膜炎ナリ又腦膜炎ハ疾ノ第一日ニ於テ室扶  
 斯ニ疑似スレモ室扶斯ハ蓄薇疹ノ發見、脾臟腫大、氣管枝炎、泄瀉、日哺潮  
 熱、朝間弛熱ニ由リ判然之ヲ辨別ス可シ又病初ニ於テ腦性肺炎ト誤診  
 ス可キコアレモ理學診斷法及ヒ肺炎ノ劇熱ニ由リテ之ヲ辨別ス可シ  
 又腦充血ハ腦膜炎ノ如ク劇甚ナラス且ツ速ニ消散ス又尿毒性腦患ハ  
 其病狀時トシテ單純腦膜炎ノ如クナルコアレモ其特徵ナル尿閉ト水

腫トニ由テ之ヲ辨別ス可シ又眞ノ困睡性單純腦膜炎ヲ腦貧血ト辨別  
 スルハ容易ナラスト雖モ其原因、病兒ノ習慣、及ヒ腦膜炎ニ於テハ其熱  
 症、腦貧血ヨリモ劇甚ナルニ由リテ辨別ス可シ

豫後治癒ニ轉期スルハ稀レニシテ死亡ニ陥ルヲ通則トス是ヲ以テ治  
 癒ヲ期ス可キ者モ通常其豫後ハ疑ハシ又膿毒症ノ經過中ニ起レハ必  
 ス死亡ニ陥ル治癒ニ趣クモ全治セス後患トシテ精神、運動及ヒ五官ノ  
 機能障礙ヲ遺ス

療法病初ニ於テハ消炎法ヲ行フヘシ瀉血ハ全身及ヒ局所ノ別ナク全  
 ク効ナシ殊ニ虛弱、脫亡、貧血性ノ小兒ニ於テハ痛ク禁忌ス可シ寒捲法  
 ヲ行ヒ氷帽ヲ被ラシメ時々滴浴法ヲ行ヒハ治癒ノ効ヨリモ寧ロ安靜  
 ノ効ヲ奏ス頭髮ヲ剃リテ水銀膏、沃土加里膏、吐酒石膏ヲ塗擦スルモ疾  
 ノ經過上ニハ毫モ確實ノ効ヲ奏セス沃度加里ノ内服モ亦然リ便秘ス  
 ル者ニハ下泄瀉腸法ヲ行ヒ維也納瀉利水、甘汞ヲ投シテ下泄シ謔妄甚  
 シ頻々搖擗ヲ起ス者ニハ麻布ヲ冷水ニ蘸シテ全身ヲ纏ヒハ間々安



靜ノ効ヲ奏ス殊ニ大煩悶スルモノニハ阿片ヲ與ヒコロラルヒダラ  
 ト二十センチヲ瓦蘭謨四十センチヲ瓦蘭謨乃至五十センチヲ瓦蘭謨ヲ頓服  
 セシメ莫兒非涅ノ内服及皮下注入法ヲ行ヒ以テ鎮靜ノ効ヲ試ムヘシ  
 又甚シク沈抑ノ徵ヲ發スル者ニハ衝動藥例之龍腦ヲ與ヒ或ハ麝香ニ  
 センチ瓦蘭謨乃至四センチヲ瓦蘭謨ヲ頓服セシム可シト雖モ必ス奏効  
 ナ期ス可ラス又膿毒症ヨリ來ル者ニハ規尼涅四センチヲ瓦蘭謨乃至八  
 センチヲ瓦蘭謨ヲ一日數回頓服セシムヘシ

極メテ身体ヲ安靜ニシ障病ノ諸件ヲ除キ病室ノ空氣ヲ交換ス可キハ  
 固ヨリ論ヲ待タヌ若シ腦膜炎慢性ノ經過ヲ取リ煩悶ノ諸症次第ニ緩  
 解スル時ハ直チニ有力ノ食料及強壯藥ヲ與フヘシ精神及運動機能ノ  
 障病ヲ遺ス者ニハ治療ヲ行フモ効績少ナク或ハ全クナシ

○〔七〕結核性腦膜炎 Meningitis tuberculosa.

軟腦膜殊ニ腦底軟腦膜ノ滲出物ニ兼テ結核顆粒ヲ生シ急性腦水腫ヲ  
 起スヲ以テ此疾ノ本性トナス結核性顆粒ハ原因ニシテ腦膜炎ハ結果

ナリ故ニ未ク腦膜炎及腦水腫ヲ起サ、ルノ前顆粒既ニ隱然トシテ現  
 存ス而シテ腦膜炎及腦水腫ヲ起サ、ル者ハ單ニ之ヲ粟粒狀腦膜結核  
 ト稱ス曾テ予カ實驗セシ腦患者四千二百九十二人中二百二十四名ハ  
 結核性腦膜炎ナリ

病體解剖眞ノ病的變化ハ腦底ニ起ル者ナリ即チ酢漬肉狀ニシテ黃灰  
 色ナル滲出塊腦底ノ軟腦膜ヲ被覆シ殊ニ視神經交叉ニ對スル處尤モ  
 甚シク此處ヨリ一方ハ延髓ニ向テ次第ニ減却シ一方ハ前上方ニ向テ  
 被覆ス少許若クハ無數ナル帽子針大ノ顆粒殊ニ大血管ノ系路ヲ沿フ  
 テ發シ血管ト相伴フテシルヒ氏溝中ニ至リ多クハ甚シク溝ヲ膠着セ  
 シムレベルド氏ノ說ニ據レハ此顆粒ハ小動脈ノ水脈囊ヨリ細胞ノ荒  
 蕪シテ生スル者ナリト云フ但シ此ノ如キ結節小腦ノ軟腦膜及大腦ノ  
 穹窿面ニ發スルハ稀レナリ腦室三倍乃至六倍擴大シ含容物增多シ或  
 ハ澄明ニシテ水ノ如ク或ハ聊カ混濁シテ細片狀ヲナシ腦室ノ連合部  
 多クハ軟化シテ破碎シ易ク腦室ノ被膜稀レニハ堅硬ニシテ抗抵ヲ起



多クハ寛鬆軟化シ容易ク剝離ス可ク往々結核性顆粒ヲ發シ或ハ出血竈ヲ起ス又腦室脈絡膜多クハ青白赤色ニシテ往々結核性顆粒ヲ以テ被覆セラル腦質白クシテ血液ニ乏シク小腦ノ實質ハ大腦ニ比スレハ貧血殊ニ甚シク剛腦膜竇中ニ一半ハ寛ク凝固シ一半ハ稍稠厚ナル血液ヲ見ル剛腦膜緊張シ腦面甚シク壓平セラレ腦紆廻及ヒ腦溝消滅シ腦室ノ天井隆張ス又時トシテ灰白質若クハ中樞神經節中ニ綠黃色ヲ帶ヒ豌豆大乃至鳩卵大ノ大炎竈ヲ見ルコトアリ又コンハイム氏ノ説ニ據ルニ腺肺、肝、脾ノ如キ他器ニ於テ結核、結核性及ヒ炎性竈ヲ認ムルノ外、尙ホ眼球脈絡膜ニ結核顆粒ヲ見ルコト屢々之レアリト云フ又稀レニハ腦結核ノ外、全身諸器中ニ毫モ結核性若クハ腺病性變換ヲ呈ハサル者アリ然ル時ニハ結核性腦膜炎ハ結核質作用ノ初發ト謂ハサルヲ得ス又黯赤色ノ筋及皮下蜂窠織ノ甚シキ乾燥ト胃軟化トハ往々見ル所ナレトモ必發症ニ非ス

症候及經過此疾ノ時期ヲ區別スルハ病體解剖學ニ於ルモ病床ニ於ル

モ適切セズ蓋シ此疾ハ多少徐々ニ起リ且ツ其症候初メ輕易ナレトモ醫士ヨリ之ヲ見レハ既ニ危篤ニシテ容易ナラサル者ナリ  
所謂前兆中、身體ノ羸瘦、皮膚ノ弛緩ニ兼テ尤モ明カナルハ舉動ノ著ルシク變換スル是レナリ即チ忿恚且ツ執拗放恣スル氣質、閑靜ナル居所ヲ嗜ミ、平素ノ嬉戲ヲ厭惡シ、劇甚ナル音響ニ由リテ驚縮シ、小心翼々慘然トシテ憂慮ヲ抱キ、聊カ身體ヲ勞動スルモ直チニ疲勞ヲ起シ、考慮ハ錯亂シテ減却シ、睡眠安穩ナラス屢醒覺シテ驚起號泣シ、頭痛ヲ發シ、項部強直シ、兼テ疼痛摯急シ、行步確實ナラス、且ツ平地ニ於ルモ蹉跌シ、食氣減却スル等ハ彼是相合シテ以テ前兆症ヲナス  
此ノ如キ前兆諸症二週乃至四週以上連綿スル後警戒スヘキ第一徵トシテ起ル者ハ惡心乾嘔ノ先驅ナキ一回乃至數回ノ嘔吐是レナリ間、末期若クハ死前ニ之ヲ起スコトアレトモ極メテ例外ニ屬ス小兒此時ヨリ至ク臥寐ニ就キ或ハ唯二三時間坐起ス食氣全ク消失シ渴甚シカラス頭痛増劇シ、號哭シ、顔面疼痛ノ狀ヲ呈ハシ、上脘怠慢シ若クハ頑固ナル便秘



ヲ起シ、間々結核性腸炎ヲ起シ、動モスレハ下利死ニ至ルマテ連綿スル者アリト雖モ極メテ例外ニ屬ス舌全ク乾燥スルハ稀レニシテ多クハ黃色若クハ汚白色ノ苔ヲ帶フ小便蓄少トナリ尿中ニ夥シク磷酸鹽ヲ含ム往々全身皮膚ノ知覺非常ニ過敏トナリ少ク之ニ觸ル、モ疼痛堪ヒ難キコアリ

熱度ノ亢進ハ主トシテ頭部ニ徵ス可ク或ハ往々唯頭部ニ限リ軀幹ハ唯温ニシテ脚部ハ厥冷スル者アリ殊ニ頭熱ノ昇降ハ屢見ル處ノ一症ニシテ將サニ死セントスル少シク前通常粘汗ヲ帶フル劇甚ノ熱度攝氏ノ四十度ヲ起ス者トス脈搏初メ一分時間一百二十至乃至一百四十至漸々減却シ八十至乃至六十至加之四十八至トナリ不整ニ陥リ更ニ經過スルカ若クハ疾ノ終期ニ至レハ再ヒ亢進シテ一百二十至至一百四十至乃至至一百六十至トナル呼吸モ亦著ルシク不整ニシテ或ハ迅速トナリ或ハ寛慢トナリ或ハ淺表ニシテ認メ難ク或ハ深大息ヲ起ス且ツ此脈搏呼吸ノ不整寛慢ニ兼テ著ルシク腦症ヲ發ス即チ小兒全ク失神

狀トナリ微睡シ、一種突然トシテ發シ間歇シテ反復スル號泣殊ニ夜間ニ起リ屢頭部ヲ捉ミ轉動抛却シ、後頭ヲ深ク枕子中ニ鑽入シ、切齒ヲ往々咬嚼ノ狀ヲナシ、眼目半開シ、眼球甚シク上竄シ或ハ此時弛張性痙攣狀ノ運動的障礙全身若クハ局部ニ起リ之ニ繼發スルニ攣縮破傷風狀強直、頭首後屈、牙關緊急ノ如キ緊張性痙攣ヲ以テス而シテ痙攣ノ發作ハ通常小兒ノ大不安、顔面ノ深斑點狀ノ赤色若クハ彌蔓スル赤色及直視ニ由リテ前兆ス可シ

腦壓追次第ニ増進スレハ麻痺ヲ起ス但シ其狀一樣ナラス腦腫瘍ヲ合併スル者ニハ半身麻痺著ルシク且ツ連綿ス五官中殊ニ眼目ノ障礙ハ初メ瞳孔縮小シテ光線ノ感覺過敏ナレハ漸ク鈍ク終リニ散大シテ全ク之レニ反應セス斜視ヲ發シ瞳孔縮張ノ度左右相均シカラス結膜劇シク充血シ兼テ粘液分泌增多シ時トシテ偏眼若クハ兩眼ノ角膜軟化スル是ナリ又眼底ノ脈絡膜結核、グレイフ氏及ボウフット氏ハ往々發見セラル、所ナリト雖モ必發症ニ非ス且ツ小兒ニ檢眼鏡檢査法ヲ行フ



ハ大困難ニ屬ス又疾更ニ經過スレハ聽官モ亦功用ヲ失ヒ終リニ全ク潰滅スルコト尙ホ視官ノ如ク然リ

頤門尙ホ未ク癒合セサル者此疾ヲ發スレハ其全經過中隆起スル者ナリ

吐腹ノ小舟狀陷没ハ通常見ル所ニシテ破格アルハ稀レナリ蓋シ腹筋ノ痙攣ニモ非ス又麻痺ニモ非ス尙ホ未ク詳カナラサル一種ノ症候ニシテ之ヲ要スルニ腸管輪狀筋纖維ノ緊張力亢進シ之カ爲メニ腸中瓦斯ノ分量減却シテ腸壁陷入シ兼テ腹皮柔軟トナルヨリ來ル者ナル可シタラウベ氏蓋シ腸ノ輪狀筋ヲ司宰スル者ハ延髓ノ近傍ニ位スル神經中樞ナラン所謂腦膜炎斑點ハ顔面ニ發スル圓形濃赤色ノ皮斑ニシテ其性一過共大サ一様ナラス畢竟區域ヲ畫スル紅斑ヨリ外ナラス蓋シ脈管運動神經ノ刺衝機亢進ヨリ起ル者ナラン又陰部ヲ捉ミ且ツ牽掣スルハ陰部神經叢ノ刺衝機亢進スル一症候トス此疾ノ經過ハ迅速ナル者ニ在テハ十日乃至十四日徐々ニ發スル者ニ於テハ四週乃至六週平均シテ二週乃至三週トス然リト雖モ必シモ前兆諸症ノ初起ヲ確定スルコト能ハス

原因此疾ハ第二歳ヨリ第七歳ノ間ニ尤モ多ク稀レニ第一歳ニ發ス但シ女子ヨリモ男子ニ多シ其發スル時期ハ第四月第五月ニ尤モ多ク第一月第二月第三月ニ稍稀レニシテ其他各時季ニ發スル者ナリ凡ソ此疾ノ原因中結核質及腺病質ノ如ク尤モ頻數ニシテ尤モ緊要ナル者ハアラス又家屋ノ位置ノ不良ナル關係人煙稠密ナル大都府ノ居住ハ此疾ヲ促スコト疑フ容ル可カラス又此疾ハ病毒吸收ヨリ起リ通常乾酪性結核性及膿性ノ竈ニ歸ス可シト云フ説ワルデンブルグ氏ノ一般ニ妥當セサルハ間ニ其特發スルコトアルニ由テ明ナル所ナリ此炎症ノ誘因ハ齒牙發生麻疹疫咳室扶斯內耳炎ナリ又慢性頭部皮膚疹ノ治癒早キニ過ルルニ由リテ結核性腦膜炎ヲ起スト云フ説ハ謬誤ニシテ其原因却テ炎竈ヨリ膿塊及崩壞スル細球ヲ髮細管ニ吸收スルニアルナラン

六十三



鑑別結核性腦膜炎既ニ著ルシク發生スレハ鑑別シ難キヲ稀ナリト雖モ病初ニ於テハ動モスレハ他病ト誤診シ易シ其寛慢ナル經過前兆諸症脈搏及肚腹ノ状態既往若クハ同時ニ腺病竈或ハ結核竈ノ存否結核遺傳ノ證據等ニ由リ以テ單純腦膜炎ト辨別ス可シ又脈絡膜ニ於テ結核顆粒ヲ據證スルハ頗ル緊要ニシテ問之ニ由リテ辨別ス可キコトアリ蓋シ全身結核病ノ第一期ニ於テ劇甚ナル腦症尙ホ未タ發セサルノ前ニ之ヲ確證スレハ殊ニ然リトス(フレンケル氏)

奎扶斯ト誤診ス可キヲアレハ奎扶斯ニ固有ナル病性ニ由リテ容易ク之ヲ免ル可シ然レハ二歳乃至四歳ノ間尙僂病及ヒ慢性腦水腫ヲ患ル小兒奎扶斯ニ罹レハ辨別極メテ難ク間々聰明特達ノ醫士コアラサレハ辨別シ能ハサルヲアリ又腦性肺炎ニ於テハ熱度攝氏ノ四十度乃至之ヨリ以上ニ昇リ分利日ニ至リ驟カニ沈降シ且ツ甲肺若クハ乙肺ニ急性滲出物ヲ起スニ由リテ結核性腦膜炎ト辨別ス可シ又急性胃加答兒ハ深重ナル腦症ノ缺クルニ由リ直チニ此腦膜炎ト辨別スヘシ又腸

蟲ト誤診ス可キハ稀レナリ然レハ癩蟲ヲ患フル小兒結核性腦膜炎ヲ發スレハ辨別頗ル難シ予ハ曾テ此ノ如キ患者三名ヲ目撃シ病體解剖ヲ行ヒ初メテ之ヲ確證セリ

豫後結核性腦膜炎ハ必ス死亡ニ陥ルカ故ニ豫後ハ常ニ不良ナリ間候復ニ趣ク一二ノ例ナキニ非スト雖モ其治スル所以ノ證ヲ舉グルコトナシ

療法豫後慘然タルヲ以テ療法モ亦偉効ヲ奏セサルハ自ラ明カナレハ此ノ如キ不幸ノ小兒ヲ坐視シテ救ハサルハ人情ノ忍ヒサル所ナルヲ以テ假令之ヲ治スルコト能ハサルモ治療ヲ施シ一ハ以テ自ラ慰宥シ一ハ以テ父母親戚ノ視ルニ忍ヒサル苦楚ノ患狀ヲ寬解ス可シ即チ其主藥ハ寒冷及ヒ亞片劑ニシテ其用法ハ單純腦膜炎ノ條ニ論ヒシカ如ク然リ規尼涅沃土加里沃土鐵等ハ尙ホ未タ毫モ確實ナル効ヲ奏セス又虛脫ニ陥ル時通常尙ホ慣用スル衝動藥例之麝香依的兒龍腦等ハ唯其病狀ト父母ノ歎訴トニ由リ籌策既ニ盡キ何トモス可ラサル時投ス可



此症一旦發スレハ何トモス可フサルカ故ニ時期ヲ失ハス適切ノ豫防  
 法ヲ行ヒハ間緊要ニシテ効績アリ即チ結核性腦膜炎ノ二大原因ナル腺  
 病及結核病ニ適切スル諸藥ヲ用ユルヲ要ス蓋シ適當ナル身體并ニ精  
 神ノ養育法ニ兼テ肝油沃度鐵及沃土ヲ含有スル礦水ヲ與ヒ日射、疫咳、  
 麻疹、恐シハ外傷モ亦之ニ屬ス、如キ誘因ヲ除ク可シ

〔八〕腦炎 Encephalitis

單純腦炎及化膿性腦炎ハ小兒ニ頻數ナル一患ニアラズ然レヒルシ  
 ヤウ氏ノ發明スル間質腦炎ニ注目スレハ腦炎ノ數增多セサルヲ得ス  
 病體解剖單純腦炎ハ腦ノ灰白質并ニ大小腦ノ白髓質ニ起ル或ハ小ナ  
 ル離散竈即チ單純孤立スル者トナリテ發シ或ハ蔓延スルアリ乙種ノ  
 者ハ殊ニ灰白質ニ發ス更ニ經過スレハ發炎スル處ノ髓質或ハ軟化シ  
 或ハ吸收セラレ或ハ瘦削シ或ハ硬結ス但シ軟化スルモノ多シ間、胎中  
 性腦炎ノ痕迹トシテ大腦半圓體ノ白髓質中ニ孤立シ若クハ密簇シ大

サ麻子ノ如クニシ形ナ圓ク内部ニ小空洞ヲ有ツ斑點ヲ見ルアリ(ペド  
 ナル氏ノ說子ハ曾テ此ノ如キ者ノ新發腦炎及ヒ腦膜炎ニ併發スルヲ  
 目撃セリ又腦炎ノ化膿膿瘍發生ニ轉歸スルハ腦ノ各部ニ見ル所ナレ  
 但殊ニ大腦半圓體ノ周圍部及ヒ小腦ニ起ルモノナリ但シ小腦ニ起ル  
 者ハ内耳炎ノ波及ヨリ來ル又竇中ノ蔓延性溢血膿瘍及腦竇トロンボ  
 ーセト相對スル腦表面ノ炎症ハ往々見ル所ノ副症ナリ  
 ヒルシヤウ氏ノ所謂腦質炎機トナセシ間質腦炎ハ神經質結組織ノ細  
 胞ニ脂肪變質ヲ起ス殊ニ其侵ス所ハ大腦半圓體及脊髓索狀體ナリ顯  
 微鏡ヲ以テ之ヲ檢スルニ其部ノ神經質結組織ノ細胞黑點トナリテ現  
 ハレ此黑點ヲ照ラシテ甚シク巨大ニスレハ微細ナル細顆粒ナリ若シ  
 此脂肪球無數相積聚スレハ肉眼ヲ以テ識別ス可キ白色不澄明若クハ  
 黃白色ノ曇斑及竈ヲナシ其竈ハ長サ半寸ナルヲアリ予ハ曾テ齡六週  
 ノ一小兒ニ間質腦炎ノ副症トシテ胃軟化ヲ目撃セシヲアリ  
 症候及經過腦炎ハ久シク隱伏シテ現ハレサルヲアリト雖モ危篤ノ腦



患ヲ徴知セシム可キ症候直ニ起ル者トシテ蓋シ其症候ノ要領ハ單純  
 化膿性腦膜炎ニ類似スト雖モ唯其殊ナル所ハ腦炎ノ經過寛慢ナルト  
 殊ニ其初起ニ於テ間々著ルルシ病症ノ長短時寛解スルトニアリ又腦  
 炎ニ於テハ精神頗ル久シク存シ將キニ死シトスル暫時前ニ至リ初  
 メテ減却スル者少ナカラス是レ予カ殊ニ小腦ニ膿瘍ヲ生セシ一小兒  
 ニ目撃セシ處ナリ之ニ反シ劇甚ナル後頭痛ヲ發シテ時々大ニ狂亂シ  
 時トシテ此發作ニ次テ全身痙攣ヲ起スコトアリ又腦炎竈頗ル外表ニ  
 位シ或ハ時トシテ頭蓋骨傷ニ於テ見ルカ如ク膿汁ノ排泄口アレハ腦  
 ノ崩潰頗ル廣キモ尙ホ久シク腦症ヲ發セサル者多シ曾テ齡五歳ノ一  
 小兒アリ破裂性頭蓋骨傷ニ罹リ左大脳半圓體ノ大半一部ハ化膿シ一  
 部ハ壞死シテ崩潰シ次第ニ骨隙ヨリ脱出シテ枯落スルニ至ルト雖モ  
 滿三週ノ間毫無腦症ヲ起サス愉快ニ暮中ニ踞シ食氣常ノ如ク每飯食  
 ナ餘サスシテ盡シ夜間安眠シ第三週ノ終リニ至リ初メテ化膿性腦膜  
 炎ヲ起シ幾カニ二日ニシテ鬼錄ニ登レリ是レ予カ記シ得テ忘却セサ

ル所ナリ

間質腦炎ハ病牀實驗尙ホ甚ク僅少ナリ予カ實驗ニ據ルニ腦貧血及腦  
 瘦削、ヒドロロパロイド(類腦水)ノ如キ症候ヲ起ス蓋シ此種ノ腦炎ハ胎内  
 性ニシテ死胎兒若クハ初生ノ第一日ニ死セシ小兒ニ見ル所ナリト雖モ  
 後來ニ於テモ亦發ス可キ者トス予カ實驗ニ據ルニ其症候ハ榮養不良、  
 皮膚乾燥シ、皮膚殊ニ四肢厥冷シ、脈細小ニシテ一分時間一百二十至乃  
 至一百四十至終リニ觸知ス可ラス、顱頂骨ノ間ニ前頭骨及後頭骨陷入  
 シ、頤門陷沒シ、兩眼ノ角膜初メ稍混濁シ終リニ軟化狀ニ陥リ、眼瞼半開  
 シ、呼吸頗ル淺シ、頻回嘔吐ヲ起シ、吸乳セス、他ノ養料ヲ取ラス、上下肢殊  
 ニ下肢ヲ肚腹ニ向テ攣掣シ、大不安ト號哭ト共ニ起リ、終リニ唯痛苦ノ  
 泣聲ヲ發シ失神狀トナリ、遂ニ全然タル困睡ニ陥ル是レナリ  
 原因腦炎ハ既ニ胎内ノ一患トナリテ起ル殊ニ間質腦炎ヲ然リトス外  
 傷、岩狀骨潰爛ヲ合併スル内耳炎、化膿性腦膜炎、腦腫瘍、頭腔出血、膿毒、腺  
 病及梅毒ヨリ來ルコトアリ是レ殊ニ齡長スル小兒ニ見ル處ナリヒルシ



ヤウ氏ハ急性發疹病殊ニ痘瘡及ヒ煤毒ヲ後天性間質腦炎ノ原因ト看  
 做セリ予カ見ル所ニ據レハ腸加答兒殊ニ極メテ急性ナル者モ亦其原  
 因トナルナラン概シテ之ヲ論スレハ其原因ハ他日探究愈精細ナルニ  
 至ラハ愈増多シテ明瞭トナル可キコト更ニ疑ヲ入レサル所ナリ  
 豫後豫後ハ常ニ不良ナリ假令治癒ニ趣クモ往々全治セス且ツ運動及  
 精神ノ障礙ヲ貽ス

療法外傷性腦炎ニ於テハ消炎療法ヲ行フ可シ即チ頭部ニ氷片ヲ貼シ  
 若クハ寒捲法ヲ行ヒ皮膚及腸管ヲ誘導シ兼テ精神及身体ヲ全ク安靜  
 ニス可シ劇甚ノ疼痛及ヒ夜間ノ煩躁ニ於テハ阿片、コロラルヒダラー  
 トチ内服セシメ若クハ之ヲ皮下ニ注入シ頻回搖擲ヲ起ス者ニハ亞鉛  
 花、臭素加里ヲ投シ布巾ヲ冷水ニ蘸シテ身体ヲ包裹ス可シ又間質腦炎  
 チ辨別シ得ルキハ多クハ強壯療法ヲ行フ可シト雖モ通常効績ヲ收ム  
 ルコトナシ

〔九〕腦肥大及硬結 Hyertrophie und des sclerose des gehirns

單ニ腦質ノ容積増盛スルニ非スシテ其神經質結組織ノ發生過多ヨリ  
 起ル真ノ腦肥大ハ小兒ニ稀ナリトス且ツ其起ル所以ノ方法尙ホ未ダ  
 分明ナラヌ腦肥大ハ往々全然タル硬結ト併發シ病狀ニ於テ判然之ヲ  
 區別スルコト能ハス故ニ此二病チ一條下ニ合論スルヲ允當トス然レモ  
 局所腦硬結ハ腦瘦削ニ類似スト云フコトニ注目セズンハアル可ラス  
 病體解剖頭蓋ハ腦水腫ニ於ルカ如ク多クハ増大ス予曾テ齡十月ナル  
 一小兒ノ頭蓋ヲ測リシニ其周圍七十四センチメートルニ至レリ剛腦  
 膜緊張シ之ヲ切開スレハ腦甚シク突出シ軟腦膜乾燥シテ腦ニ密着シ  
 大腦半圓體ハ殊ニ小腦ト比較スレハ増大シテ平均ヲ失ヒ紆迴消滅シ  
 且ツ壓平セラレ灰白質ハ青白赤色、白髓質ハ死白色ヲナシ中ニ僅少ノ  
 血點撒佈シ腦質ハ殊ニウエオセニ一氏半卵圓形中樞ノ所ニ於テ稠密  
 ニシテ硬ク加之硬結スル者ニ於テハ堅キコト軟骨ノ如ク光澤アルコト  
 ノ如ク腦室ノ側壁狹クシテ相近接ス予曾テ一回劇性腦肥大及硬結ニ  
 兼テ剛腦膜炎ヲ目撃セシコトアリ又稀レニハ小腦華魯里斯氏橋及延髓



モ亦一齊ニ肥大及硬結ニ罹ルコトアリ  
 局處腦硬結ハ一箇乃至數箇ノ大窠若シハ小窠トナリテ發シ其部ノ腦  
 質ハ直チニ發見ス可キ緻密ノ増盛若シハ軟骨狀ノ堅サヲ現ハス腦紆  
 廻時トシテ通常ノ一半ニ減却シ或ハ更ニ殺小スルアリ  
 症候及經過腦肥大及硬結ハ毫モ特別固有ノ症候ヲ發スルコトナク唯  
 其經過中腦刺衝ノ徵ト腦壓迫ノ徵ト相交換シ直チニ死前ニ至リ殊ニ  
 乙症著ルシ腦患ヲ發スルキ小兒ノ榮養尙ホ宜シキアリ或ハ既ニ衰弱  
 スルアリ頭蓋骨尙ホ未タ化骨セサル者ニ於テハ頭顱ノ直徑多少増大  
 シテ慢性腦水腫ノ形狀ヲナス精神ハ昏瞶セス若クハ少シク遲鈍トナ  
 リ或ハ全ク痴呆トナル或ハ嗜眠シ或ハ大煩躁シ夜間殊ニ頻數ナル劇  
 甚ノ號哭ヲ起シ頭痛ヲ發シ恠靈現出シ火花及星辰ヲ視ミ盲目トナリ  
 瞳孔散大シテ怠慢トナリ眼球搖掣シテ斜視シ精神迷朦シ若クハ全ク  
 消却シ嘔吐シ呼吸不整トナリ脈遲寬便秘シ四肢震顫シ殊ニ之ニ觸ル  
 レハ然リ搖擗ヲ起シ牙關緊急シ全身破傷風狀ニ強直シ四肢攣縮シ及

ヒ深因睡ニ陥ルハ腦肥大及ヒ硬結ニ見ル所ノ患恙ナリ局處腦硬結ハ  
 生前全ク之ヲ徵知スルコト能ハス唯病體解剖ニ由リテ發見ス可キアリ  
 或ハ大窠アル者ニ於テ腦壓迫ノ徵候殊ニ嗜眠ヲ起スアリ蓋シ其病狀  
 ハ原因トナル腦患ノ異ナルニ由リ例之化膿性腦膜炎、腦瘦削、血液滲出  
 等ヨリ起ルニ隨テ多少自ラ變化スル者トス  
 腦肥大ニ兼テ頗ル蔓延スル硬結ヲ發スル者ハ常ニ死亡ニ趣クト雖モ  
 局處腦硬結ヲ起ス者ハ生命ヲ保續シ得ルナリ此疾ノ經過ハ長短一様  
 ナラス正シク之ヲ算定ス可キハ實ニ稀レナリトス予曾テ先天性ノ者  
 ニ於テ其經過ヲ十七月ト算定セシコトアリ  
 原因吾人原因ニ就テ識ル所ノ者ハ凡テ臆斷ニ屬ス上ニ論セシ如ク先  
 天ニ出テ、十七月間生活セシ者アリト雖モ三歳ニ至ルチ多シトス時  
 トシテ忽然心身爽快ノ間ニ起リ既往症ヲ尋ヌルモ他ノ健否ノ狀態ヲ  
 検査スルモ其原因判然タラサルアリ之ニ反シ劇度ノ佝僂病、結核病、若  
 シハ腺病ノ徵候多少顯ハル、者アリ殊ニ腺ノ成形過多及ヒ乾酪化ハ



往々見ル處ナリ局處腦硬結ハ腦瘦削、腦膜出血、腦膜炎及ヒ腦炎ニ兼テ起ル者トス  
 鑑別腦肥大及硬結ハ判然之ヲ辨別スルヲ能ハス畢竟唯之ヲ疑察ス可キニ過キス頭蓋ノ形狀大小ハ慢性腦水腫ト異ナラス且ツ兩患共ニ大顛門隆突ス又頭蓋ヲ聽診スルモ更ニ診斷上ノ據證ヲ認メス  
 療法以上論スル所ニ據ルニ療法ハ姑息策ヲ行フニ過キス且ツ多クハ効績ナキヲ亦自ラ明カナリ

〔十〕腦水腫 Hydrocephalus (腦及腦膜内ニ於ル漿液滲出)

腦水腫ナル名稱ハ意義廣汎ニシテ頭蓋腔中ニ漿液積聚スル者ヲ總稱ス先天性ナルアリ後天性ナルアリ急性ナルアリ慢性ナルアリ全身感動ニ由リテ起ルアリ局處感動ニ由リテ起ルアリ而シテ液汁ノ積聚或ハ蜘蛛膜ト剛腦膜トノ間ニアリ外腦水腫或ハ軟腦膜ノ網眼中ニアリ〔軟腦膜浮腫或ハ腦室中ニアリ内腦水腫或ハ腦質ニアリ腦浮腫〕予カ實驗セシ腦水腫患者二百名中一百名ハ内腦水腫八十名ハ軟腦膜浮腫十

名ハ外腦水腫他ノ十名ハ單純腦浮腫ナリキ予ハ腦水腫ヲ先天性及ヒ後天性ノ二種ニ區別シテ左ニ論述シ以テ通覽ニ便ナラシム

〔甲〕先天性腦水腫 Angeborene Hydrocephalus.

先天性腦水腫ハ胎内ニ發シ胎兒ノ早死ヲ起スアリ或ハ滿月ニ至ル小兒ニ於テ分娩ノ困難ヲ起スアリ又胎生ノ間ハ液汁ノ積聚著ルシカラズ分娩ノ後速カニ增多スル者アリ  
 病體解剖先天性腦水腫ハ外水腫ナル稀レニシテ内水腫ナルヲ通則トス兩種相混合スルヲアレトモ極メテ例外ニ屬ス頭蓋甚シク大ニシテ顔面小ナルニ由リ著ルシク平均ヲ失フ其甚シキ者ニ於テハ頭蓋ノ周圍六十センチメートル乃至七十センチメートルニ達ス曾テ予カ實驗セシ齡九ヶ月ノ一小兒ハ頭蓋ノ周圍八十三センチメートル身軀ノ長サ六十八センチメートル頭ノ高サ十九センチメートル半ニ至レリ頭形ハ偏重スルヲナシ大抵左右相平均ス稀レニハ然ラサル者アリ但シ其不平均ノ度輕重一樣ナラス是レ或ハ頭蓋化骨ノ平等ナラサルニ由



リ或ハ一二骨縫ノ癒合早キニ過クルニ由リ或ハ終始一側ニ臥スルニ由リ或ハ極メテ稀レニ偏頭ニ腦水腫ヲ發スルニ由ル然レモ或ハ又頭蓋聊カ増大スル者若クハ非常ニ細小ナル者頭蓋細小ニ先天性腦水腫ヲ發スルアリ是ヲ以テ予曾テ著ルシキ先天性内腦水腫ヲ患ヒシ齡十ヶ月ノ一小兒ニ於テ頭蓋ノ周圍纜カニ二十六センチメートルナルヲ目撃セシコアリ頭皮ハ増大スル頭顱ノ所在ニ於テ多クハ甚シク緊張シ頭髮少ナク劇性ノ者ニ於テハ之ニ觸ルレハ波動ヲ覺ユルアリ頭蓋ノ骨板或ハ一様ニ薄クシテ壓陷セシムヘク或ハ一局部殊ニ後頭骨鱗狀部ニ島嶼狀ナル(往々膜橋ヲ架ス)大小ノ虧隙ヲ見ルアリ顱門殊ニ前顱門數寸哆開シ或ハ非常ニ擴張シ以テ數リニ一放綻スル所ノ骨縫際ト吻合ス後頭骨顱頂骨ノ鱗狀部及ヒ前頭骨甚ク隆突シ佝僂病ノ合併スル者ニ於テハ顱頂骨ノ鱗狀部及前頭骨ニ骨膜増息ヨリ起ル圓形黯赤色ノ膨腫物ノ甚ク隆突スルヲ見ル又化骨機ノ寛慢ナル者ニ於テハ時トシテ顱門及頭骨ノ虧隙ヨリ腦脊突出スルアリ頭蓋ヲ開ケ

ハ腦脊往々搖盪スル囊狀物トナリテ挺出シ腦面強ク壓平セラレ紆廻及ヒ腦溝消滅シ腦室擴張シテ囊狀ノ空洞ヲナシ其側壁薄ク往々唯一リニ一乃至二リニ一トナリ破碎シ易ク且ツ其中隔或ハ無數ノ孔ヲ穿ツアリ或ハ木材狀ノ閉架スルアリ予曾テモンロイ氏孔廣濶トナリテ雞卵ヲ通過セシヲ目撃セリ視神經床及ヒ線狀脊壓平セラレ腦脚相離開シ小腦モ亦多少壓平セラレ荏苒經久ナル者ニ於テハ中樞神經節及ヒ小腦ノ切剖面緻密ナルヲ豚脂ノ如ク且ツ所在皆同質ニシテ灰白質及白髓質ノ境界分明ナラス白髓質ノ層中ニ質緻密ニシテ肝脈狀ナル組織塊ノ黃點ヲ見ル顯微鏡ヲ以テ之ヲ照スニ脂肪球ノ積聚ヨリ成ル(ラムブル氏)

液汁ノ分量ハ四ウ六ウ乃至六七磅ノ差アリ或ハ澄明ナルヲ水ノ如ク或ハ少シク混濁シ亞兒加里性ノ反應ヲ起シ蛋白ヲ含有ス(スミット氏ノ説ニ從ヒハ加里鹽及磷酸鹽ノ分量殊ニ多シト云フ)外腦水腫ニ於テハ上方ヨリ下方ニ向テ壓迫シ之カ爲メニ種々ノ變化



ヲ起ス頭蓋窩多少壓平セラレ劇性ノ者ニ於テハ混融シテ一深窩トナ  
リ眼窩蓋モ亦多少壓排セラル予曾テ先天性腦水腫ニ兼テ脊髓破裂、足  
彎曲、口蓋破裂ヲ目撃セシコアリ

原因腦ノ結構妨碍及胎内腦室膜炎ヲ以テ先天腦水腫ノ原因ト看做ス  
ト雖モ一半ハ據證ス可ク一半ハ臆斷ニ屬ス又遺傳ハ許多ノ患兒ニア  
リテ原因トナルコト明カナリ蓋シ血族中ノ婚姻、梅毒、虛脫、父母ノ老年、父  
ノ暴酒等ハ何ナル感動ヲ以テ先天腦水腫ヲ起スカノ疑問ニ至リテハ  
方今尙未タ之ヲ辨解スルコト能ハス

〔乙〕後天腦水腫 *Erworbener Hydrocephalus.*

後天性腦水腫ハ内腦水腫トナリテ起リ或ハ外腦水腫トナリテ起リ或  
ハ軟腦膜浮腫トナリテ起リ或ハ腦浮腫トナリテ起ル其發スル急性ナ  
ルアリ次急性ナルアリ慢性ナルアリ故ニ之ヲ區別シテ急慢性トナ  
ス蓋シ急性腦水腫ハ結核性腦膜炎ニ起ルト雖モ特發ノ一患タルコト亦  
之レアリ

病跡解剖後天性腦室水腫後天内腦水腫ハ凡テ先天性腦水腫ニ於ルカ  
如キ變化ヲ起ス唯其異ナル所ハ變化極度ニ達セサルト既ニ癒合シ若  
クハ殆ント癒合スル頭蓋ニ發スル時殊ニ然ルトニアリ腦室纒カニ三  
倍乃至六倍擴開シ腦室角甚シク鈍圓トナリ其含ム所ノ液量四等乃至  
八等ニ至ル急性ノ者ニ於テハ腦室充血シ屢寛鬆トナリ光澤ヲ失シ  
若クハ軟化シテ粥狀ヲナシ腦室ノ天井、中隔、四疊躰ノ表面モ亦多少此  
ノ如キ軟化ヲ起ス慢性ノ者ニ於テハ腦室膜ノ質肥厚シテ固ク時トシ  
テ結組織顆粒撒布シ脈絡叢ハ白色若クハ青白色ヲ帶ヒ小囊ヲ有シ腦  
質ハ貧血ヲ起シ粘膠若クハ柔軟ニシテ全ク濕潤ス予カ曾テ實驗セシ  
二三ノ慢性腦水腫患兒ニ於テ既ニ接着セントスル縫際再ヒ離開シテ  
四リニ一放綻セリ

腦浮腫ニ二徵アリ曰ク唯腦質ノ滋潤スルモノ曰ク漿液夥シク腦質中  
ニ積聚スルモノ是レナリ蓋シ甲種ノ者ニ於テハ腦ノ切剖面劇シク光  
澤ヲ放テ乙種ノ者ニ在リテハ切剖面ヨリ液汁滴瀝ス腦質極メテ貧血



ヲ起シテ多少軟化スルアリ或ハ充血ノ徵ヲ發スルアリ又腦浮腫ハ軟  
腦膜浮腫及ヒ腦室水腫ト相合併スルコト少ナカラス  
軟腦膜浮腫ハ多クハ穹窿面ヲ侵シ一半ハ澄明ナルコト水ノ如ク一半ハ  
赤色ナル漿液、腦面及ヒ腦紆廻ノ間ニ積聚ス而シテ積聚大ナルアリ或ハ  
少ナルアリ且ツ腦室ノ液汁稍增多スル者頗ル多シ

原因後天腦水腫ノ患兒八十名中、年齢ノ比例左ノ如シ

二歳未満ノ者二十二名

二歳ノ者二十四名

三歳ノ者十七名

四歳ノ者七名

五歳ノ者四名

六歳ノ者二名

七歳ノ者二名

八歳ノ者一名

九歳ノ者一名

其四十六名ハ男兒三十四名ハ女子ナリ

ハンベルゲル氏ハ其原因ヲ二種ニ區別ス曰ク腦病及ヒ腦血行異常曰  
ク特發若クハ繼發血質變換、漿液性是レナリ是ヲ以テ甲件若クハ甲乙  
兩件ヲ起ス可キ疾病ハ皆腦室水腫、軟腦膜及ヒ腦ノ浮腫ヲ發ス即チ腦  
腫瘍、頸部ノ腫瘍、虛脫病、殊ニ慢性腸患、佝僂病、腎臟病、疫咳、心臟異常、喉頭  
格魯弗、結核病、腺病、氣管枝肺炎、急性發疹病、稀レナリ之ニ屬ス又急性後  
天腦水腫ハ慢性ニ轉スルコト屢々之レアリ

症候及經過腦水腫ノ經過中ニ發スル諸般ノ患恙ハ一半ハ溢出スル漿  
液ノ壓迫ニ關シテ器械性ナリ一半ハ腦原質自家ノ榮養及機能ノ發症  
ナリ急性腦水腫ノ症候ハ既ニ結核性腦膜炎ノ條ニ論セシヲ以テ下條  
ニ於テハ殊ニ慢性腦水腫ノ症候ヲ論セントス蓋シ前條ニ論セシ頭蓋  
ノ大小形狀ノ異常ハ腦水腫ノ先天ニ出テ若シクハ後天ニ起ルト或ハ  
既ニ化骨シ若クハ尙ホ未タ化骨セサル頭蓋ニ於テ迅速ニ發シ若クハ



寛慢ニ起ルトニ由テ其種別大ニシテ輕重ノ度モ亦頗ル差等アリ而シテ此頭蓋大小形狀ノ異常ハ殊ニ先天腦水腫ニ於テ著ルシ即チ頭首大ニシテ平均ヲ失ヒ直保シ難ク顔面細小ニシテ尖リ往々老耄ニ類シ顛顛部及ヒ前頭部ノ靜脈甚シク怒張シ眼目突出シテ半開シ自他身軀諸器發育ヲ遂ルコト能ハサルハ此ノ如キ小兒ニ一種ナル固有ノ形狀ナリ後天腦水腫ニ於テハ此徵候稍著シカラス殊ニ他ノ身軀諸部ノ榮養及發育時トシテ全ク充分ニシテ且ツ其年齡ト相平均ス

腦ノ機能主中トシテ侵サ、ル者ハ精神作用ニシテ其侵サル、ヤ頗ル差等アリ或ハ精神作用少シク減却スルアリ或ハ痴呆ナルコト禽獸ノ如ク纒カニ之ヲ教育ス可ク或ハ全ク訓導スル能ハサルアリ曾テ予カ實驗セシ一小兒ハ殆ント劇度ノ腦水腫ヲ發スレヒ精神力恙ナカリシ蓋シ例外ト云フ可シ五官ハ障礙ヲ被ラサル稀レニシテ多クハ衰弱ス殊ニ視官ヲ然リトス或ハ瞻視不良ナルアリ或ハ全ク盲スルアリ又斜視及ヒ眼瞼痙攣ハ屢見ル所ノ一症ニ屬ス

聽官及味官モ又鬱積スル漿液ノ壓迫ニ由リテ早晚障礙セラル皮膚ノ知覺機ハ多クハ衰弱シ稀レニハ亢進シ若クハ楚痛ヲ帶フ又運動機障礙就中著ルシキハ全身軟弱ニシテ小兒起坐スル能ハス全ク行歩スル能ハス或ハ行歩ノ時期頗ル遅々タルアリ局處若クハ全身搖擗攣縮麻痺一上肢若クハ兩上肢ノ不隨意運動ハ彼レ是レ相合併シ暫ク稽留スル後再ヒ消却ス又頭痛(身軀ヲ直伸スレハ殊ニ發ス)嘔吐、大煩躁、數時間連綿スル號泣、咬嚼、切齒、劇甚ノ流涎ハ殆ト必發ノ一症ニ屬ス消化機ハ通常佳良ニシテ障礙ヲ被ルハ稀レナリ多クハ便秘ス間、驚ク可ク食慾スレハ軀重更ニ增多シサルアリ又慢性腦水腫ノ經過中別ニ誘因ナキニ驟カニ險惡ニ陥ルコト往々之レアリ是レ漿液新ニ滲出ノ既ニ積聚セシ液汁ニ添加スルニ由ルナラン乃チ劇甚ナル腦刺衝ノ徵候、例之、嘔吐、大煩躁、癩癩狀ノ痙攣、精神錯亂等ヲ發ス但シ此諸症ハ多少稽留スル後再ヒ消却ス間、此ノ如キ發作ノ爲ニ死亡スル者アリ又慢性腦水腫ノ經過ハ長短一様ナラス蓋シ先天腦水腫ニ罹ル小兒ハ童年ニ至ルマテ生



存スルヲ稀レニシテ既ニ分娩ノ後若クハ生齒ノ際本病ニ由リ或ハ他  
 病例之肺炎、氣管枝炎、胸加答兒、痢病、結核性腦膜炎ニ由リテ斃ル、ヲ通  
 則トナス又慢性腦水腫ヲ患フルモ成人ニ至ル者アリ蓋シ例外ニ屬ス  
 予カ曾テ目撃セシ三十一歳ノ一男子ハ頭蓋ノ直徑甚ク大ニシテ曾テ  
 頭ニ適スル帽ヲ見ス然レモ銳敏ニシテ寫字生ヲ務メタリシ又ガル氏  
 ハ腦水腫ヲ患フル五十四歳ノ一患者ヲ見シト云フ蓋シ其病勢休歇シ  
 若クハ治癒スルハ一ハ頭蓋骨ノ容積増盛スルニ由リ時トメ一寸ノ厚  
 サニ達スルヲアリ一ハ腦体補償スルニアリ

漿液性卒中即チ急性腦浮腫ハ常ニ忽然トシテ起リ二三時間往々二三  
 分時間ニ死ス蓋シ此症ニ罹ル者ハ形容健康ナルカ如ク若クハ榮養佳  
 良ナルモ仔細ニ之ヲ診スレハ佝僂病ノ徵ヲ顯ハシ或ハ多少潜伏性腦  
 室水腫ノ徵ヲ呈ハス曾テ予カ實驗セシ患者ハ皆甲證若クハ乙證ヲ發  
 セリ是ヲ以テ眞ニ從來健康ナル小兒ニ於テ漿液性卒中ヲ目撃セリト  
 云フ說ハ信シ難シ此疾ハ一歳乃至二歳ノ小兒ニ尤モ多ク其死亡卒然

ナルカ故ニ心思ノ攪亂スル父母ハ常ニ死スヘキ理ナキヲ主張スル  
 アリ又恙ナキカ如ク見ユル小兒現ニ今笑戯スル後輕易ノ搐搦ヲ起シ  
 纔カ二三分時ヲ過キテ屍体トナルト間々之レアリ  
 鑑別急性結核腦水腫ノ鑑別ハ結核性腦膜炎ノ條ニ論セシカ如ク然リ  
 特發急性腦水腫ハ極メテ稀レナル一症ニ其症候相類似スト雖モ病  
 牀ニ於テハ判然之ヲ辨別スルヲ能ハス  
 軟腦膜浮腫及ヒ往々之ト合併スル輕性腦室水腫ハ其症候生活間ニハ  
 腦貧血ニ類スルヲ以テ其原因タル諸件ヲ仔細ニ筭定スルニ非サレハ  
 辨別スルヲ能ハス劇甚ノ慢性腦水腫殊ニ先天性ノ者ハ其辨別毫モ難  
 カラスト雖モ輕性ノ者ハ動モスレハ頭蓋佝僂病ト誤診セラル、トア  
 リ蓋シ前頭骨及ヒ顱頂骨ノ結節ニ於ル骨膜増息シ身軀他部ニ佝僂病  
 ノ徵アリ腦水腫ニ固有ナル腦沈抑ノ險徵缺クルハ佝僂病性頭蓋ノ徵  
 ナリ二三氏ハ頭部ヲ聽診シ佝僂病ト腦水腫ヲ辨別セシト雖モ予カ無  
 數ノ實驗ニ據レハ此法ハ辨別上ニ毫モ益ナシ其他記ス可キハ佝僂病



ト腦水腫ト往々合併スル是レナリ眞ノ腦肥大ハ小兒ニ甚ク稀レコシ  
 テ腦水腫ト辨別シ難カラス又頭蓋ノ發大セサル腦水腫ハ上記ノ諸証  
 ナ以テ之ヲ辨別スヘシ此ノ如キ者ニ於テ慢性腦水腫ヲ腦腫瘍ト誤診  
 スルハ常ニ免ル、能ハス  
 豫後豫後ハ腦水腫先天ナルト後天ナルト急性ナルト慢性ナルトヲ論  
 セス多クハ不良ナリ又急性結核性腦水腫ノ常ニ死亡ニ歸スルコトハ既  
 ニ論辯セリ生活間ノ觀察ニ據ルニ溢出スル液汁一半ハ吸収セラル、  
 カ如シ蓋シ頭蓋愈々化骨スレハ其吸収モ亦愈々早シ又急性腦刺衝ノ  
 徴ヲ起シテ液汁反復添加スルハ常ニ險微ニ屬ス  
 療法急性腦水腫及ヒ軟腦膜浮腫ニ於テハ醫藥ヲ與フルモ多クハ効績  
 ナシト雖モ單純腦膜炎ニ投スル藥石ヲ試用スヘシ時期ヲ誤ラス豫防  
 法ヲ行ヒハ間、繼發性腦水腫ヲ未發ニ防キ得ルコトアリ故ニ慢性腸加答  
 兒慢性氣管枝肺炎、佝僂病、腦貧血及ヒ腦充血ニ於テハ急性腦水腫及ヒ  
 軟腦膜浮腫ニ陥ルヲ防クノ策ヲ行ハサル可ラス慢性腦水腫ハ治療ヲ

行フモ奏効ノ目的ナシ實ニ歎息ノ至リト謂ハサルヲ得ス蓋シ吸収膏、  
 利尿劑、發汗劑、絆瘡膏ノ壓迫法及ヒ液汁穿刺等ハ從來反復試用スル處  
 ナレトモ更ニ効績ナク畢竟苦楚ナル方法ニ過キス故ニ方今ニ至リ次第  
 ニ廢棄セラレタリ

〔十一〕腦及腦膜之腫瘍 *Geschwülste des Gehirns und seiner Häute.*

凡ソ小兒ノ腦腫瘍中、結核ヨリ多キ者ハアナス癌腫、肉腫、グリオーム、護  
 膜腫、寄生生物ヲ見ルコトアレトモ例外ニ屬ス

病軀解剖、腦結核ハ其多寡、大小、發所、關係、各相異ナリ予カ自ラ病軀解剖  
 ナ行フテ確定セシ患者九十四名中其所見左ノ如シ

腦ノ結核唯一箇ノ瘤トナリテ起ルアリ或ハ數箇ヲナスアリ蓋シ癒愈  
 小ナレハ其數愈多キヲ通則トナス其大サハ豌豆大雞卵大乃至拳大ノ  
 差アリ其形狀ハ多クハ圓ク稀レニハ不規ナルアリ其發所ハ殊ニ灰白  
 質ニシテ稀レニハ白髓質ヲ占ム小腦ヨリモ大腦ニ發スルコト多ク時  
 トシテ一齊ニ大小腦ニ發スルアリ延髓ニ發スルコトアレトモ例外ニ屬ス



其周圍ノ腦質或ハ全ク變化セス或ハ貧血ヲ起シ或ハ充血シ時トシテ軟化シ若クハ其近接部ニ小漏血ヲ起スアリ内腦水腫及ヒ軟腦膜浮腫ハ屢結核ニ合併ス然レモ亦缺クルコトアリ稀レニ腦結核ハ特發病トナリテ發シ他ノ身體諸器ニ乾酪竈及ヒ結核竈ノ痕迹ヲ呈ハサ、ルコトト雖モ通常腦ノ結核ニ兼テ水脈腺及ヒ肺臟等ニ結核ヲ見ルモノトス

結核性腦膜炎ハ屢結核ト合併ス蓋シ腦結核竈ハ多クハ乾酪黃色ニシテ多少乾燥スル塊ヲナス稀レニハ灰白色ヲ帶ヒ硬ク赤暈ノ圍繞スル小結節ヨリ成ルアリ又時トシテ癩ノ中心ヨリ粥狀ニ軟化スルアリ、ルリート氏バルテーツ氏ウエスト氏ハ腦結核ノ石灰化スルヲ見マト云フ

癌ハ甚ク稀ナル一症ニシテ二種ノ別アリ曰ク腦及ヒ腦膜ヨリ起ル者曰ク頭骨ヨリ發生シテ頭内ニ入ル者是レナリ予カ曾テ一回目撃セシ如ク癌腫ノ腦膜ヨリ發スル者ハ能ク頭蓋骨ヲ穿開シ得ルナリ又予ハ

曾テ癌ノ爲メニ荒蕪セシ眼球ヲ切去スルノ後其繼發症トシテ無數ノ腦癌竈ノ起ルヲ實驗セリ

肉腫モ亦稀レナル一症ニシテ形ヲ圓ク質硬ク滑澤アリ予ハ曾テ四歳ナル一女子ノ右視神經床ニ雞卵大ノ肉腫ヲ目撃セリ

寄生物中至小胞蟲 *Cysticercus Cellulose* 及ヒ胞蟲 *Echinococcus* ハ稀レナル一症ニ屬ス予曾テ甲種ノ者ヲ三回目撃セリ

症候及經過腦腫瘍諸患者ノ通徴ヲ記スルハ方今尙ホ困難ノ一事ニ屬ス蓋シ其發生多クハ徐々ナルト其大小及ヒ多寡ニ差アルト其發所各異ナルト腫瘍ト接近部トノ關係各相殊ナルトニ由リ其障礙種々ニシテ變換一定セス故ニ各患者皆固有ノ病狀ヲ有ス可キ所以ハ亦自ラ明カナリ又腦腫瘍顯著ナルモ尙ホ死亡スルマテ久時間加之、往々數年間隱伏シ腦癌患ヲ徵知ス可キ症候ナキコトアリ是レ屢々見ル處ノ實事ナリ曾テ予カ實驗セシ患者三名ハ大腦葉ノ周圍ニ雞卵大ノ結核瘤ヲ發シタレモ死ニ至ルマテ毫モ腦症ヲ起サ、リシ然レモ諸說一致セサル



腦癩諸症ニ就キ其症候學及ヒ鑑別ノ據證トナル可キ者ハ左ノ如シ  
 偏身ノ搖擗、麻痺及ヒ癱瘓若シ同一ノ神經系路ニ於テ連綿經久シ若ク  
 ハ時日ヲ期シテ反復スルハ其偏身ト反對ノ腦半圓體ニ罹患アルノ徵  
 ナリ他器ニ腺病及結核ノ徵アレハ殊ニ然リ是レ即チ結核癩ト看做ス  
 可シ  
 經久ノ間初メ稀ニシテ次第ニ頻數トナリ同一ノ筋ニ反復スル癩癩狀、  
 ノ搖擗ハ其偏身ナルト全身ナルトナ問ハス腦癩ヲ疑察スヘキ一徵ト  
 ス大腦半圓體ノ腫瘍ハ全ク隱伏シ或ハ唯時々頑固ナル頭痛、眩暈、惡心  
 嘔吐ヲ起シ往々更ニ經過スルニ至リ腫瘍ノ發大及ヒ繼發病ノ爲メニ  
 初メテ搖擗、偏頭痛、困睡ヲ起ス者ナリ  
 腦底ノ腫瘍ハ早ク既ニ腦壓迫ノ徵候、例之、視覺ノ障礙及ヒ其衰弱、黑內  
 障眼、斜視、偏上眼瞼若クハ兩上眼瞼ノ下垂、嘔吐、頭痛、癩癩狀、搖擗、一筋系  
 若クハ數筋系ノ麻痺ヲ起スヲ通則トス又華魯里橋、延髓及小腦ノ癩ニ  
 於テ予ハ頻回間歇シ若クハ稽留スル後頭痛、項攣急、頭首後屈及共同機

ノ障礙、殊ニ緊要ナリ即チ行步蹣跚、筋惕肉瞤若クハ弛張性筋癱瘓ヲ目  
 撃セリ而シテ弛張性筋癱瘓ハ患者ヲ起立セシメ若クハ行步セシムル  
 時必ス劇シク起リ安穩ニ仰臥セシムル時再ヒ消散ス予曾テ華魯里氏  
 橋ニ癩ヲ發スル者ニ於テ次第ニ頻數トナリ殊ニ一回ハ強劇ニノ屢次  
 反復スル癩癩性ノ上半身搖擗ヲ目撃セシテアリ又疾速ニシテ大ニ響  
 キ間々大息ト相伴フ所ノ吸氣ヲ發シ時トノ癩癩狀ノ發作ヲ喚起スル  
 ニアリ  
 四疊體及ヒ腦脚ノ結核ハ他ノ必發セサル症候ニ兼テ動眼神經ノ分佈  
 スル區域ニ早ク麻痺症候、例之、上眼瞼下垂等ヲ起ス  
 予カ曾テ實驗セシ四歳ノ一女兒ハ右視神經床ニ雞卵大ノ肉腫ヲ發シ  
 瞳孔散大ノ外毫モ他ノ視官障礙ヲ起サ、リシ然レモ大ニ煩躁シ、叫起  
 シ、全身ノ筋衰弱シ、頭首後屈シ、上肢攣縮シ、呼吸不整トナリ、脈不整ニシ  
 テ疾、後ニ困睡輕性ノ搖擗ヲ起セリ剖驗セシニ甚シク擴張スル腦室殆  
 ント肉腫ヲ以テ充實セラレ左視神經床少シク發大シテ壓平セラレ腦



底軟腦膜ハ腦中角ト對スル處乳狀ニ混濁シタリシ  
 腦腫瘍ヲ發スルモ他ノ身體機能往々粗長ク妨害ヲ被ラス消化機平常  
 ニ異ナラス容貌安穩ナリ續發症ヲ發スルニ至リ始メテ諸般ノ患恙ヲ  
 起シ脈搏頻數トナリ呼吸不整トナリ小便稀レニ且ツ失禁シ全身衰弱  
 嗜眠困睡相加ハル者亦往々之レアリ此疾ハ病初ニ於テ多少隱伏スル  
 チ以テ詳カニ其經過ヲ定ムルヲ能ハス時トシテ唯二三月間ナルアリ  
 或ハ數年ニ渉ルアリ蓋シ其死亡ニ趣ク所以ハ通常腦及腦膜ノ繼發病  
 例之、急慢二性ノ腦水腫、急性腦浮腫、腦出血、腦炎、腦膜炎、急性粟粒結核ヲ  
 發スルニ由ルナリ  
 原因腦腫瘍ノ原因中尤モ頻數ナル者ハ腺病及ヒ結核病ニシテ此ノ如  
 キ小兒ハ腦腫瘍ノ外尙ホ腺、肺等ニ此兩患ノ徵ヲ呈ハス蓋シ此狀態ハ  
 鑑別上ニモ亦益アリ又小兒ニ於テハ極メテ稀レニ腦ノ護膜腫ヲ起ス  
 所ノ梅毒ト寄生物腫瘍トヲ除キ自他腦腫瘍ノ原因ハ尙ホ未タ判然タ  
 ラス然レモ間、外傷ニ歸ス可キモノアリ又結核瘤ハ女兒ヨリモ男兒ニ

多ク第一歳ヨリ可婚期ニ至ルマテ發ス恐クハ先天ニ出ル者ナラン然  
 レモ尙ホ未タ確然クル證據ヲ見ス

豫後豫後ノ概シテ不良ナルハ腦腫瘍患兒一百名中九十四名ハ結核瘤  
 ナリシチ以テ明カナリ蓋シ腫瘍多少經過スルノ後死ニ陷ルハ概シテ  
 確然タル所ナレモ或ハ腦及ヒ腦膜ノ急性病ヲ起シテ忽然斃ル、者亦  
 之レナキニ非ス

療法療法ニ二般ノ別アリ曰ク根治法即チ腺病、結核病ノ療法ニシテ其  
 病原ヲ處置スル者曰ク姑息法即チ腦腫瘍ニ由リテ起リ且ツ之ニ因リ  
 テ持續セラル、患恙ヲ除ク者是レナリ劇甚ノ頭痛ニ於テハ頭部ニ寒  
 罨法ヲ行ヒ氷片ヲ貼シ或ハ項背及ヒ下肢ニ芥子泥ヲ塗擦シテ阿片ヲ  
 投シ莫兒非涅ノ皮下注入法ヲ行フニシ癩癩狀搖擗ニハ亞鉛華、臭素加  
 里、コロラルヒダラトトヲ與ヘ或ハ布巾ヲ水ニ蘸シテ身軀ヲ包裹シ或  
 ハ全身ヲ摩擦ス可シ且ツ毎日上固ヲ促シ消化シ易キ濃強ノ食料ヲ與  
 ヒ痛ク精神ノ勞動ヲ禁スヘシ又腫瘍ノ原因梅毒ニアルヲ明カナラハ



驅梅藥ヲ投ス可シ

〔十二〕精神病 Die psychischen Störungen Geistes Krankheiten

種々ノ差等アル痴呆ヲ措テ論セサレハ本來精神病ハ小兒ニ稀レニシ  
且ツ例外ニ屬ス蓋シ其然ル所以ノ理ハ深ク考察セサルモ自ラ明ナル  
所ニシテ即チ成人ニ於テ間接若クハ直接ニ精神病ヲ起スヘキ刺衝性  
及ヒ沈抑性ノ諸因ハ小兒及ヒ幼年ノ期ニ之レナキ一ナリ忿怒心痛敗  
良失望失策後悔ノ如キ精神ノ激動及ヒ情意ノ感動ハ事物ヲ意トセス  
且ツ轉變シ易キ兒心ニ尙ホ未ク固着スルコトナキ一ナリ又有形ノ原  
因即チ大人ニ於テ往々精神病ヲ起スニ足ルヘキ腦及ヒ他臟ノ痼疾モ  
小兒ノ時期ニアリテハ之ヲ起スコトナク若クハ之ヲ起サ、ルノ前既ニ  
死亡スル一ナリ  
然レモ凡テ勉勵スル醫士ハ小兒ニ於テモ亦時トシテ精神病ヲ認ムル  
者ナリ

〔甲〕精神機能亢進 Psychische Exaltationszustände (Manie)

甲乙二種アリ

〔甲〕狂躁 [Fohnucht] 通常急慢二性ノ腦刺衝ヨリ起ル而シテ屢見ルカ如  
ク別ニ後患ヲ貽スコトナク唯暫時稽留スルアリ或ハ大人ニ於ルカ如ク  
次第コ亢進シテ愚鈍ニ變スルアリ予ハ六歳ヨリ十三歳ニ至ル小兒ニ  
於テ痘瘡ノ前兆症及ヒ日射室扶斯ノ後患トシテ急性狂躁ヲ認ム蓋シ  
其誘因ハ非常ニ劇甚ナル單純及ヒ中毒性充血ニシテ室扶斯ニ於テハ  
内腦水腫ナリ

予ハ六歳ノ一小兒ニ於テ間歇性狂躁ノ次第コ愚鈍ニ陥ルヲ目撃セリ  
此小兒三歳ニ至ルマテ聰明且ツ健全ナリシト云フ其原因蓋シ繼發性  
腦水腫ヲ合併スル腦腫瘍ニアルナラン此小兒ノ母ハ極メテ神経性ノ  
虛弱家ナリ此小兒ノ狂躁ハ劇甚ニシテ抑制的衣服用ト大量ノ阿片トヲ  
用ヒサルヲ得ス且ツ頗ル猛力ヲ振ヒ之ヲ鎮靜スルニ大人數名ヲ要ス  
ルニ至レリ

〔乙〕精神錯亂 Valnsium 會テ齡十二歳ノ一小兒アリ發育齊整シ且ツ身



体ノ榮養佳良ニ別ニ誘因ナカリシガ考慮著ルシク錯亂シテ自ラ乃  
 父ヲ殺サント欲シ爾來常ニ頭熱シ面貌絶ヒス憂苦不安ノ狀ヲ帶ヒ安  
 眠スルヲ能ハス搏脈稍頻數トナリ便秘シ乃父ヲ瞥見スルヤ否ヤ不安  
 更ニ甚シク戶外ニ遁逃セントシ若シ戸ヲ鎖閉スレハ窓ヨリ躍出セン  
 トシ之ヲ抑制スレハ竈爐ヲ破却シテ之ヨリ奔ラントス携テ親族ノ家  
 ニ行キシニ更ニ安靜セス再ヒ家ニ歸ルマテ歎訴脅迫シテ止マス夜間  
 看護者ノ隙ヲ窺ヒ葦中ヨリ起テ窓邊ニ近キテ躍出セントシ終夜全ク  
 衣服ヲ纏絡シテ之ヲ脱セス以テ遁逃ノ準備ヲナシ其父之ヲ抑制セン  
 トシテ専ラ務メタリト雖モ毫モ其効ナカリシト云フ予ハ其ヨリ以後  
 經過及ヒ轉期ノ患狀書ヲ得ス實ニ惜ム可キノ至リト謂フ可シ

〔乙〕精神機能沈抑 Psychische depression

小兒ニ精神沈抑狀トナリテ起ルモノハ輕症若クハ劇度ノ依ト昆垓及  
 鬱憂病ナリ蓋シ時期ヲ誤ラヌシテ辨別シ適當ノ治療ヲ行ハサレハ時  
 トシテ痊愈癒ヒス成人ノ期ニ達スルアリ故ニ身體健康ナルカ若クハ

虛弱貧血性ノ小兒ニ於テ一種ノ疾病ヲ醸ス可キ若ルシキ肺勢アリ反  
 復之ヲ檢査スルモ更ニ其由リテ來ル所以ヲ證明シ能ハサル者少ナカ  
 ラス抑、此發症ノ原因ハ父母ノ不良殊ニ母ノ歇私帝里性、方今次第ニ増  
 進スル教育ノ壞紊、妄想ヲ奮起スル書籍殊ニ猥褻ニ渉ル小説ノ誦讀、淫  
 戲早キニ過キ、虛想及ヒ直チニ死ヲ起スヘキ恐怖等ニアリ曾テ予カ治  
 療セシ六歳ノ一男兒ハ阿妹ノ外、婚伴ナカリシカ阿妹、結核性腦膜炎ニ  
 罹リテ斃ル、ノ後悲歎極リナク説諭ヲ加フルモ鬱散セシムルモ更ニ  
 止マス自ラ謂フ予モ亦直チニ此病ニ由リテ斃ルヘシト日夜痛苦シ食  
 氣之ニ由リテ消却シ睡眠之ニ由リテ安穩ナラス輕咳ヲ發スルモ尙ホ  
 恐怖スル疾病既ニ起ルトナシ日々皮膚ヲ摩擦シテ一箇ノ小結節若シ  
 ハ小水泡ヲ發見シ之ニ由リテ自ラ必死ヲ期ス此症狀滿二年間連綿シ  
 父母大ニ之ヲ憂ヘシカ終ニ消散シテ全ク痕迹ヲ見サルニ至レリ爾後  
 一年ヲ過キ其母精神病ヲ患ヒテ癲狂院ニ投シタリシ  
 又少女春意發動ノ期ニ輕性ノ鬱憂病ヲ發スルアリ蓋シ其原因ハ他ナ



シ唯此生理上ノ轉換ニ歸セサルヲ得ス

〔丙〕精神機能衰弱 Psychische Schwächezustände.

小兒ノ精神病大半ハ精神衰弱即チ痴呆ニシテ此疾ノ世上ニ夥シキハ實ニ歎息ノ至リト謂ハサルヲ得ス英瑤密性痴呆所謂クレチニスミユス Cretinismus ハ殊ニ山國ニ流行ス(唯其病性ノ完全ナルニ由リテ記載ス可キノミ)予ハ下條ニ於テ殊ニ散在性痴呆ヲ論セントス十二年以來予カ經驗セシ痴呆兒一百四十名中輕性ニシテ稍々教育ス可ク詳カニ之ヲ謂ハ、改良ス可キ者アリ或ハ劇性ニシテ愚鈍ナルヲ禽獸ノ如ク人間ニ齒ス可ラサル者アリ而シテ此疾ハ通常先天ニ出ツ即チ頭形ノ異常(頭蓋細小、腦水腫)ヲ以テ之ヲ徵スヘシ或ハ稀レニ後天ニ出テ、初生ノ第一歳ニ發スルアリ蓋シ頭蓋細小及ヒ腦水腫ノ外尙ホ痴呆ノ解剖的原因トナル可キ者ハ左右相對稱セサル腦發育ノ僅少、腦硬結、腦ノ一部全ク缺損スル等ナリ予ハグリーシンゲル氏ニ從ヒ左ノ五種ヲ論シ以テ通覽ニ便ナラシム

〔一〕 軀格全ク善ク發育シ而貌多クハ友愛ノ情ヲ呈ハシ通常頭蓋頗ル細小ナル者ナリ其精神發育ノ度或ハ最下等ニ位シ或ハ少シク升リテ種々ノ度ニ至ル多クハ粗ホ心思ヲ動ス可シト雖モ或ハ往々悟覺ナキ状態ヲ呈ハシ兼テ活機ナキ不隨意ノ運動ヲ起シ時トシテ下肢ノ軟弱ヲ挾ム

〔二〕 身軀及ヒ精神ノ發育頗ル後ル、小兒即チ其發育一定ノ年齡(四歳ヨリ六歳マテ)マテ進ミ次テ全ク止マル者は是レナリ

〔三〕 クレチチ性頭底骨縫癒着

〔四〕 アツテケン形 譯者按スルニアツテケン 是レ一種ノ頭蓋細小ニシテ頭蓋終始極メテ細小ナレモ身體モ亦之ニ准シテ細長ナル者ヲ云フ此種ノ小兒ハ極メテ活潑ニシテ運動凡テ共和合節シ、心思澄亮、忿怒シ易ク、新聞ヲ好ム、然レモ放恣甚シク、精神頗ル衰弱ス、グラチナレツト氏ノ經驗セシ者ハ頭蓋頗ル細小ニシテ頭骨厚ク、頭蓋癒合シ、頭底聊カ化骨シテ全ク軟骨狀ヲナシ、岩狀部、篩骨、平常ヨリモ大ニシテ小腦ヲ盛ル



所ノ頭蓋窩ハ之ヲ測ルニ凡テ不正トナリ腦ノ紆廻ハ猩猩(オウラ)及ヒ  
「シムパンゼ」猿ノ一種ノ紆廻ヨリモ少ニシテ小腦脊髓延髓五官及ヒ五  
官ノ神經ハ大ナリト云フ

〔五〕間、痴呆兒ノ面貌、狀態、舉動殆ント獸畜ト相類ス、猿、家猪及ヒ羊ニ均  
シ

痴呆兒ニ見ル種々ノ障礙ハ盡ク之ヲ揭示シ難シ概シテ之ヲ論スレハ  
人ノ熟知スル痴呆ノ面貌、行歩及ヒ言語ヲ學ブノ遲キ、全ク自ラ意思ヲ  
述フルヲ能ハス、五官遲鈍シ、耳聾シ、不潔ヲ意トセズ、癩癩狀ノ瘡癩發作  
シ、麻痺シ、非常ニ貪饒スルハ粗ホ必發ノ症候タルヲ記スレハ足レリ  
トス間、其父母更ニ痴呆兒ノ愚鈍ナルヲ曉ラズ微少ナル精神ノ動作ア  
ル毎ニ他日頗ル伶俐トナル可キヲ期望シ或ハ又耳聾ナルカ若クハ言  
語期ニ後ルレハ耳内注射法、舌繫帶切斷法ヲ行フテ能ク此不幸ナル病  
態ヲ治癒ス可シト思ヒ之カ醫治ヲ求ムル者アリ

痴呆兒及ヒクレチチ兒ノ生活スル年限ハ主トシ其原因タル神經病ノ

輕重ニ關ス又痴呆兒ノ越昆瑤密性及ヒ散在性疾病ニ抗抵スル精力ノ  
精神健全ナル小兒ヨリモ大ナルハ予カ屢實驗シテ決定スル所ナリ  
療法此不幸ナル小兒ヲ父母ノ家ヨリ出シテ痴呆院若クハ癩狂院ニ入  
ル、ヲ以テ第一策トス蓋シ結構ノ堅牢ナルト各自ノ器量ニ適シ得ル  
ト凡テ障礙トナル可キ感動ノナキトニ由リテ諸事至ラサルヲナキハ  
唯癩狂院ノミ是ヲ以テ此人間ニ齒ス可カラサル痴呆兒ニ親族ヲ煩累  
セサル一幽所ヲ與ヘント欲シテ方今尙ホ稀少ナル痴呆院ヲ増設セン  
トスルハ須要トナシ難シ

〔十三〕先天性結構異常 *Angeborenen Bildungsfehler.*

腦水腫ハ既ニ前條ニ於テ此種ノ者トシテ論述セリ其他全腦缺ケテ頭  
首ナキ者及ヒ腦ノ一部缺ケテ片眼若クハ他ノ椎形ヲ呈ハス如キ腦結  
構缺絶モ亦此種ニ屬ス然レモ此等ノ不具ハ病床上ヨリモ寧ロ解剖學  
上ニ關係アリ

〔イ〕頭蓋細小 *Abnorme Kleinheit des Schädels (Mikrocephalie.)*



此疾ニ二様アリ甲ハ特發性榮養障礙ノ爲メニ腦細小ニシテ隨テ頭蓋モ亦之ト共ニ細小ニシテ發育セス但シ頭蓋骨毫モ癒着スル所ナシ乙ハ其原因頭蓋骨ノ變換癒着及ヒ癒着ニ基ツク頭蓋狹窄ニアリテ其成果トシ腦細小ヲ起ス、ホーグト氏ハ頭蓋細小ヲ生來具コ頭顱及ヒ腦ノ細小ナル状態ト看做シ更ニ其原因ヲ頭蓋骨縫ノ癒合ニ覓メス唯初生ノ第十週ノ頃ヨリ起ル腦結構歇絶ニ歸セリ蓋シ其說ニ據レハ頭蓋細小ナル小兒ノ腦ハ唯大ナル花紋狀ノ紆廻線ヲ顯ハシ或ハ紆廻頗ル消滅シ腦ノ前部ニハ全ク之ヲ見スシテ唯淺溝ヲ呈ハシ其狀恰モ猿ニ於ルカ如ク然リト云フ

予カ見ル處ニ據レハホーグト氏ノ說ハ唯患者ノ或ル區域ニ妥當ス可シト雖モ一般ニ適切シ難ク頗ル偏固ニ涉ル何トナレハ頭蓋細小ノ近因、頭蓋狹窄ニアルヲ疑フ可カラサル者アレハナリ(ヒルシヤウ氏)

其證候ハ一種細小ナル頭蓋種々ノ形ヲナシ、額頗ル扁平、面貌遲鈍、默シテ言ハス、或ハ言語禽獸ノ如ク、精神ノ力頗ル下度ニ位スル是レナリ此

ノ如キ小兒ハ決シテ教育ス可カラス、ホーグト氏ノ說ニ據ルニ此ノ如キ小兒、腦ノ大サ五百センチメートル立方以上ニ至ラサル者ハ談話スルヲ能ハスト云フ此精神機能障礙ノ外尙キ運動障礙、例之、殊ニ下肢ノ筋惕肉瞶、攣縮、搖擗、時々發シ或ハ連綿ス是ヲ以テ予曾テ齡八月ノ頭蓋細小ナル一小兒ニ於テ齒牙新ニ發生スル時毎ニ劇性ノ搖擗ト攣縮ト相交換シテ起リ二日乃至三日間他ノ腦刺衝ノ症候ト共ニ稽留セシヲ目撃セリ蓋シ輕度ノ頭蓋細小ハ稍、教育ヲ施ス可キ者トス

吾人頭蓋細小ノ原因ヲ識ルヲナシホーグト氏曰ク遺傳ハ尤モ近因トナシ難シ多クハ頭蓋細小ナル小兒ハ全ク健康ナル父母ヨリ産シ且ツ全ク健康ナル他兒ニ次キ若クハ一兒ヲ隔テ、生スト或ル血統ニ於テハ一種頭蓋細小ヲ起ス傾キアリ然レモ他ノ不具ニ於ルカ如ク之ヲ起ス所以ノ理ヲ究ルヲ能ハス

〔ロ〕腦貌 僂偃 Encephalocoele und Hydrocephalocoele. Hirnbruch.  
 單純腦貌僂偃 Encephalocoeleハ頭蓋ノ虧裂ヨリ大小腦ノ一部脫出スル者



チ謂フ又脫出スル囊中ニ腦ノ外兼テ多少ノ漿液ヲ含ム者ヲ水腫性腦貌ヒドロエシヒ 癩癩 Hydranencephalocoeleト謂フ

腦貌癩癩ハ先天ナルヲ常トスレモ頭蓋外傷若クハ頭蓋骨腐死ヨリ起テ後天ナルアリ予曾テ一兒、顛顛骨腐死ノ爲メニ林檎大ノ後天腦貌癩癩ヲ起スナ目撃セリ先天腦貌癩癩ハ殊ニ後頭骨ノ鱗狀部、前頭骨ノ鼻部、顛顛骨、顛顛骨、眼角ニ起ルト雖モ又他ノ諸骨縫及ヒ小骨縫ニ發ス其大サハ脫出スル腦部ト之ト一齊ニ現ハル、水量ノ多少トニ隨テ臑豆大ヨリ兒頭大ニ至ルノ差アリ或ハ莖ヲ有シ或ハ蟠廻ス而シテ此腫瘍ハ外皮平常ノ如クナレモ往々著ルシク薄ク且ツ毛髮脱落シ通常搏跳シ強劇ノ呼氣殊ニ劇甚ノ號哭及ヒ咳嗽ニ由テ突出ス且ツ之ヲ壓セハ多少退却ス然レトモ此法ニ由テ嘔吐、搐搦、眩暈、破傷風狀強直麻痺ノ如キ腦症ヲ起シ易キヲ甚シキカ故ニ頗ル注意シテ之ヲ行フヘシ大ナル腦貌癩癩ハ頭血瘍ト誤診スヘシト雖モ其發スル部位ト著ルシキ搏跳ト、壓迫スレハ窄小トナリ及ヒ之レニ由テ腦症ヲ起ストナリ以テ直チ

ニ之ヲ辨別ス可シ又小ナル腦貌癩癩ハ勃起性腫瘍ト誤診ス可キヲ以テ疑似決シ難キ者ニ逢ハ、手術ヲ行フノ前、頻回精細ニ檢査ス可シ豫後ハ常ニ危險ニ屬ス稀レニ自然ニ恢復シ或ハ外科手術ヲ行フテ治スル例外ノ者アリ以テ其幸福ニ終リ得ルヲ證明ス可キヲナキニアラスト雖モ此一二例外ノ者ヲ以テ通則ヲ破リ難シ  
腦貌癩癩ハ稀レニ依然トシテ其原形ヲ有ツコトアレモ通常兒體ト共ニ發大シテ才智ノ障礙ヲ起ス者ナリ大ナル腦貌癩癩ハ時トシテ初メヨリ痴呆ト合併シ或ハ直チニ之ヲ誘發スル者ナリ

療法小ナル腦貌癩癩ニ於テハ宜シク復歸法ヲ試ム可シ煩躁スル腦症ヲ起サハ之ヲ捨テ、顛顛ニス此際只凹金屬板ヲ貼シ以テ外裝ノ傷害ヲ防ク可シ漿液ノ積聚ヲ兼ル者ハ時トシテ頻回針刺法ヲ行ヒ若クハ試驗用管針ヲ刺シテ液汁ヲ漏ラシ以テ腫瘍ヲ縮小セシム可キコトアリ然レトモ之ニ由テ癩癩ヲ治ス可キニ非スホーゲル氏ノ說ニ據ルニ  
ミンヘン府ノ解剖局寶庫ニ藏スル製造物ハ大人ノ後頭骨ニ「グロ―セ



乙貨大ノ全ク圓滑ナル一孔ヲ穿ツ者ニシテ生活ノ間腦貌僂偏之  
ヨリ脱出セシト云フ外科手術ハ大ニ危險ナルヲ以テ之ヲ行フモノ次  
第ニ減却ス可シ予曾テ前頭骨ノ鼻部ニ腦貌僂偏ヲ起ス一患兒ニ手術  
ヲ行ヘシニ化膿性腦膜炎ヲ起シ三十六時間ニ死亡ニ趣キシコアリ

〔六〕頭血瘍 Cephalohimataema-Thrombus neonatorum-Kopfhilteschwulst.

凡ソ小兒ノ頭血瘍ハ其部位ノ異ナルニ從テ三様ニ發スル出血ヲ總稱  
ス曰ク眞ノ頭血瘍一名外頭血瘍即チ頭蓋骨膜ト頭蓋骨トノ間ニ血液  
溢出スル者曰ク腱膜下頭血瘍即チ前頭後頭腱膜ノ上下ニ血液溢出ス  
ル者曰ク内頭血瘍即チ頭蓋天井ノ内面ニ於テ剛腦膜ト頭蓋骨トノ間  
ニ血液溢出スル者是レナリ而シテ外頭血瘍及ヒ内頭血瘍ハ時トシテ  
一齊ニ發スルコアリ

眞ノ頭血瘍外頭瘍ハ外皮平常ノ如ク鳩卵大ヨリ林檎大ニ至リ扁圓形  
ヲナシ多少彈力アリテ波動シ疼痛ヲ帶ヒサルヲ通則トナス或ハ既ニ  
分娩ノ際ニ發シ或ハ分娩ノ後暫クアリテ起リ指ヲ以テ之ヲ検査スレ

著ルシキ骨輪之ヲ周圍シテ境界ヲ畫ス其發スル部位ハ通常左側若  
クハ右側ノ顛頂骨ニシテ右側ニ多ク或ハ時トシテ均シク兩側ニ發ス  
ルコアリ(リッテル氏七十名ノ患兒ヲ經驗セシニ四十一名ハ右側、二十二  
名ハ左側七名ハ兩側ニ發セシト云フ)此腫瘍ヲ捨テ、自然ニ萎ヌレハ  
溢出セシ血液早晚次第ニ吸收セラレテ隆起セシ頭皮再ヒ扁平トナル  
稀レニハ含物化膿シ予カ管テ二患兒ニ目撃セシ如ク膿瘍トナリテ  
破潰シ或ハ腫瘍下ノ頭骨ニ腐死ヲ起ス又強ク指頭ヲ以テ按スレハ含  
容物ノ消散ト共ニ血瘍部骨底ノ突兀スルヲ覺ユルコアリ

原因此頭血瘍ノ原因ハ尙ホ未ク全ク分明ナラス或ハ謂フ分娩ノ際、外  
傷ニ由リテ起ルト然レモ此說ノ充分ナラサルハ證明セラル、所ニシ  
テチーゲレ氏マイス子ル氏ノ諸家醫産ニ於テモ亦之ヲ目撃セリト云  
フ實事アルヲ以テ觀レハ愈々其說ノ充分ナラサルヲ知ル可シラッゲ  
ンベッキ氏及ヒリッテル氏ノ說ニ據ルニ外頭血瘍ハ外骨板ノ發育及ヒ結  
構不充分ヨリ起ルト是レ眞ニ病體解剖ニ由テ證明セラル、所ニシテ



蓋シ骨輪ヲ生スルモ亦此説ニ由テ辨解スヘシ頭骨ノ血管、一種薄脆トナルヨリ起ルト云フ説アレトモ更ニ病體解剖學上ノ證明ヲ要ス可キ者トス外頭血瘍ハ特發スレハ通常吸収セラレテ治スレモ若シ内頭血瘍ト合併スレハ必ス死ヲ致ス者ナリ前頭後頭膜ト骨膜トノ間ニ血液溢出スル膜下頭血瘍ハ分娩ノ爲メニ發スルコト明カニシテ頗ル蔓延シ波動ナシ且ツ毫モ骨腦ヲ以テ圍繞セラレス兼テ頭皮綠色若クハ茶褐黃色ヲ帶フ通常速カニ吸収セラレテ消散ス又内頭血瘍ハ既ニ剛腦膜炎ノ條ニ論セリ宜シク本條ヲ參考ス可シ

**鑑別頭血瘍**ハ其發スル部位ト搏跳ノ缺クルト、其號泣ニ由リテ増大セザルト、歸納ス可カラザルトニ由リテ腦貌僂偏ト辨別ス可シ又普通頭血瘍 *Caput succedaneum* ハ通常發スル頭瘍ニシテ頭血瘍ト誤診ス可キコトアレモ頭血瘍ノ如ク境界著ルシカラス波動セズ且ツ頭ノ諸部ニ發ス然レモ頭皮ノ單純浮腫ヲ起スニ由リ指ヲ以テ之ヲ按スレハ粉泥ノ如シ又勃起性腫瘍ト誤診スヘキハ更ニ少ナシ何トナレハ勃起性腫瘍ノ

發スル部位并ニ其性質ハ誤診ヲ防クニ餘アレハナリ

**療法**頭血瘍ノ療法ノ次第ニ簡易トナルハ畢竟患兒ニ利益アルカ爲メナリ乃チ能ク忍ンテ時期ノ至ルヲ待テハ腫瘍ノ大小ニ從ヒ早晚全ク分解シテ吸収セラル、者ナリ沃頓丁幾、沃頓膏、香蠟精、赤葡萄酒ハ方今猶外用藥トシテ稱用ス又他ノ諸家ハ吸収ヲ促ス良法トシテ金屬板ノ不斷壓抵法、コロ、ジュユ捲法ヲ稱用セリ又予カ往年二三回行ヒシ如ク刺開法若クハ十字形切割法ハ方今猶ホ諸家ノ頗ル稱賛スル所ナレモ其治癒ヲ起スコト期望スルカ如ク速カナラス化膿スレハ疔布ヲ貼シ或ハ直チニ切開法ヲ行フ可シ

**〔乙〕脊髓及脊髓膜之疾病** *Krankheiten des*

*Rückenmarks und Seine Häute.*

凡ソ小兒ニ於テハ病體解剖ヲ行フテ證明ス可キ脊髓及ヒ脊髓膜ノ疾大人ヨリモ頗ル稀レナルハ固ヨリ明カナル所ナレモ抑、脊髓ノ検査ハ概シテ僅少ナルヲ以テ亦其分明ナラサル所以ノ一端トセサルヲ得ス



蓋シ此器ノ疾病ヲ論述スルヤ腦病ヨリ更ニ單筒ナル所以モ亦自ラ之  
レニ由リテ明カナルヘシ

(一) 脊髓及脊髓膜充血 Hypermie des

Rückenmarkes und seine Häute.

此疾稀レニハ特發シ多クハ繼發ス解剖學上ノ變化ハ主トシテ此器ノ  
大多血ニアリ即チ膨腫充滿シ加之擴張シテ靜脈怒張狀ヲナス所ノ血  
管、脊髓膜ヲ纏絡シ新ニ脊髓ヲ切割スレハ紫蔽色ヲ帶ヒ混一スル無數  
ノ血斑處々ニ撒佈ス此變化全脊髓ニ累及シ或ハ唯其一部ヲ局ス  
輕性充血ハ毫モ病牀ニ認ム可キ症候ヲ起サスト雖モ劇性ノ者ハ殊ニ  
充血ノ大蔓延ヨリ來ル刺衝ノ諸症ヲ發ス此諸症或ハ一週ニシテ直チ  
ニ消散シ或ハ亢進シテ軟弱、困重、麻痺ノ如キ壓迫症トナリ或ハ腦病ト  
合併スルカ爲メニ往々複雜ス

原因尙未タ分明ナラス予ハ破傷風、舞蹈病、癩麻質斯急性發疹病、脊柱腐  
潰及ヒ外傷ヨリ來ルヲ目撃セリ又初生兒ニ於テ往々劇甚ノ充血ヲ發

見スルヲアレモ詳カニ其原因ヲ辨解スルヲ能ハス

療法畧ホ之ヲ鑑別スルヲ得、若クハ確然之ヲ判決スル時ハ主トシテ

其原因ニ注目ス可シ其他凡テ姑息法ヲ行フ可キニ過キヌ方今猶ホ瀉  
血ヲ主張スル者アリ瀉血行ヒ難キ時ニハ皮膚衝動法ヲ換用ス可シ  
脊髓充血ト相親接スル者ハ脊髓出血ナリ蓋シ充血ニ比スレハ頗ル稀  
レニシテ隨テ其症候モ亦分明ナラス殊ニ脊髓管ノ上半ニ起ル然レモ  
脊髓膜出血ハ全脊髓管ヲ占メ往々初生兒ニ於テ頭腔出血ト合併シ通  
常分娩ノ際外傷ヨリ起ルモノナリ蓋シ脊髓出血ハ通常唯髮細管滲出  
性トナリテ發ス

予曾テ初生兒危險ナル舞蹈病及ヒ破傷風ノ經過中ニ蔓延性若クハ局  
處性出血ノ起ルヲ目撃セシヲアリ

(二) 脊髓膜炎 Meningitis spinalis.

此疾ハ間、小兒ニ散在性トナリテ發シ或ハ又時トシテ越昆埜密性腦脊  
髓膜炎トナリテ大ニ流行ス此條ニ於テハ將トニ散在性脊髓膜炎ヲ論



病体解剖炎症、脊髄剛膜ヲ侵ス即チ脊髄剛膜及ヒ其周圍ノ蜂窠織ニ充  
 血ヲ發シ遊離面ニ滲出物ヲ起スニ由リテ徵ス可シ或ハ脊髄軟膜ヲ侵  
 ス即チ脊髄軟膜、多少充血シ且ツ漿液狀纖維狀若クハ膿様ノ滲出物ヲ  
 以テ被覆セラル又或ル患者ニ於テハ蜘蛛膜囊中ニ大量ノ膿汁及ヒ漿  
 液ヲ見ルアリ時トノ脊髄軟化スルアリ殊ニ外表ニ發ス又予ハ他ノ患  
 兒ニ於テ脊髄夥シシ滲出物ヲ起シ其質著シク緻密トナリ一様ニ硬ク  
 且ツ貧血ヲ發スルヲ目撃セシヲアリ或ハ又滲出物乾涸ノ乾酪塊トナ  
 リ脊髄ヲ壓迫シ或ハ瘦削セシムルヲアレハ是レ稀レナル一症ニ屬ス  
 症候及經過嬰孩ニ於テハ破傷風狀ノ強直、下肢ノ震盪ニ由リテ時々弛  
 縱ス、絲ノ如キ脈、不利淺表ナル呼吸、兒体ヲ動セハ殊ニ發スル苦楚ノ泣  
 聲ノ外、更ニ他症ヲ呈ハサス是レ嬰孩ニ於テ多クハ鑑別シ難キ所以ナ  
 リ大兒ニ於テハ炎症、脊髄ノ上部下部若クハ全部ニ起ルニ隨テ其部ニ  
 刺スカ如キ疼痛ヲ訴ヒ、身軀ヲ動セハ疼痛更ニ増劇シ、關節及ヒ頂部強

硬シ、牙關緊急シ、感觸過敏トナリ、軀幹并ニ四肢ニ緊張性痙攣ヲ起シ、眞  
 ノ破傷風ニ至ルアリ、大小便失禁シ、呼吸壅塞シ、脈頻數トナリ、熱度粗ホ  
 亢進スルノ外、終リニ、シアノーシス、輕性麻痺、上肢若クハ下肢ノ眞麻痺  
 ナ起ス然レハ以上ノ諸症ハ炎症ノ部位廣狹及ヒ同時ニ發スル腦膜炎  
 ノ爲メニ多少變換ス可キ者ナリ

小兒ノ脊髄膜炎ハ通常經過迅速ナリ殊ニ初生兒及ヒ膿性滲出物夥シ  
 キ者ハ全經過纔カニ二三日ニ過キス大兒ニ於テハ二週乃至三週ニ至  
 ルヲアリ概シテ之ヲ論スレハ豫後不良ナリ

原因脊髄膜炎ハ脊椎ノ患恙ヨリ起ルコト少ナカラス故ニ時トノ脊椎ノ  
 腐潰ニ發ス或ハ又外傷ヨリ來ルアリ又初生兒ニ於テハ通常膿毒ノ一症  
 候ナリ予曾テ急性關節痙攣質斯ヨリ起ル危險ノ舞蹈病及ヒ劇シク脊  
 髓ヲ牽掣スル後ニ膿性若クハ漿液蛋白性脊髄膜炎ノ起ルヲ目撃セリ  
 療法全身瀉血及ヒ脊柱ヲ沿フテ局處瀉血ヲ施スハ學理ヲ以テ論スレ  
 ハ須要ナラスト雖モ方今尙ホ履行ソノ一療法ナリ沃土加里ヲ含ム



所ノ吸收膏若クハ水銀膏ヲ試用シ身軀四肢ノ劇痛及ヒ破傷風狀強直ニハ阿片ヲ投シ牙關緊急ヲ起サハ莫兒非涅ノ皮下注入法ヲ行フ可シ微温浴ハ往々大沈靜ヲ起ス又膿毒性ノ者ニハ規尼涅ヲ内服セシム可シト雖也治癒ノ目的ハ極メテ僅少ナリト謂ハサルヲ得ス「コロラルヒダレート」モ亦試用スヘシ少クモ鎮痙ノ効ヲ奏スル者ナリ

〔三〕越昆垚密性腦脊髓膜炎 Meningitis Cerebrospinalis epidemi-

ca.

此疾ハ急性傳染病ニ屬スト云フ説恐クハ真正ナル可シト雖也其本性尙ホ未ダ詳カナラサルヲ以テ予ハ之ヲ神經病門ニ編入セリ抑此疾ハ既ニ第十六世紀ノ始ニ當リ既ニ人ノ識ル所ニシテ殊ニ第十九世紀ニ於テ法蘭西、和蘭、獨乙、伊太利、英、吉利、亞米利加ニ大小ノ越昆垚密トナリテ發セリ予ハ此疾ヲ實驗スル「甚ク少ナシ故ニ下條ノ論ハ他氏「リチツケル氏ニ「マイル氏レベールト氏チームセン氏及ヘッス氏ノ書中ヨリ採集セリ

病體解剖眞ノ變化ハ腦及ヒ脊髓膜ニ起ル者ナリ通常膿狀稀レニハ漿液狀ニシテ傑列乙ニ類スル滲出物、腦底ノ肥厚セル赤色ノ腦膜ヲ被覆ス時トシテ腦ノ穹窿部ヨリ脊髓ノ脊髓軟膜及ヒ蜘蛛膜ノ深部ニ及フ「アリ而シテ膿狀ノ被包物、通常脊髓ノ後面ニ夥シク往々脊髓ノ灰白質ニ累及スル「アリ下垂性肺炎、胸膜炎、膿性心内膜炎、關節炎、劇甚ノ脾臟肥大、肝、腎及ヒ心筋ノ急性脂化、腸繫腺ノ腫脹ハ往々見ル所ノ剖見ナリ然レモ必發ノ者ニハ非ス

症候及經過頭痛及ヒ脊柱ヲ沿フテ發スル疼痛、項筋ノ強硬、惡心、嘔吐ノ如キ前徵ヲ顯ハス「アレモ頗ル例外ニ屬ス通常劇甚ノ戰慄及ヒ直ニニ後頭ヨリ頂部ニ達スル劇痛ヲ以テ起ル乃チ號哭、呻吟、頭ヲ擱ミ或ハ之ヲ撲ツ等ニ由テ此劇痛ヲ徵知セシム又殊ニ第一歳ノ小兒ニ於テハ精神瞬間ニ消滅シテ再ヒ回復セサルアリ極メテ危險ノ一徵トス頭首多クハ後屈シ疾更ニ經過スレハ下顎強硬シ若クハ眞ノ牙關緊急ヲ起シ全身皮膚ノ知覺機亢進シテ苦痛ニ堪ヒス四肢楚痛シ且ツ一時ノ輕



性麻痺、真麻痺、癲癇性搖擗、背部及ヒ四肢ノ破傷風狀強直相加ハル、皮膚ノ熱度殊ニ病初ニ於テ亢進シ往々攝氏ノ四十一度ニ至ルト雖再ヒ下降ス往々滿身ニ蕁麻疹、血斑及ヒ汗疹ヲ發シ或ハ屢、顔面ヘルペス疹ヲ起ス脈零ホ細疾往々不整トナリ疾ノ末期ニ於テハ殆ント觸知シ難シ脾臟肥大ハ殊ニ劇性ノ者ニ於テ見ル所ナレハ間々關如ス尿中ノ蛋白モ亦隱顯定リナシ大便常ニ秘結シ煩渴引飲シ小便澀少トナル治癒ニ向ヒハ主トシテ項強直寬解シ搖擗稀疎トナリ關節疼痛消散シ安眠シ脈力旺盛シテ強ク食氣回復ス稀レニハ殊ニ流行ノ初頭ニ患フル者三十六時乃至四十八時ノ後既ニ死スル者アリ平均スルニ其經過八日乃至十二日トス或ハ又數週ニ至ル者アリ

鑑別腦脊髓膜炎ノ症候、脊髓ノ患恙、泰裏土狀ノ熱及ヒ越昆垓密性ニ由テ判然鑑別ス可シ

豫後豫後ハ諸家ノ實驗ニ從ヒハ不良ナリ蓋シ死亡ノ數ハ其越昆垓密ノ性質ト患者ニ隨ヒ疾ノ輕重相異ナルトニ由リテ同シカラス平均ス

ルニ百分ノ五十乃至六十死亡ス

療法一二氏ノ說相背馳スルヲ以テ療則尙ホ未タ一定ニ歸セス多クハ有力ノ消炎法ヲ稱用シテ第一策トナス則チ耳後ニ蠟針ヲ貼シ脊柱ヲ傳フテ血角ヲ施シ頭部ニ氷捲法ヲ行ヒ冷浴若クハ滴浴法ニ兼テ發泡及ヒ灌腸ヲ施シ皮膚及ヒ腸管ヲ誘導セリ又他氏、レベルド氏ハ有力ナル消炎療法ノ堪ユ可ラサルヲ主張セリ姑息藥中、阿片、莫兒非涅殊ニ皮下注入法トナス及ヒコラルヒメラトハ劇痛ノ者ニ於テ闕ク可カラズ或ハ又鎮痛藥トシテアトロヒチヲ稱用ス蓋シ此疾ノ熱度及ヒ泰裏土性ニ注目スレハ規尼涅ヲ試用セサル可カラズウンデルリヒ氏ハ沃土加里ヲ稱用セリ又衰脫ヲ起ス者ニハ直チニ衝動藥ヲ投ス可シ

〔四〕脊髓及脊髓膜之新生物

新生物ニ算ス可キ者ハ左ノ如シ蓋シ醫籍中ニ載スル二三ノ患者ヲ以テ之ヲ證明ス可キノミ

〔甲〕硬結ヲ兼ル脊髓結組織ノ新生物或ハ脊髓ノ一局部ヲ畫シテ瘤狀



ニ起ル者アリ或ハ其大部ニ蔓延スル者アリ  
予曾テ急性舞蹈病ニ由テ斃ル、八歳半ノ一小兒ニ之ヲ目撃セリ即チ  
其脊髓殊ニ上半ニ於テ圓鈍トナリ頗ル貧血ヲ起シ其硬キヲ殆ント軟  
骨ノ如シ其病形ハ劇甚ノ小舞蹈病ニシテ臨終ノ日破傷風狀ノ強直ヲ  
起セリ

〔乙〕結核脊柱腐潰ニ於テ剛脊髓膜ノ結核性滲出物トナリテ起リ或ハ大  
結節トナリテ發ス或ハ粟粒結核トナリテ發スルコトアレハ極メテ例  
外ニ屬ス蓋シ脊髓實體ニ起ルハ稀レナリアイゼンシツ氏ハ頗ル緊要  
ナル一患者ヲ記セリ曰ク曾テ一小兒アリ齡三歳半結核ニ罹リテ死ス  
剖驗セシニ全身結核ニ兼テ腦中ニ於ル結節及ヒ背髓ノ下端ニ於ル豌豆大ノ結核ヲ發見セリ且ツ第八背椎ニ至ルマテ胸背共ニ麻痺シ全身  
ノ筋肉殊ニ運動ノ際振顫シ其狀振顫麻痺ニ於ルカ如クナルヲ以テ生  
前既ニ此疾ナルヲ疑察セリト  
脊髓ノ結核ハ通常他臟ノ結核ト共ニ起ル者ニシテ脊髓ノ患恙ニ兼テ

テ他臟ニ結核ノ徵アル時ハ其鑑別中ラスト雖モ遠カラズ

〔丙〕肉腫及癰腫ハ以上ノ二患ニ比スレハ更ニ稀レナリリユスチル氏ノ實  
驗セシ齡四歳五月ナル一小兒ニ於テハ幅サ十二センチメートル長サ  
十六センチメートルノ肉腫左胸ニアリテ脊髓管中ニ侵入シ第四背椎  
ヨリ第十背椎ニ至ルマテ殆ント全ク之ヲ填實シ脊髓膜ニ由リテ緊包  
セラレ脊髓實體ハ却テ前方ニ排擠セラレテ甚シク壓平セラレタリ然  
レモ生前ニ於テハ下肢ノ麻痺ノ外更ニ脊髓ノ患恙ヲ疑察ス可キ症候  
ナカリシト云フ此疾ノ近因尙ホ未タ分明ナラス

〔五〕脊椎破裂 Spina bifida. Hydrocephalus, Hydromeningocele,  
Hydromyelocele.

胎兒脊髓管及ヒ蜘蛛膜下嚢中ノ先天性漿液聚積ハ即チ此疾ノ本性ナ  
リ劇度ノ者ハ脊髓ノ結構全ク妨碍セラレテ脊髓闕亡脊髓管唯空虚ノ  
一溝ヲナス輕度ノ者ハ脊髓發育ノ原形ヲ有チ或ハ極メテ下度ナリト  
雖モ全ク發育ン存ス蓋シ脊椎毫モ變換セサルハ極メテ稀レニシテ多



クハ一脊椎弧乃至數脊椎弧發育全クカサレカ爲メニ其缺損ノ輕重ニ從ヒ虧裂脊椎柱破裂ノ長短廣狹モ亦相異ニシテ多クハ腰椎及ヒ薦骨椎ニ發シ稀レニ背椎及ヒ頸椎ニ起ル通常唯一處虧裂スレハ稀レニハ二處乃至數處ナルアリ漿液充滿ノ榛實大ヨリ兒頭大ナル囊此虧裂ヨリ脫出シ外皮ハ脊髓剛膜及ヒ蜘蛛膜ヨリ成リ且ツ著ルシク波動ス又脊髓之ト一齊ニ脫出スレハ水腫性脊髓貌倭屈ヲ起ス之レ腦貌倭偏ニ類スル發症ナリ而シテ囊壁ニ脊髓末端附着スレハ外部ヨリ著ルシク識別スヘキ臍狀ノ陷沒ヲナス(ヒルシヤウ氏)又脊髓薄膜狀トナリテ展張シ囊ヲ分チテ兩半トナスアリ(ペドナル氏)蓋シ此囊ノ破裂ハ既ニ子宮内ニ生シ或ハ分娩ノ爲メニ起リ或ハ後來ニ至リテ外皮ノ熔解若クハ壞死ヨリ發ス又他ノ不具例之腦水腫半腦鎖肛鎖陰及ヒ足彎曲ト合併スルハ往々見ル所ナリ

症候此疾ノ症候中上ニ論セシ腫瘍ハ尤モ緊要ナル一症ニシテ或ハ蟻屈シ或ハ梨子狀ヲナシ細莖ヲ以テ脊髓管中ニ入り之ニ觸ルレハ聊カ

發育スル脊椎ノ尖端ヲ據證ス可ク又強ク之ヲ按スレハ著ルシク窄小シ之ニ由リテ往々腦脊髓症例之嘔吐、搖擗、下肢攣縮等ヲ起ス通常此腫囊若シ分娩ニ由リテ破裂セサレハ直チニ分娩ノ後破裂シ且ツ其外皮剝離シ若クハ羅斯性ノ炎ヲ起シ往々壞疽狀ニ陥リ或ハ脫亡シ若クハ脊髓膜炎及ヒ脊髓炎ヲ發シテ斃ル又外皮依然トシ變常セス或ハ次第ニ硬結シテ斷エス腫瘍ヲ防護スルコトアレハ例外ニ屬ス蓋シ此ノ如キ者ニ於テハ患兒依然トシ生存シ隨テ身軀モ亦成長シ加之成人ノ期ニ達スルコトアリ予曾テ腰部ノ脊柱破裂ヲ患フル小兒二名ヲ經驗セシニ一名ハ齡既ニ四歳トナリ腫瘍終始林檎大ニシテ平常ナル外皮ヲ以テ被ハルレハ身體能ク發育シ他ノ一名ハ齡二歳鳩卵大ノ腫瘍ヲ發スレハ身體頗ル善ク發育シ而兒共ニ下肢ノ麻痺ヲ起サス又膀胱直腸ノ麻痺ヲ發スルコトナカリシ

療法二般ノ主治即チ一ハ腫瘍ヲ窄小ナラシメ一ハ脊髓管ノ虧裂ヲ殊ニ外科術ニ由リテ壅塞セント欲シテ苦心スレハ尙ホ未ク其目的ヲ達



スルコ能ハス蓋シ醫籍中、手術ニ由テ治スル二三ノ患者ヲ記載スト雖  
 田皆例外ニ屬ス又試験管針ヲ刺シテ稀釋沃土丁幾ヲ注射シ(サツサイナツ  
 シ氏及ヒライヒマンド氏或ハ針ヲ刺シ或ハ割除法ヲ行ヒ或ハ締斷法  
 ナ施シ(ギゴン氏或ハコロ、ゲム、及ヒ壓抵綑帶ニ由テ壓抵法ヲ行ヒ時  
 トノ偉効ヲ奏ス可シト雖モ往々死期ヲ促ス者ナリ或ハ又金屬延板強  
 キ皮革若クハ彈力護謨ヲ以テ製スル半球形ノ恰好ナル防護裝置ヲ施  
 シテ腫瘍ノ外傷ヲ防キ且ツ之ニ由リテ自然ノ恢復ヲ助クルハ尤モ適  
 應ノ療法ナリ

[六]知覺神經病[神經知覺機亢進] *Sensibilitätsneurosen, Hyper-*

*esthesien*

下條ニ掲グル小兒ノ知覺神經病論ハ予カ實驗ニ兼テウアルタイキス  
 氏リルリート氏バルターツ氏ヘノッソ氏ロムベルヒ氏及ヒポーン氏ノ  
 報告ニ基ツク者ナリ

腦神經痛[偏頭痛] *Neuralgia cerebri, Migräne, Hemieranie.*

此疾ハ九歳ヨリ十五歳ノ小兒ニ起リ少女ヨリモ童兒ニ多シ而シテ疼  
 痛ハ通常、額及ヒ顛頂ニ發シテ數時間稽留シ往々惡心嘔吐、羞明、頭眩ト  
 相伴フ予曾テ榮養ノ佳良ナル十歳ノ一小兒殆ト毎四週乃至毎六週偏  
 頭痛ヲ起シ毎回二日間稽留セシ目撃セリ乃父モ亦偏頭痛ニ苦シヨ  
 シナ以テ其原因遺傳ニアルヤ明カナリ又春意發動ノ期ニ貧血及ヒ蒸  
 黃病ノ徵ヲ呈ハス少女ノ偏頭痛ハ時トシテ天癸初テ至ルマテ連綿ス  
 ルコアリ又予ハ曾テ腦漏、鼻加答兒ヲ患ヒ或ハ手淫ヲ弄スル小兒ニ頻  
 回前頭神經痛ノ起ルヲ目撃セシコアリ又ポーン氏ハ一少女ニ先天性  
 左半頭痛ヲ目撃セリト云フ

後頭神經痛曾テ予カ實驗セシ著ルシキ者ハ極メテ神經性ナル九歳ノ  
 一少女ニシテ十四日間毎日午後一時、後頭痛起リ始メ四時乃至六時  
 稽留シ夜間殊ニ甚シク疼痛ノ強サ并ニ稽留ノ時間次第ニ減却シ第二  
 回ノ發作ハ嘔吐ト相伴ヒ大量ノ規尼涅ヲ投セシニ十四日ノ後全治セ  
 リ然レモ更ニ脾臟腫大并ニ間歇病ノ徵アルコナシ



毛狀神經痛腺病性眼疾ニ於テ往々見ル不幸ノ一患ナリ眼瞼ノ刺痛ニ兼テ多少劇シキ羞明ヲ起ス或ハ日間二三時稽留シ或ハ經久連綿ス腺病ノ治療ヲ行ヒ水銀軟膏ニ萇若ヲ和シ局處ニ塗擦シ頻回頭部ヲ冷水中ニ蘸シ或ハ頭部ニ滴浴法ヲ行フ可シ

三又神經痛間歇性上眼窩神經痛ハ瘴毒ノ感染ヨリ起ル時トシテ惡寒期若クハ發熱期先驅セサルコアリ眼窩縁ノ中央ヲ按スレハ疼痛増劇ス規尼涅及ヒホール氏亞砒酸丁幾ヲ與フレハ常ニ輕快ヲ起ス

頸神經痛ハ多クハ小兒ノ窒扶斯ト相伴フ者ナリ予カ曾テ治療セシ十歳ノ一小女ハ窒扶斯ノ第二週ヨリ終期ニ至ルマテ絶ヒス劇甚ノ頸神經痛ヲ發シ輕ク頸ニ觸ル、モ尙ホ號泣セリ又結核性腦膜炎ノ初起ニ於テ往々之ヲ目撃セリ

膊神經痛ウルライ氏ハ曾テ十三歳ノ童兒拇指ノ指骨ヲ火傷スル者ニ之ヲ目撃セリ即チ發作狀ノ疼痛拇指ヨリ始リ中膊神經ノ系路ヲ沿テ放射シ六週間炭酸鉄ヲ投シテ全ク治癒セリト云フ又ヘノッ氏ハ癱瘓

質斯ヨリ起ル膊神經痛ニ沃土加里ヲ與ヒテ治癒セリト云フ

肋間神經痛此神經痛ハ諸般ノ疾病ヨリ起ル者ニシテ尤モ多キハ胸背ヲ帶狀ニ圍繞スルヘルベス疹ト相伴フ時トシテ疹胞ヲ發スル一二日前既ニ神經痛ヲ發スルコアリ曾テ虛弱ナル十一歳ノ一少女ニ於テ此帶狀疹消散セシ後神經痛尙ホ十四日間連綿シ殊ニ夜間ニ發セシコアリ又脊柱ノ腐潰ハ直接ニ刺術スルカ爲メニ往々劇甚ノ肋間神經痛ヲ發スルコアリ曾テ十四歳ノ一童子アリ八年以來脊柱腐潰ヲ患ヒ第九對及ヒ第十對肋間神經ノ系路ヲ沿テ劇甚ノ疼痛反復セリ又萎黃病春意發動ノ困難及ヒ窒扶斯モ亦此ノ如キ神經痛ヲ起ス者トス

下肢神經痛股關節炎ノ初起若クハ其經過中及ヒ腰椎ノ腐潰ニ見ル所ニシテ疼痛ノ起ル所ハ膝踵及ヒ跗關節ナリ

坐骨神經痛ホーン氏ノ曾テ目撃セシ一患者ハ十五歳ノ童子ニシテ疼痛右脚ヲ占メ毎宵五時乃至七時ニ起リテ夜間連綿シ晝間ハ容易ク病脚ヲ運動シ疼痛ヲ挾マス神經ノ系路ヲ按スルモ疼痛ヲ覺ユルコナク且



ツ更ニ熱ヲ帶ヒサリシト云フ凡ソ内臟神經痛中、疝痛ノ如ク頻數ニシテ且ツ劇甚ナル者ハ非ス

**腸神經痛、腸間膜神經痛**即チ疝痛乳兒ハ殊ニ初生ノ第一週ニ於テ屢々之ヲ患フル者ナリ即チ疼痛ノ發作ハ號泣ノ劇甚ニシテ透徹スル、脚ヲ肚腹ニ向テ牽掣スル、頭首ノ後屈スル、手ヲ痙攣狀ニ包握スル、肚腹ノ緊張スル、顔面ノ甚シク赤色ナル、頰部ノ發汗淋漓ナル、胸部ノ反張スル等ニ由リテ徵ス可ク通常口及ヒ肛門ヨリ瓦斯ヲ放チ或ハ大便ヲ泄シテ寛解ス蓋シ其原因ハ胃寒、不消化、瓦斯積聚、胃腸加答兒、便秘等ニアリ腸蟲殊ニ蛔蟲ハ大兒ニ於テ輕重二性ノ腸神經痛ヲ起ス但シ通常臍部ニ發ス

**胃痛**ハ小兒ノ時期ニ稀レナル一種ノ神經痛ナリ九歳ヨリ十四歳ノ小女ニ於テハ全ク胃病ニ關スルコトナク春意發動困難ニ合併シ往々頑固ナルコアリ

曾テ予カ實驗セシ一患兒ハ胃痛二年間少シク間斷シテ稽留シ往々尋

麻疹ト相伴ヒ或ハ之ト交換セリ或ハ又腸蟲殊ニ蠟蟲ヨリ起ルコアリ予カ曾テ實驗セシ九歳ノ一男兒ハ貧血家ニシテ胃痛頻回反復シ兼テ警戒スヘキ腦症ヲ挾ミ十八ヶ月間運綿スレモ鎮劑ヲ投セシ後諸症全ク消散セリ

**膀胱痛**屢膀胱結石ト相伴フ或ハ劇甚ナルアリ或ハ輕易ナルアリ其他予ハ之ヲ膀胱加答兒ノ經過中、室扶斯ニ發スル格魯弗性膀胱炎後(六歳ノ一男兒ニ於テ)膀胱結核及ヒ脊柱腐潰ヲ患フル者ニ之ヲ目撃セリ又ヒタ氏ニ從ヘハ腸蟲ノ刺戟及ヒ手淫ハ膀胱痛ヲ起ス者ナル可シト云フ

**[七]運動神經病 Motilitatis-Neurosen.**

**[イ]驚風[搐搦] *Eclampsia, convulsionen.***

驚風トハ弛張性及ヒ緊張性痙攣一ニ隨意筋或ハ無數ノ隨意筋ニ蔓延シ精神及ヒ五官作用ヲ多少障礙スル者ヲ謂フ蓋シ驚風ノ發作ハ癲癇ノ發作ト區別シ難キヲ以テ驚風ヲ急性癲癇トナシ癲癇ヲ頻回反復スル慢性驚風ト看做スモ可ナリ甲ハ倏忽一過ニシテ直チニ治癒シ或



ハ死亡ヲ起スヲアリ或ハ慢性ニシテ時々刺戟ヲ起スヲアリ而シテ搖  
擻更ニ經過シ反復シ或ハ休歇スル後始メテ其原因何如ヲ判決ス可キ  
アリ

原因、症候及經過凡テ搖擻ハ他患ノ症候ナリ其刺戟ノ源或ハ中樞神經  
系ニアリ或ハ末梢神經ニ在ルニ從ヒ二種ニ區別ス曰直接性即チ特發  
性搖擻曰間接性即チ症候性搖擻所謂反射性是レナリ

〔甲〕直接性搖擻 *Directe erzeugte Convulsionen*

此搖擻ノ原因及ヒ其發スル方法數般アリ予ハ通覽ニ便ナラシメンガ  
爲メニ病軀解剖學ニ基キ之ヲ下條ノ六種ニ區別ス然レモ往々數箇ノ  
原因相集合シテ搖擻ヲ起スヲアルヲ以テ必ス之ヲ一原因ニ歸スルコ  
能ハサルニ注目スルヲ要ス

〔二〕腦及腦膜ノ動脈充血ヨリ起ル搖擻

小兒ノ体温亢進充血及ヒ腦膜充血ヨリ起ル急性諸病ニ發スル者はレ  
ナリ其他腦膜炎ノ初起及ヒ日射ニ由テ起ル搖擻モ亦之ニ屬ス齒牙發

生ノ時期ニ起ル驚風ハ其原因返射刺戟ニ在リト雖モ一半ハ此種ニ屬  
スル者トス

〔三〕靜脈充血ヨリ起ル搖擻

疫咳、格魯弗性肺炎等ニハ加答兒性肺炎ノ經過中、胸膜炎滲出物、格魯弗  
ノ極期、心臟異常及ヒ便秘ニ於テ起ル者はナリ

〔三〕貧血ヨリ起ル搖擻

腦貧血ハ腦充血ノ如ク往々痙攣ヲ喚起ス大脫血及ヒ大脫血後ノ急性  
全腦貧血、腦腫瘍ヨリ起ル局處腦貧血ニ發ス或ハ又脈管運動神經性脈  
管痙攣ヨリ起ルナラン

〔四〕血質變換ヨリ起ル搖擻

猩紅熱、麻疹、痘瘡、室扶斯、間歇熱ノ如キ急性傳染諸患ニ起ル者ハ主トシ  
テ此種ニ屬ス乃チ此等ノ諸病ハ往々劇甚ノ搖擻ヲ以テ起リ或ハ其經  
過中ニ之ヲ發シ患兒愈幼弱疾患愈劇甚ナレハ愈々搖擻ヲ起シ易キ者ト  
ス然レモ此一種特異ナル血液變換方今尙未ダ詳カナラズノ外尙ホ之



ト一齊ニ起ル所ノ充血モ亦搐搦ヲ起ス原因ノ一ト看做サ、ル可カラ  
ス蓋シ尿毒、膽毒、質布帝里亞、藥物及ヒ中毒(炭酸中毒)ノ搐搦ヲ發スルモ  
亦血質變換ニ由ル者トス

〔五〕腦及腦膜ノ疾病ニ關スル搐搦

此搐搦ハ腦膜炎、腦水腫、腦浮腫、腦炎、腦腫瘍、及ヒ頭腔出血ニ起リ時トシ  
テ此等ノ腦患ヲ辨別ス可キコアリ

〔六〕病的頭蓋變換ヨリ起ル搐搦

頭蓋癆ヲ挾ミ或ハ然ラサル佝僂病、慢性腦水腫、及ヒ頭蓋細小ヨリ起ル  
者是ナリ

〔乙〕間接症候性即チ反射性搐搦 Indirectsymptomatische

oder reflectorische Convulsionen.

種々ノ誘因(往々曖昧ナル者アリ)ヨリ來ル所ノ知覺神經刺戟ハ往々小  
兒ノ搐搦ヲ起ス乃此種ノ反射刺戟ニ算ス可キ者ハ第一道ノ障礙、殊ニ  
乳兒、胃飽滿、不消化、腸加苔兒、頑固ノ便秘及ヒ腸蟲ナリ母ノ劇甚ナル忿

怒ノ後起ル乳兒ノ搐搦モ亦此種ニ屬ス其他過熱ノ浴湯、湯火傷、羅斯皮  
膚ノ刺入、化膿等モ亦反射刺戟ナリ予嘗テ頗ル肥健ナル一小兒、頸膿瘍  
ノ經過中ニ驚風ヲ起シ膿瘍ヲ破開スル後再發セサルヲ目撃セシコアリ  
リ又耳炎、外聽道ニ竄入スル金龜子、炎症、例之、胸膜炎、腹膜炎、肺炎モ亦反  
射感動ヲ起ス可キ者トス又齒牙發生期ニ起ル反射痙攣ハ能ク人ノ知  
ル所ナレトモ頗ル注意シテ辨別スルヲ要ス蓋ク之ヲ三叉神經纖維ノ  
刺戟ニ歸スルコ勿レ

其他搐搦ノ原因トス可キハ許多ノ小兒ニ証明シ得ル如ク遺傳ノ素質  
ト爲サ、ル可ラス蓋シ全神身經系抵抗力ニ乏シキニアリ乃チ此ノ如  
キ小兒及ヒ親族ノ牀質ヲ檢シテ其搐搦ヲ起ス所以ノ理ヲ發見スヘキ  
コ少ナカラス然レモ盡ク皆然ルニ非ス

搐搦ハ以上ノ甲因若クハ乙因ヨリ起ルニ從テ或ハ前兆ノ患恙ナク忽  
然トシテ發シ或ハ一種ノ前兆、例之、不快、性急、流涕、呻吟、憂愁、睡中ノ驚怖  
及ヒ驚起ニ由テ誘起セラル又面色忽チ青ク(偏類ニ著ルシク)或ハ兩頰ニ



顯レ變換定リナク藍線著ルシク唇ヲ圍繞シ顔面聊カ肉闕キ起ス等ハ  
 往々搖擲驟カニ起シトスル徵ナリ  
 驚風發作ノ度數ハ一様ナラス蓋シ發作ノ一回ナルハ稀レコシテ往々  
 多少休歇シテ數回相發スル者ナリ一發作ノ時間ハ二三分時ヨリ數時  
 ニ至ル發作ノ時間愈長ケレハ關係愈容易ナラス又刺衝ノ竈窟或ハ神  
 經中樞ニアリ或ハ末梢ニアリ或ハ小ニシテ一處ヲ局シ或ハ散佈シテ  
 數處ヲ占ムルニ從テ搖擲或ハ局所ナルアリ或ハ全身ナルアリ或ハ諸  
 筋系ニ反復シテ起ルアリ或ハ必ス同一ノ筋系ニ反復シテ發スルアリ  
 療法搖擲未タ發セサリシ前其健康ノ狀態何如ヲ殊ニ注目シテ根治策  
 ナ立ルハ療法ノ最モ要件ナレトモ常ニ容易ナラス痙攣ノ險易ト旨趣ヲ  
 正シク理會スルニ動モスレハ經久ノ時間ヲ費サ、ルヲ得ス且ツ眞ノ  
 關係何如ハ全ク了知シ難キコアルヲ以テ往々根治法ニ換ルニ姑息法  
 ナ以テス可キコアルハ自ラ明カナリ蓋シ發作ノ際若クハ發作終ル後  
 患兒ヲ仔細ニ檢査スルハ痛ク禁セサル可カラズ殊ニ反射性痙攣ニ於

テ然リ凡テ狹窄ナル衣類被褥ヲ除却シ務メテ多量ノ空氣ヲ流通セシ  
 ムルヲ第一策トス多クハ嚔下障礙セラレ或ハ全ク能ハスシテ藥物ヲ  
 投シ難シ故ニ主トシテ皮膚及腸管ニ誘導法ヲ行フヘシ即チ冷水醋、コ  
 ロールホルム、一回ノ灌腸ニ一滴乃至三滴ヲ混合セル灌腸法ヲ行ヒ風  
 氣膨脹スル者ニハ阿魏ヲ加ヒ其他水若クハ醋ヲ以テ皮膚ヲ摩擦シ芥  
 子泥若クハ山苳菜泥ヲ身軀及四肢ニ塗擦シ小兒ヲ裸體ニシテ冷水ニ  
 蘸セル麻布ヲ以テ包裹シ或ハ温浴ヲ行ヒハ往々速カニ全身痙攣ヲ鎮  
 靜ス可シ殊ニ齒牙發生期ノ小兒ニ然リトス其他用ユ可キ藥石ハ亞鉛  
 製劑殊ニ亞鉛華ナリ或ハ單用シ或ハ甘汞ト伍シテ投ス可シ〔亞鉛華〇  
 三甘汞〇、一五白糖四、〇研和シ分チテ八包トナシ每一時一包ヲ服セシ  
 ム又砒石、硝酸銀、拖布兒私散ヲ試用スヘシ予ハブローム加里、一四五乃  
 至二〇ヲ水一二〇、〇ニ溶解シ每三時乃至四時一小兒食匙ヲ與フヘシ〕  
 ナ投シテ効ヲ收メシコナキヲ以テ常ニ亞鉛ヲ慣用セリ又時トシテ  
 コロラルヒダラト〔〇、一五〇、二五乃至〇、四ヲ水八〇、〇ニ溶解シテ每



一時一咖啡匙ヲ與フ可シハ偉効ヲ奏スルコトアリ又ブランド氏及トロ  
 カウ氏ノ大ニ稱用セシ頸動脈指壓法ハ到底急性充血ヨリ起ル搐搦ニ  
 於テ理上ノ主治ヲ見ル可ト雖モ其緊要ナルヤ否ヤニ至リテハ頗ル  
 疑問ノ中ニアリ且ツ予カ實驗ニ由ルニ此手術ノ効績ヲ見シコトナシ又  
 中毒性搐搦殊ニ間歇熱室扶斯等ノ經過中ニ起ル者ニハ大量ノ規尼涅  
 頓服〇〇七乃至〇一四ヲ試用スヘシ予ハ尿毒性搐搦ニ之ヲ用ヒテ偉  
 効ヲ奏セシコトアリ腸蟲ノ疑アルカ若クハ既ニ腸蟲出テシ者ニハ驅蟲  
 劑ヲ投ス可シ危篤ナル腦患ヨリ起ル搐搦ニハ治療ヲ行フモ奏効少ナ  
 キヲ通則トス

〔ロ〕牙關緊急及破傷風 Trismus und Tetanus

破傷風トハ一隨意筋若クハ全身ノ諸隨意筋ニ緊張性筋痙攣ヲ起ス運  
 動神經病ヲ謂フナリ此痙攣單ニ咀嚼筋ニ區畫スル者ヲ名ツケテ牙關  
 緊急ト謂フ牙關緊急ト破傷風ハ通常小兒ニ併發ス蓋シ破傷風ハ常ニ  
 牙關緊急ト相伴フト雖モ牙關緊急ハ破傷風ヲ挾マサルコトアリ概シテ

之ヲ論スルニ此疾ハ屢見ル者ニ非ス然レモ尤モ多キハ初生兒ナリ予  
 ハ十二年間ニ五十二名ヲ經驗セシニ四十名ハ初生兒ニシテ十二名ハ  
 童子ナリ但シ童子ハ眞ノ破傷風ヲ發シタリシ

病体解剖從來病牀解剖ヲ行フト雖モ此疾ノ本性ヲ確定スヘキ器質障  
 碍尙ホ未ダ明カナラス腦脊髓及腦膜充血内臟及患ニ罹ル筋肉ノ多血  
 及脊髓ノ蜘蛛膜囊中ノ漿液狀醋漬肉様若クハ血性ナル液汁ハ之ヲ要  
 スルニ此疾ノ原因ニ非スシテ却テ其結果ナラン然レモ予ハ時トノ近  
 因ト推考セシコトアリヒルスベルヒ氏ノ說ニ從ヒハ腦炎ハ初生兒牙關  
 緊急ノ器質原因ナリト云フロキタンスケ氏及デムメ氏據證セシ脊髓  
 ノ結組織發生ハ決シテ此病ニ通シテ見ル所ノ變換ニ非ス又往々外傷  
 ノ徵候及全ク癩痕ヲ結ハサル臍ヲ見ルコトアリ

症候及經過此疾ノ初生兒ニ發スル初生兒牙關緊急及初生兒破傷風方  
 法ハ左ノ如シ乃十分娩ノ後三日乃至八日ニ至リ不安涕泣睡眠ノ打起  
 欠伸急ニ乳房ヲ握リ又直チニ之ヲ抛却スル等ノ前兆症前驅スル後頓



ニ牙關緊急ヲ起シ顔貌稜角ヲ生シ唇壓閉セラレ尖リテ獸吻ノ如ク眼目緊閉シ鼻翼往々鼓動シ此症次第ニ間歇性ノ痙攣トナリテ頸筋背筋終リニ四肢ニ波及シ小兒臥シテ偶像ノ如ク之ヲ起立セシムルヲ能ハス又吸乳スルヲ能ハス嚙下スル能ハサルヲ以テ著ルシク麻痺ス痙攣ノ休歇スル時間次第ニ稀少短縮シ脈搏増進シテ一分時間一百四十至乃至一百六十至トナリ慢性ナル者ニ於テハ牀温攝氏ノ三十七度半急性ナル者ニ在テハ三十九度乃至四十度ニ昇リ病初ヨリ二三日極メテ長キモ八日ノ後斃ル、マテ冷粘汗皮膚ヲ被フモノナリ童子ノ破傷風ハ殊ニ牙關緊急シテ驟カニ起ルアリ或ハ頸部ノ感觸過敏及掣痛、寒時ノ惡寒、頸痛、嚙下談話ノ困難ノ如キ前兆症前驅シテ發スルアリ但シ乙性ノ者ハ直チニ之ニ次シニ牙關緊急及全身破傷風ヲ以テシ項部軀幹及四肢ノ筋肉ヲ抵觸スルニ強硬ニシテ板ノ如ク全ク働性及ヒ受性ノ運動ヲナスヲ能ハス然レモ知覺機亢進シ若クハ變常セズ疾更ニ經過スレハ皮膚ノ熱度亢進スルヲ通則トナス然レモ死期迫

ルニ及ソテ往々下降シテ常度ノ下ニ至リ脈細數終リニ不整トナリ呼吸モ亦往々調節セス又破傷風ノ形狀ハ予カ實驗ニ據レハ尤モ多キハ「ナルトト」ニ「ユス」ニ「身軀全ク平直ニ強直スル者」稍稀レナルハ「チビスト」ト「ユス」ニ「身軀後方ニ屈スル者」尤モ稀レナルハ「エムプロスト」ト「ユス」ニ「前方ニ屈スル者」ナリ初メ發作ト寛解ト相交換スレモ次第ニ發作連續シテ間斷セス假令間斷スルモ唯輕易ノ搖擲性攣縮ニ由リテ寛解スルノヨリ五官機能ハ多クハ死スル少ク前マテ依然トシテ靈活ナリ予ハ死前十五時乃至二十時ニ至リ初メテ其精神曖昧トナリ或ハ全ク消却スルヲ見シコアリ而シテ此疾ハ通常死亡ニ轉期ス乃チ病初ヨリ二三日ノ後既ニ死シ若クハ二三週ヲ經テ斃ル間々治癒ニ趣クコトアレハ例外ニ屬ス蓋シ休歇ノ時間長ク且ツ眞ニ休歇シテ睡眠シ嚙下ノ力恢復スレハ治癒ニ趣クヲ期望スヘシ予ハ曾テ五十二名ヲ實驗セシニ四十五名死亡シタリシ

原因其原因ハ尙疑團ノ中ニアリ其誘因ニ從ヒテ破傷風ヲ三種ニ區別



ス曰ク外傷性破傷風曰ク癩麻質性破傷風曰ク中毒性破傷風是レナリ蓋シ皮膚ノ知覺神經諸般ノ有害ナル外感ニ由リテ刺戟セラレ之ニ由リテ起ス所ノ運動神經纖維ノ反射性痙攣ハ尤モ頻數ナル原因ナリ而シテ初生兒ノ破傷風ハ外傷性ナルアリ或ハ癩麻質斯性ナルアリホーゲル氏曰ク初生兒ノ破傷風ハ必ス臍ノ癩痕ヲ結フ機ト相連係スト然レハ此說ハ實事ニ由リテ辯駁セラル、一既ニ久シ但シ二三ノ患者ニアリテハ臍ノ切端明カニ此疾ノ起始點ナル可シ是レ即チ外傷性破傷風ナリ其他寺院律切割法譯者案スルニ猶太宗ノ門徒初火生兒ノ包皮ヲ切割スルヲ云フ傷後ボーン氏ノ說ニ起ル者モ亦此種ニ屬ス又他ノモノニ於テハ其原因初生兒ノ嬌軟ナル皮膚ニ感入スル大寒冷浴假死シテ生ル、初生兒ニ水ヲ灌シニアリ恐クハ戸隙ノ風モ亦然リ又劇甚ナル熱度列氏ノ三十二度乃至三十五度ノ浴湯皮膚ニ感入シテ起ル者モ亦此癩麻質斯性破傷風ニ屬ス予カ頃日經驗セシ一患兒ハ生後第十四日ニ甚シキ熱浴ヲ行フ後牙關緊急及破傷風ヲ起シ二日ヲ經テ死亡セリエルボング地名

ノケヘル氏曰ク(一千八百六十八年産科月刊)曾テ一産婆アリ熱度ヲ計ルル粗略ニシテ浴湯熱キニ過キ之カ爲メニ二年間ニ産セシ三百八十名中九十九名牙關緊急ヲ以テ斃レシト云フ又室内ノ空氣不良ニシテ疫癘ノ氣ヲ有キ且ツ燻煙スレハ破傷風ヲ誘起スト云フ說ハ之ヲ要スルニ確然タル無數ノ觀察ニ基ツクモノナラシカ  
童子ノ牙關緊急及ヒ破傷風ハ諸般ノ外傷時トシテ瑣細ナル者ヨリ發ス即チ刺瘡玻璃片若クハ木片ノ手足ニ刺入スル足跡ヲ尖石ニ衝突スル挫碎スル骨傷猛力ヲ以テ脊柱ヲ牽引スル等是レナリ蓋シ中毒性破傷風ハ小兒ニ稀ナリ予曾テ癩癩ヲ患フレ十歳ノ一小兒ニアトロヒテ〇〇一ヲ投セシ後破傷風ヲ發シ三日ヲ經テ消散セシヲアリ又童子ノ癩麻質斯性破傷風ハ間濕冷ノ地ニ厓臥シ及ヒ身体灼熱スル際ニ浴スルヨリ起ルヲアリ又熱帶諸邦ニ於テハ英埜密性及越昆埜密性ニ流行スト雖モ歐洲ニ在テハ唯散在性ニ發ス  
療法 諸家ノ實驗ニ據ルニ尙モ未ダ特效藥ト稱ス可キ者アラス是ヲ以



テ醫士ノ籌策ハ姑息法ヲ施シ豫防法ヲ行フニ過キヌ初生兒ニ於ル初  
 回ノ養生法及ヒ所置殊ニ空氣ト浴湯トニ注意シ且ツ寺院律切割法ヲ  
 注意シテ行ヒ通常ノ外科療法ヲ施シテ其創痕ヲ療スレハ破傷風ノ患  
 者減却ス可キハ疑ヲ入レサル所ナリ疾既ニ發スルニ及テハ醫藥ヲ投  
 スルモ通常効ナシト雖モ尙ホ阿片莫兒非涅、クラーレ、カラバル豆ノ内  
 服及ヒ皮下用法ヲ試用スヘシ頻回少量ノコロラルヒダラート〇〇七  
 乃至〇、一四ヲ與ヒ或ハ稀レニ大量〇、三〇、四乃至〇、七ヲ投スルモ予ハ  
 牀温劇甚ニシテ經過迅速ナル者ニ全ク効ヲ奏セシコナク又牀温攝氏ノ  
 三十七度ニシテ經過寛慢ナル者ハ之ヲ與ヘサルモ自ラ快復ニ趣ケリ予  
 カ見ル所ニ據レハ冷水包裹法ハ間發作ヲ寛解シテ稀疎ナラシムルモ  
 ノナリ然レモ他ノ患兒ニアリテハ其作用正シク相反シ温浴ノ効却テ  
 優ルコアリ蓋シ尤モ治効ナキハ初生兒破傷風ナリ

〔ハ〕點頭痙攣

*Spasma nutans*

點頭痙攣ニ二種アリ甲ハ唯一側ニシテ殊ニ副行神經ノ區域ニ處テ局

ナル痙攣トナリテ發ス之レ稀レナル一症ナリ乙ハ兩側ニシテ兼テ他  
 ノ神經ニ波及スル弛張性痙攣トナリテ起ル是ヲ以テ點頭痙攣ハ一種  
 ノ特立神經病ト名シ可キハ極メテ稀レニシテエベルド氏ノ點頭痙攣  
 病篇ノ所説モ亦然リ

一側點頭痙攣ノ正徵ハ一側ノ胸鎖乳頭筋及僧帽筋往々背方ニ向テ粗  
 ホ劇シク攣縮シ之ニ由リテ頭首ハ甚シク後方ト背方ニ肩胛ハ上方ニ  
 牽掣セラル、者ナリ予曾テ此種ノ者二名ヲ目撃セリ甲ハ肥健ナル九  
 歳ノ一小兒ナリ蓋シ戸隙ノ劇風頂部ニ觸ル、ニ由テ起ル者ナラシ乃  
 チ頸ノ左側甚シク痙攣シ唯暫時ノ間休憩スルノミ冷水法ヲ行ヒ三週  
 ノ後快復セリ乙ハ春意將サニ發動セントスル十一歳ノ一少女ニシテ  
 非常ニ忿怒シ易ク頸ノ右側患ニ罹リ睡眠ノ間痙攣全ク休憩スレモ七  
 情ノ感動ニ由リテ劇甚トナリ鉄及亞鉛ヲ投セシニ六週ノ後消散シテ  
 痕迹ナキニ至レリ

兩側即チ眞ノ點頭痙攣ハ偏重スル部ナク頻回反復スル所ノ左右點頭



筋攣縮ナリ此症ハ多ク見ル所ニシテ關係少ナキアリ或ハ中樞神經系ノ深重ナル器質病ノ兼症ニシテ關係頗ル大ナルアリ但シ第七月ヨリ第二十月ノ間ノ小兒ニ多ク往々眼筋攣縮ト合併ス問々其原因齒牙發生困難及佝僂病ニアリ或ハ腸蟲病及不消化ニアリ蓋シ輕易且ツ一過ノ症ニ於テハ精神終始靈活ナレトモ危篤ナル神經病ノ症候トナリテ起ル者ニ在テハ然ラス乃チ特發スルヲ稀ニシテ多クハ他ノ神經諸患ト相伴ヒ精神黯鈍且ツ缺亡シ他ノ筋部ニ搖擗ヲ發シ瞳孔甚ク散大スル等ノ諸症ヲ起ス曾テ予カ經驗セシ十歳ノ一少女ハ此種ノ一例ニ屬ス此少女ノ點頭攣縮ハ劇甚且ツ頻數ニシテ動モスレハ一日二十回纒カニ一分時間持續スル所ノ發作ヲ起セリ死後剖觀セシニ小腦ノ下面及ヒ華魯里橋ニ一箇ノ腫瘍ヲ發見シタリ蓋シ更ニ經過スレハ精神全ク消滅シ上肢震盪シ時トシテ麻痺及ヒ精神衰弱相加ハル者ナリ

豫後其原因一過ニシテ除却ス可キト危篤ナル器質的ニシテ尅治ス可カラサルトニ從ヒ豫後各相異ナリ蓋シ佝僂病齒牙發生及ヒ腸蟲病ヨ

リ來ル者ハ豫後榮シテ佳ナリ

療法危篤ノ腦患ヨリ起ラサル輕易ノ者ニハ亞鉛花鉄、肝油、コロラルヒダラトト及ヒ臭素加里ヲ用ユ可シ之ニ反シテ中樞神經病ノ一症ナレハ百般治療ヲ行フトモ効績アルコトナシ

〔二〕小舞蹈病 *Chorea minor chorea st. viti, Ballismus, veitstanz*

此疾ノ諸症ニ通シ妥貼ス可キ本性ノ解明ヲ爲サントスルモ要スルニ方今尙ホ一難事ニ屬ス然レモ吾人小舞蹈病ト稱スル者ハ中樞神經系殊ニ脊髓ニ患ル所アルカ爲ニ夫ノ意識ヲ以テ阻隔スル機能多少障礙セラレ或ハ全ク消滅シ之ニ由テ隨意諸筋ノ不隨意共和運動ヲ起シ睡眠ノ間休憩シ且ツ精神依然トシ靈活ナル一種ノ病理的状態ナリ蓋シ往々見ル所ノ一患ニシテ予ハ十年間ニ二百七十五名ヲ經驗セリ

病牀解剖此疾ハ大抵快復ニ趣クカ故ニ其本性及ヒ病的變換ニ於ル解剖所見ハ尙ホ甚ク僅少ニシテ唯一二ノ據證ヲ與フルノミ而シテ此證明モ亦時トシテ非難ヲ免レヌ



曾テ予カ實驗セシ四患兒ハ皆死亡セリ第一名ニ於テハ其原因脊髓ノ  
 結組織増殖ニアリ第二名ニ於テハ脊髓管中ノ血液滲出ニアリ第三名  
 ニ於テハ脊髓管ノ漿液滲出ニアルヲ發見スレトモ第四名ニ於テハ更ニ  
 剖見ノ成績ナカリシウヰスト氏及ヒブリハルド氏ハ脊髓管中ニ漿液様  
 及血様ノ溢出物ゲンドロソ氏ハ脊髓ノ軟化アンメリング氏ハ小腦ノ  
 膜狀發生物ゲナルグット氏ハ腦結核フロリープ氏ハ脊髓ノ齒狀突起延  
 長シテ脊髓ヲ壓迫スルヲ發見セリト云フ又腦中ノエムボリー殊ニ心  
 臟異常ト合併スル者ハ方今諸家ノ證明スル所ナリ  
 症候及經過此疾、一種ノ前兆症、例之、怠倦、大ニ忿怒シ易キ涕泣ノ傾キ、心  
 悸動、舉措ノ失當、行歩ノ蹣跚、顔面ノ歪斜等ニ由リテ誘發セラル、ト少  
 ナカラス間、之ニ反シテ劇甚ナル筋不安ノ狀ヲ以テ忽然起ルヲアリ初  
 メ顔面筋殊ニ口角、腋下及手ニ輕易ノ攣縮ヲ起シ或ハ往々速カニ舌ヲ  
 出納ス疾増進スルニ從ヒ此不隨意的筋運動愈々蔓延シテ劇甚トナリ物  
 休ヲ握リテ固ク保持スルヲ能ハス大洋琴ヲ彈スルニ壓板ヲ過越シテ

音調ヲ探ルヲ能ハス又食匙若クハ肉又チ鼻目ニ輸リ或ハ顔面ニ接シ  
 テ過却シ去リ自ラ食スルヲ能ハス腕ヲ轉動シ且ツ異常ニ顔面ヲ歪斜  
 シ行歩蹣跚且ツ蹉躓シ一脚ヲ他脚ニ衝突シ或ハ劇シク兩脚ヲ轉擲シ  
 手ヲ取リテ之ヲ扶クレハ脚ノ運動快便ナラスシテ半圓ヲ廻旋ス劇度  
 ノ者ニ於テハ行歩起立スル能ハスシテ且ツ伏臥スルモ尙ホ筋不安ノ  
 爲メニ往々困苦シ手足ヲ以テ打擲シ顔面及ヒ他部ノ皮膚ヲ摩擦搔傷  
 シテ往々深キ剝脱ヲ起シ指ヲ鼻中ニ衝入シテ出血ヲ起シ聲中ニ起立  
 スレハ直チニ膝縁ニ跌倒シ左右ニ展轉シテ脚ヲ肚腹ニ牽掣シ又劇シ  
 ク之ヲ抛却シ脊彎曲シ或ハ痙攣狀ニ強直シ加之頻回角弓反張ス蓋シ  
 病患既ニ筋中ニ透徹スト謂ハ、一言ニシテ此筋不安ノ狀ヲ表明スヘ  
 シ此患恙多クハ隨意諸筋中ニ蔓延ス稀レニハ半身ヲ侵スモノアリ但  
 シ左半身ヲ多シトス時トシテ唯一手筋ニ區畫シ或ハ殊ニ呼吸筋ニ限  
 ルヲアリ  
 舌ヲ出スト難ク、若クハ驟ニ之ヲ突出シ嚙下驟ニ止ミ發音障礙セラレ



口吃シ横隔膜ノ攣縮整齊ナラサルハ内部ノ筋肉ニ疾患累及スル徵ト  
 ス心機能モ亦往々不整トナル輕性ノ者ニ於テハ睡眠ノ間筋不安休歇  
 スト雖モ劇性ノ者ニアリテハ夜間尙ホ連綿シテ全ク眠ルコト能ハス或  
 ハ極メテ不安ヲ起ス皮膚ノ知覺機ハ多クハ毫モ變化スルコトナク時ト  
 シテ唯減却スルノミ半身舞蹈病ニ於テ殊ニ然リ精神ハ依然現存シテ  
 靈活ナレハ氣質變換シテ忿怒シ易ク故ナク涕泣シ動モスレハ驚愕シ  
 悲歎喜笑ト手ノ旋轉ト相交換シ秩然順序アル考慮ヲナスコト能ハス思  
 想飛過シテ連貫セサルコト猶ホ筋運動ノ不隨意ナルカ如ク然リ  
 危險ニ陥ル者ハ死亡ノ前二三日筋不安著ルシク寛解シ或ハ全ク消却  
 スレハ之ニ反シ四肢若クハ軀幹ノ破傷風狀強直、蹠跳、輕性搖擗及ヒ困  
 睡ヲ起スコトアリ心臓異常ヲ挾メハ腦肺ノ浮腫、胸水腫、心嚢水腫ノ如キ  
 續症ニ由リテ斃ル蓋シ心部ノ雜音ハ唯貧血ノミニ關スルコト少ナカラ  
 ス此疾ノ經過ハ寛慢ナルヲ通則トス極メテ短キ者ハ十四日極メテ長  
 キ者ハ二年十四週、中度ノ者ハ四週乃至九週ナレハ又畢生連綿スル者

アリ蓋シ例外ニ屬ス予ハ五十歳乃至六十歳ノ男子八歳以來舞蹈病ヲ  
 患ヘシ者二名ヲ經驗セリ

此疾ハ一月若クハ一年間或ハ往々秩然トシテ反復スル間歇時間ノ後  
 二回三四回乃至五回再發スルコト少ナカラス又二三氏ハ此疾癒ユル  
 後精神衰弱連綿スルヲ見シト云フ予ハ百治効ナク經久スル後變シテ  
 癲癩トナリシ者三名ヲ目撃セリ

此疾多クハ熱ヲ帶ヒス然レハ經過迅速且ツ不良ナル者ニ於テハ劇熱  
 相加ハル者ナリ脊柱ヲ沿フ疼痛狀ノ感覺ハ屢見ル所ナレハ必發症ニ  
 非ス又猩紅熱、痘瘡、室扶斯、實布帝里質斯ノ如キ急性病其經過中ニ發ス  
 レハ其間本病休歇シ或ハ全ク之ニ由リテ一掃ス

原因此疾ノ近因ハ諸般ノ解剖學的變化例之貧血、充血、漿液滲出、血液滲  
 出、脊髓及ヒ其膜樣并ニ骨質包裹中ノ新生物及器質變化ニ關シ且ツ之  
 カ爲メニ保續セラル、所ノ脊髓刺衝ナリ而シテ此脊髓刺衝ノ原因ニ三  
 アリ一ハ外傷ニアリ一ハ痲質斯ニアリ一ハ成長及發育機ノ異常ニ



アリ 舞蹈病ト急性痲質斯ト往々合併シ且ツ繼發スト云フハ非議ス  
 ヘカヲト雖モローゲ氏ノ主張セシ如ク必ス盡ク然ラズ是ヲ以テ舞蹈  
 病ハ必ス痲質斯ノ一症ト見做シ難シ抑、兩患相伴フ所以ハ他ナシ痲  
 質斯ノ侵ス所ハ殊ニ漿膜ニアレハナリ(舞蹈病ニ於テハ脊髓ノ膜ヲ  
 侵ス)又一二ノ患者ニ於テエムボリーヲ發見スルコトアリト雖モ必ス之  
 ナ以テ諸患者ヲ辨解ス可ラス又尤モ多キハ一種成長異常及發育障礙  
 ノ發症トナリテ起ル是レナリ即チ齒牙ノ交換、春意ノ發動、迅速ナル身  
 軀ノ成長、肺質ノ虛弱及ヒ全身ノ貧血ハ成長異常及發育障礙ニ屬スル  
 者ナリ又反射性舞蹈病ヲ腸蟲ニ歸スヘキコトアレヒ子ハ會テ此性ノ者  
 ナ實驗セシコトナシ其他記スヘキハ一種ノ素因及ヒ誘因ナリ乃チ六歲  
 ヨリ十四歲ニ至ルノ年齡、三歲チ尤モ幼弱トシ十四歲チ尤モ長スル者  
 トス、女子、子カ實驗セシ二百七十五名中二百十四名ハ少女ニシテ六十  
 一名ハ童子ナリ、遺傳ノ素質、一種風土ノ關係ハ素因ニ屬ス可キ者トス  
 且ツ年間此疾ノ尤モ多キハ第一月及ヒ第二月ナリ

情意ノ感動ハ其誘因トナル者ナリ即チ忽然タル驚愕、恐怖、懸慮、劇甚ノ  
 喜悅等ノ後此疾ヲ發スルコトハ之ヨリ先キ既コ一種脊髓刺衝ノ狀態現  
 存セサル可ラサルヲ以テ畢竟情意ノ感動ハ之ヲ誘起スル激動ニ過キ  
 ス其他一種ノ器械的感應、例之、墜落、衝突、打撃等モ亦之ニ屬ス時トシテ  
 情意ノ感動ト相伴フテ此疾ヲ起スコトアリ

又此疾ハ越毘埜密性ニ起ルアリ、ヘットー氏ハ其原因ヲ探究シテ摸擬ニ  
 歸セリ予ハ一千八百七十年ノ冬纔カニ五週間ニ越毘埜密性舞蹈患者  
 十九名ヲ目撃セリ蓋シ其非常ニ夥シキ所以ハ天氣ノ異常ニ歸セサル  
 ヘカラス而シテ此天氣ノ異常ハ畢竟誘因ニ過キサルコト自ラ明カナリ  
 何トナレハ之ヨリ先キ既ニ此疾ニ罹リシ小兒數名アレハナリ是ヲ以  
 テ摸擬說ハ擯斥セサル可ラス

豫後豫後ハ概シテ佳ナリ唯再發シ易キ患アルノミ然レモ頻回反復ス  
 ル者ハ中樞神經系ニ不治ノ患恙アル徵ナリ童子ハ女子ヨリモ治シ難  
 ク且ツ經久ニ渉ル所以ハ毫モ一定ノ理アルコトナシ



療法 舞蹈病ハ治療ヲ施サ、ルモ多少經過スル後自ラ快復スル者ナリ  
 又或ル藥石ニ由リテ輕易トナリ若クハ疾ニ堪ユルヲ得若クハ眞ニ  
 頓挫セラル、コトハ實驗ニ據リテ明カナル所ナリ多クハ著ルシキ根  
 治療法ヲ行フヲ能ハス然レモ必ス盡ク然ルニ非ス舞蹈病ハ多クハ榮  
 養機、成長機若クハ發育機ノ障礙ト看做スヘキカ故ニ主トシテ鉄劑ヲ  
 投ス可シ或ハ單用シ或ハ規尼涅、亞鉛華ト伍ス但シ其榮養機ノ狀態如  
 何ヲ斟酌ス可シ其他投ス可キハ砒石ナリ就中ホーウレル氏砒石丁幾  
 ハ諸家ノ稱用スル所ニシテ小兒ノ年齢ニ從ヒ一日ニ二滴乃至三滴ヲ  
 與ヒ二日乃至三日ノ後一滴ツ、増加シ次第ニ増進シテ二十四時間ニ  
 七滴乃至八滴ニ至ルヘシ殊ニ夜間ノ大不安ニ於テハホーウレル氏丁  
 幾ニ阿片ヲ伍シ與レハ往々意外ノ効ヲ奏スルアリ臭素加里ハ頗ル諸  
 家ノ稱賛スル所ナレモ予ハ其以上ノ藥劑ニ優ルヲ證スルヲ能ハス硫  
 化アニリチ、コロールホルム、莫兒非涅モ亦毫モ偉効ヲ奏セス予ハコロ  
 ラルヒダラトトナシ十週十二週乃至十六週間持長スルヲ屢々之レアリ

ト雖モ更ニ良効ヲ收メシヲナシ又心臟異常ヲ帶ヒ若クハ之ヲ挾マサ  
 ル僂麻質斯今尙ホ存シ或ハ既ニ治スル者ヨリ起ル時ハ僂麻質斯ニ稱  
 用スル藥劑例之規尼涅、實幾多利斯、阿片ヲ投ス可シ又冷水包裹法、摩擦  
 法、滴浴法ハ往々鎮痛藥ノ効ヲ奏スレモ稀レニハ著ルシク刺衝ノ力ヲ  
 逞フスルヲアリ其理未タ詳カナラス然ルモハ單温浴(或ハ之ニ硫黃ヲ  
 加フ可シ)ヲ行ヒハ頗ル偉効ヲ奏ス又其原因腸蟲ナルヲ判然タル者ニ  
 ハ驅蟲劑ヲ與フヘシ電氣殊ニ平流電氣ハ方今ノ試驗ニ據ルニ其効ヲ  
 ルコト疑ナシト雖モ予ハ曾テ之ヲ實驗セシヲナシ英佛醫ノ稱賛セル  
 舛探法ハ治癒ヲ助クル一法トシテ用ユレハ益アリトス

舞蹈病ヲ患フル小兒殊ニ夜間モ尙ホ筋不安ノ劇シキ者ハ毛褥ヲ地床  
 上ニ置き其上ニ臥セシムレハ尤モ良ク安眠ス患者若シ聲中ニ止マラ  
 ハ枕子ヲ以テ諸側ヨリ支ヘテ創傷ヲ豫防スヘシ七情ノ感動ハ其種何  
 如ニ關セス痛ク禁止スヘシ患兒ヲ嬉伴ヨリ離隔シ宜シク溫柔ニ之ヲ  
 處置スヘシ又學校ニ通學セシム可カラス然レモ新鮮氣中ニ居ラシム



ルハ有益ニシテ稱用ス可キ者トス

〔ホ〕大舞蹈病 Chorea magna.

大舞蹈病ハ概シテ之ヲ論スルニ頗ル稀レニシテ正シク小舞蹈病ト異ナル一患ナリ蓋シ此疾ハ發作狀ニ起ル運動的筋作用障得ト精神機能ノ患恙トヨリ成ル者ナリ精神ハ依然トシテ存スルヲ稀レニシテ一半撲滅シ或ハ全ク消却スルヲ通則トス運動的障得ハ種々ノ假性隨意運動トナリテ顯ハレ此運動ノ起ル往々甚シク猛劇且ツ危險ナルヲアレヒ或ハ安穩ニシテ實ニ驚クヘキ者アリ即チ小兒登攀シ飛動シ匍匐シ忽然幕中ニ起立シ若クハ舞旋シ又他ノ患者ニ於テハ癲癇狀痙攣及カタレプシ一狀筋強直ヲ起ス而シテ精神的症候ハ大亢進ノ徵ヲ呈ハス乃チ面貌讚美ヲ受クルカ如ク眼光爛然人ヲ射歌謠辯論ヲ好ム者アリ或ハ說法ヲナシ若クハ奇異ナル獨語ヲナシ人アリ相對スルカ如キ者アリ或ハ恐怖及憂慮ニ惱マサレテ苦悶ノ狀ヲ呈ハシ若クハ獸類ノ音聲ヲ摸擬スル者アリ或ハ教法感弱若クハ幽靈恐怖ヲ起ス者アリ

此發作多クハ俄カニ起リ稀レニハ精神刺衝亢進ノ前兆ヲ以テ發シ幾カニ二三分時十五分時半時乃至數時間稽留シ發作終レハ患者數回大息ヲ醒覺シ恰カモ夢寐ノ醒ルカ如ク傍人ヲ回視シテ驚キ或ハ多少睡眠ヲ醒覺スル後漠然トシテ更ニ頃刻前ノ發作ヲ記憶セス設令之ヲ記憶スルモ頗フル曖昧ナリ而シテ發作間ハ体温及ヒ脈搏常ニ亢進シ發作止ムニ隨テ再ヒ沈降ス間歇時間ニ於テモ亦甚シキ神經質ノ徵ヲ多少徴知セシムル者ナリ

此疾及ヒ之ニ類スル疾病例之夢中<sup>ソレナムホユリスミユス</sup>行歩動物性マダチト等ノ本性ハ尙未タ詳カナラズ然レモ大舞蹈病ハ其性常ニ一過ニシテ快復スル者ニシテ二三氏ノ說ケルカ如キ真ノ癲癇ニ陥ルヲ稀レナルト此疾ハ殊ニ第十歳乃至第十六歳即チ春意發動期ノ者ヲ侵スト且ツ女子ニ多ク月事初メテ至レハ通常治癒スト云フヲハ今時人ノ取ル所ナリ是レ即チ此疾ハ交感神經系ヨリ起ル所ノ運動兼精神的神經病ニシテ其襲ハル所ノ腦運動中樞若クハ精神中樞ニアルニ從テ上ニ論セシ兩種ノ症



狀ヲ呈ハス者ナラン、云説ノ起ル所以ナリ蓋シ可婚期女子養育ノ違  
錯苛刻ノ譴責神經質ナル母ノ惡習早キニ過クル淫戯群僧ト雜居スル  
等ハ素因及誘因ナリ

曾テ予ガ實驗セシ者ハ齡十三歳ナル虛弱ノ一少女ナリ父母既ニ死ス  
ルヲ以テ伯母尼之ヲ携テ寺ニ入リシカ途ニ此疾ヲ發セリ其發作四分  
ノ一時乃至半時間稍留シ晝間ノ發作往々夜間ト相異ニシテ晝間ノ  
發作ハ夢幻ヲ挾ム教法亂心ナリ乃チ聖經ヲ誦シ說法ヲナシ上帝神聖  
少女及神使ト相話シ次テ必スカクレアシ一狀ノ強直ヲ起セリ寺院ヲ  
去ラシメ六週間、鏡及亞鉛ヲ投セシカ六ヶ月ノ後全ク快復シ直ニ之ニ  
次ニ月事ヲ以テセリ蓋シ此疾ヲ癩病ト誤診セサルカ爲メニ必ス大ニ  
注意シテ辨識ス可シ

療法春意發動ノ困難若クハ障礙ニ關スル者ニハ鐵劑ヲ適切トス或ハ  
單用シ或ハ亞鉛劑ト伍ス可シ其原因證明シ難キ者ニハ亞鉛劑及臭素  
加里コロラルヒダラトトチ次第ニ分量ヲ増進シテ試ム可シ尤モ緊要

ナルハ轉居ナリ凡テ誘因トナル可キ諸件ヲ除キ精神ヲ使役スル事業  
ヲ禁シ身牀ヲ勞動スル職務ヲ命ス可シ

〔下〕電氣舞踏病 Chorea electrica

電氣舞踏病ハ一筋及一筋系ニ於テ電氣ノ如ク劇シク激動シ陸續震顫  
スル一種ノ運動神經病ニシテ其形恰モ瓦兒華尼流通ニ由テ起ルカ如  
ク精神ハ障礙セラレス睡眠ノ間筋痙攣全ク休靜ス而シテ此痙攣ハ殊  
ニ上下肢ヲ侵ス者ニシテ或ル運動ノ爲メニ隨意ニ起ルコトアリ  
即チ予ハ七歳ノ雙生女子共ニ此疾ニ罹ルヲ目撃セリ此小兒椅子ニ凭  
ル毎ニ瞬時ニ上肢劇シキ電氣痙攣ヲ發シ起立スル時初メテ寛解セリ  
蓋シ稀有ノ一症ニ屬ス

虛弱貧血ニシテ神經刺衝過敏ナル少女第二期齒牙發生及春意發動ノ  
時期ニ多クハ此疾ヲ起ス其近因ハ蓋シ神經中樞殊ニ脊髓ノ刺衝ニア  
ルナラン而シテ痙攣ハ直接ニ起リ或ハ反射性ニ來リ其經過ハ四週乃至  
數月ニ涉リ通常治癒ニ趣ク



鑑別必ス一種ノ定規アリ兩半身ニ偏頗ナク起リテ一種特異ナル電氣  
狀筋痙攣ニ由リテ之ヲ辨別ス可ク其症狀ヲ詳カニ探究セサルモ舞踏  
病ト容易ニ誤診ス可キニ非ス

療法ホーレル氏丁幾亞鉛花若クハ臭素加里ヲ次第ニ増量シテ用ユ可  
シ貧血ヲ挾ム者ニハ鉄劑ヲ試ム可シ且ツ適當ナル小兒養生法ヲ緊要  
トス

〔ト〕癲癇 Epilepsie, Fallsucht

癲癇ハ小兒ニ多キ一患ニシテ大人癲癇ノ原因ハ兒齡ノ後半期ニ歸ス  
可キヲ少ナカラスリスチル氏ハブラク府ノ小兒病院ニ於テ十年間平  
均シテ毎歲癲癇患者二百四十名ヲ療セリト云フ即チ七千名ニ癲癇患  
者二十四名ノ比例ナリ

病體解剖病骸解剖ヲ行フモ發見スル所ノ器質變化一様ナラサルヲ以  
テ唯病原ノ相異ナルヲ表示ス可キニ過キス是ヲ以テ先天性癲癇ニ於  
テハ頭蓋細小、腦水腫、腦發育僅少ヲ發見シ後天性癲癇ニ在テハ腦腫瘍

腦膿瘍、腦肥大、腦瘦削、腦軟化、腦硬結、腦脈管エムボリ、及此類ノ脊髓病  
ヲ證明セリ然レモ時トシテ病骸解剖ヲ行フモ毫モ發見スヘキ變化ナ  
キアリ予ハ二歳ノ一小兒ニ於テ内血瘍ヲ目撃セシヲアリ蓋シ稀有ノ  
一原因ニ屬ス之ヲ要スルニ此血瘍ハ分娩ノ際ニ發セシ腦膜内卒中ヨ  
リ起ル者ナラン何トナレハ分娩以來癲癇ノ發作多少間歇シテ反復ス  
レハナリ

症候及經過小兒ノ癲癇ハ各發作頗ル輕ク或ハ緩カニ之ヲ徵知ス可シ  
歲月ヲ經ルニ從ヒ次第ニ増進シテ劇甚トナルナリ之ニ由テ大人ノ癲  
癇ト判然區別ス可キヲ少ナカラス是ヲ以テ其初發ノ症候トシテ往々唯  
輕易ノ頭眩若クハ緩カニ二三時稽留スル顔面ノ歪斜又忽然タル顔面  
青白ヲ見ルヲアリ又小兒室内ヲ歩セントシテ忽然昏倒シ復速カニ凭  
ル所ヲ覓ルアリ又予ハ他兒ニ初發症トシテ誘因ナク一二指ニ痙攣起  
リ一分時乃至二分時ノ後再ヒ消散スルヲ目撃セシヲアリ  
此ノ如キ輕易ナル初起症ハ大抵前兆ナク起ルト雖モ或ハ又不快、悲愁



沈黙、催眠、怒、頭痛、及アッラエヒレブチカノ如キ前兆劇甚且ツ全然タル  
 發作ニ先ツツアリ殊ニ可婚期ニ近キ小兒ニ見ル所ナリ而シテ全然  
 タル癲癇發作ハ俄然タル精神ノ消却、往々調節ナキ號泣ヲ以テ起ル全  
 身ノ顛倒及ヒ之ニ次テ起ル弛張性并ニ緊張性ノ筋痙攣ヲ以テ起リ泡  
 沫若クハ血色ノ粘液ヲ噴出シ大小便失禁シ痙攣多少稽留スル後數回  
 深吸氣ヲナシテ醒蘇シ恰モ夢寐ノ覺ムルカ如ク滿座ヲ回視ス試ミニ  
 患狀ヲ問フモ毫モ記スルコトナキ者アリ或ハ直ニ發作ニ次テ多少睡  
 眠スル者アリ

發作ノ輕重多寡ハ特リ各患者ニ於テ異ナルノミナラス一患者ニ在テ  
 モ亦往々著ルシ殊ナルコトアリ其理未ク詳カナラス發作多クハ夜間  
 ニ起ルヲ以テ往々識認セラレス子カ曾テ經驗セシ一二ノ小兒ハ二十  
 四時間ニ四十回發作シ他兒ハ三月乃至六月中ニ一發シ或ハ一年間休  
 歇スル後纔カ一發セリ  
 殊ニ頭部ノ創傷、舌ノ咬傷、其他身軀諸部ノ打撲、往々發作ノ爲メニ起

ル偶事ナリ

此疾ノ經過ハ極メテ慢性ニシテ多クハ畢生連綿ス一二ノ者ニ於テハ  
 精神機能善ク發生シ加之其著ルシキ動作ヲ認ム可キアリ或ハ直ニ  
 精神機能ノ障碍加之痴呆及癲狂相加ハル者アリ

原因以上論セシ如ク此疾ノ近因ハ皆相異ニシテ多クハ分明ナラス然  
 レモ多クハ病軀解剖ヲ行フテ證明ス可キ中樞神經系若クハ末梢神經  
 系ノ患恙ヨリ起リ而シテ所謂小兒ノ特發癲癇次第ニ減却ス可キハ略  
 ホ推察シ得ル所ナリ蓋シ所髓血管ノ擴張、シロイデルフンテルコルシ  
 氏急性及ヒ痙攣性腦貧血、クスマウル氏及テンチル氏ハ癲癇發作ヲ起  
 ス者ナラン乃チ疾迅ニ發起スル急性腦貧血ハ其腦患ヨリ發シ反射ヨ  
 リ來ルニ拘ハラヌ一ハ以テ精神ヲ歇止シ一ハ以テ華魯里橋中ニ位  
 ル痙攣ノ中樞ヲ刺戟シテ癲癇發作ヲ起ス者ナリト云フ然レモ甲患者  
 ニ於テハ發作輕易ニシテ稀疎、乙患者ニアリテハ劇甚ニシテ頻數ナル  
 ハ抑、孰レノ狀態ニ關スルカ其理未ク詳カナラス反射性癲癇例之癥痕



〔殊〕ニ頭皮ニ於ル者、異物刺入存癒、生殖器ノ疾病、腸蟲等ヨリ起ルノ小兒ニ稀ナルハ明カニシテ予カ實驗ニ據ルニ往々原因ト看做ス所ノ腸蟲モ亦然リ何トナレハ予カ曾テ實驗セシ無數ノ患者ノ中腸蟲ヨリ來ル者一名モナケレハナリ之ニ反シテ遺傳ノ素質ヨリ起ルハ非議スヘカラス此疾父母ヨリ小兒ニ傳ヒ或ハ子ニ傳ヒスシテ孫ニ傳フルコトアリ

療法務メテ其原因ヲ探究シ全ク之ヲ除キ得ヘキ時ハ之ヲ除クノ策ヲ行フ可シ乃チ腸蟲若クハ春愈發動ノ困難ヨリ起ル者ハ驅蟲劑若クハ鉄劑ヲ投シ腺病若クハ結核病ノ症候ヲ挾ム所ノ腦腫瘍ト疑察ス可キ者ハ肝油、鐵劑、沃土劑、沃土鐵ヲ與ヒ其原因探究シ難キ者ハ古昔ヨリ試用シタル奏効疑ハシキ諸般ノ實驗藥例之、亞鉛、鹽、硝酸、銀、銅、礬、アトロヒチヲ投スヘシ予ハ屢、アトロヒチヲ持長シタレハ更ニ効ヲ收メシナカリシ蓋シ小兒ニ於テハ危險ナル一藥ナリ宜ク少量ヨリ始ムヘシ予ハ十歳ノ一童子ニ鐵カニ〇、〇〇〇、五ヲ投セシニ破傷風ヲ

起セシコトアリ又臭素加里ハ近今諸家稱用スル所ナレハ其効積取テ他ノ諸藥ニ優ルニ非ラス予ハ此藥ヲ與ヒテ發作ヲ減却シテ輕易ナラシメシ一二三回アリ大量ヲ投シテ其極度ノ量ニ達セシ時殊ニ然リ然レハ臭素加里ニ永久ナル治効ヲ謝セシナシ又予ハ未ダベチシト氏ノ稱賛セル「クラール」ヲ實驗セシナシト雖モ恐クハ之ヲ用ユルモ予カ期スル所ト齟齬スルナラン凡テ新藥ヲ與フレハ一時抑制ノ効ヲ奏スト云フ實驗ハ諸氏ノ唱フル所ニシテ予モ亦之ヲ確定セリ此ノ如キ疾ヲ療スルニ屢、藥石ヲ更換シテ緊要ナルハ蓋シ之カ爲メナリ又予ハコロラルヒダラートノ作用ヲ決定スルノ如シ曰クコロラルヒダラートハ決シテ癲癩ヲ治スヘキ醫藥ニアラス唯其發作ノ度數ト劇甚トチ抑制スヘキ効アルノミ是ヲ以テコロラルヒダラートハ殊ニ發作ノ頻數且ツ劇甚ナル者ニ姑息藥トシテ與フレハ常ニ非類ノ効ヲ奏ス

〔ナ〕運動性麻痺 Akinesen. Motorische Paralyse, Lahmungen.



凡ソ小兒ノ麻痺ハ大人ニ於ケルカ如ク二大原因ニ歸スヘシ即チ一ハ  
腦脊髓ナル中樞神經系ノ障礙ヨリ起リ一ハ運動神經ノ中樞ヨリ末梢  
ニ至ル傳達力ノ患恙及ヒ妨碍ヨリ發ス蓋シ小兒ノ麻痺病ハ尙ホ未ダ  
症候ニ從テ判然之ヲ區別スルコト能ハス是ヲ以テ予ハ之ヲ病床實驗ニ  
從ヒ左ノ種屬ニ分チ以テ通覽ニ便ナラシム

〔一〕眞ノ小兒麻痺(即チ脊髓性麻痺) *Essentiallähmung, Spinal*

*Lähmung.*

此殆ント小兒ニ固有ニ屢見ル所ノ麻痺ハ即チ一上肢若クハ一下肢  
(稀レコト)兩上肢若クハ兩下肢ノ一筋若クハ數筋ノ運動力一半消却シ或  
ハ全然撲滅スル者ナリ其知覺機及電氣的收縮機ハ變換セス或ハ一筋  
乃至一筋系ニ於テ衰弱シ若クハ全ク撲滅ス蓋シ此種ノ麻痺ハ時トシ  
テ前兆ナク忽然トシテ起ルコトアリ乃チ毫モ他ノ患恙ナキニ夜間驟カニ  
發ス然レド多クハ二三日或ハ二三週前既ニ輕易ノ發熱一種ノ不快殊  
ニ夜間ノ不安不眠及ヒ嗜眠ヲ起ス者ナリ但シ麻痺ヲ起ス後此諸症再

ヒ消散スルヲ常トス又腦症ヲ起スモ通常速カニ消散ス而シテ運動ノ  
障礙ニ二般アリ曰ク**不全麻痺**曰ク**十全麻痺**是レナリ乃チ一  
手患ニ罹レハ弛緩シテ下墜シ舉上スルコト能ハス或ハ健全ナル他手  
ノ助ヲ假リテ漸ク之レヲ舉上ス又時トシテ見ルカ如ク唯上膊筋麻痺  
スル時ハ能ク物ヲ握レトモ高ク之レヲ捧クルコト能ハス又タ一下  
肢麻痺スルトキハ試ミニ小兒ヲ掲ケ起セハ直チニ之レヲ徵知スヘシ  
又通常其父母タル者ハ其小兒洗湯中若クハ襪襪卓子上ニ於テ一脚ヲ  
肚腹ニ牽掣シ他ノ一脚ヲ運動セスノ放却スルニ由リ其麻痺ナルヲ認  
ムル者ナリ二三氏(リルリトト氏、バルテツ氏、ケチウー氏、ウエスト氏)ノ說  
ニ據レハ此種ノ麻痺ハ極メテ稀レニ二日乃至八日以内ニ再ヒ消却ス  
ルコトアレド通常依然トシテ連綿シ筋瘦削筋脂肪變質筋變縮輕度若ク  
ハ劇度ノ麻痺性内彎足扁平足及ヒ鈎足ヲ起ス然レド其他全ク恙ナク  
身軀次第ニ發育シ睡眠安穩食氣善良精神發生シテ活潑ナルモノナリ  
蓋シ此疾ノ近因ハ唯二三ノ患者ハイチ氏及ホーグト氏ノ說ヲ剖驗シ



テ證明セシ處ナレハ脊髓ノ器質變化ニ歸ス可キヲ疑フ容レサル所ナ  
 リ予カ見ル所ニ據レハ種々ノ脊髓器質變化例之結組織新生物血液溢  
 出炎症ハ此麻痺ヲ起シ且ツ之ヲシテ連綿ヲラシムル原因ナリ是レ多  
 シハ頑固不治ナルヲ以テ其然ルヲ證ス可シ殊ニ此疾ニ罹ルハ三歳マ  
 テノ小兒ナリ予カ實驗ニ據レハ男子ヨリモ女子ニ多シト雖モ蓋シ偶  
 然ニ出ルモノナラン何トナレハホーグト氏ノ比例ハ正シク反對スレ  
 ハナリ蓋シ齒牙發生機ハ此疾ノ原因トナシ難シ予ハ之ニ反シテ多ク  
 ハ劇性尙僕病ノ徵ヲ目撃セリ

〔二〕實布帝里亞性麻痺 Diphtherische Lähmung

此種ノ麻痺ハ既ニ實布帝里亞ノ經過中ニ發スルヲアレモ多クハ分利  
 後二三日或ハ週日ヲ經テ起ル者ナリ乃チ多クハ嚥下困難不明ノ鼻音  
 チ挾ム所ノ軟口蓋麻痺聲門帶麻痺調節視機障礙複視四肢上肢ヨリ下  
 肢チ多シトス膀胱及直腸ノ麻痺トナリテ顯ハル或ハ又胸筋ヲ侵シテ  
 輕性若クハ劇度ノ呼吸不利ヲ起スヲアレモ例外ニ屬ス蓋シ此種ノ麻

痺ハ輕重二性ノ實布帝里亞ニ發ス予曾テ患恙輕易ナルヲ以テ全ク看  
 過シ去リシ咽喉實布帝里亞ノ後麻痺直チニ發シ初メテ其實布帝里亞  
 ナルヲ徵セシヲアリ蓋シ此種ノ麻痺ハ或ル流行時ニ於テハ頻數ナレ  
 他ノ流行時ニアリテハ僅少ナルヲアリ乳兒及大兒共ニ之ニ罹リ嚥  
 下及ヒ呼吸ノ妨害ノ爲メニ危險ニ陥ルヲアリ概シテ之ヲ論スレハ實  
 布帝里亞性麻痺殊ニ實布帝里亞分利後ニ起ル者ハ豫後佳ナリ予カ見  
 シ者ハ皆數週若クハ數月ノ後全治セリ

實布帝里亞性麻痺ノ本性ハ尙ホ未ク詳カナラス蓋シ實布帝里亞ヲ血  
 液病ト看做スト然ラサルトニ由リテ其辨解モ亦相異ナリ予ハ血質并  
 換説ヲ以テ其本性ヲ説カントス

〔三〕外傷性麻痺 Lähmungen traumatische Ursprung

諸般ノ外傷例之牽掣衝突壓迫鞭撻挫傷等ハ小兒ニ於テ不十全麻痺并  
 ニ十全麻痺ヲ起ス蓋シ鉗子若クハ骨盤狹窄ノ爲メニ初生兒ニ起ル顔  
 面神經及膊神經叢ノ麻痺ハ主トシ之ニ屬スル者ナリ予曾テ六歳ノ一



少女劇シク左腕ヲ衝突スル後此種ノ麻痺四週間、連綿スルヲ目撃セシ  
 コアリボーゲット氏モ亦曾テ七歳ノ一少女跌倒スル後一腕ノ麻痺三月  
 間連綿スルヲ目撃セリト云フ又小兒ヲ舉上シ後掣シ若クハ其左上肢  
 及ヒ右上肢ヲ強ク牽掣スル後起リテ痛苦ニ耐エサル麻痺モ亦此種ニ  
 算入ス可キ者ニシテ(サッサイナック氏及ボージェット氏)屢見ル所ノ一症ナリ此  
 レ蓋シ劇シク神經ヲ牽引スルカ爲メニ運動障害ヲ起ス者ヨリ外ナラ  
 ス通常轉振及挫傷ト看做シテ治療ヲ施セハ日ナラスシテ治癒ス又外  
 傷性麻痺ハ豫後大低佳ナル者ニシテ往々數日ノ後遲クトモ數週ヲ經  
 レハ治癒ス

〔四〕 癩麻質斯性麻痺 Rheumatische Lähmungen

此種ノ麻痺ハ小兒ニ稀レナリ其發スル方法ハ大人ト異ナラス  
 身體温熱スルノ際戸隙ノ劇風ニ觸レ冷石上ニ踞シ驟カニ冷却スル等  
 ハ時トシテ此種ノ麻痺ヲ起スヘンノック氏及ロンベルグ氏ハ二歳乃至  
 八歳ノ小兒ニ癩麻質斯性顔面麻痺ヲ目撃セリト云フ予ハ曾テ三歳ノ

男兒癩麻質斯性左顔面神經麻痺ヲ起シ三週ノ後快復セシヲ實驗セシ  
 コトアリ

〔五〕 中樞神經系ノ器質變化及骨病ヨリ起ル麻痺 Lähmungen

aus materiellen Veränderungen im Centralnervensystem und aus Knochenkrankungen.

是レ既ニ腦脊髓病ノ條下ニ論セシ所ナリ此篇ニ於テハ唯小兒ノ半身  
 麻痺ハ屢、腦ノ腫瘍殊ニ結核性腫瘍ヨリ起ルコト卒中及腦炎ハ麻痺ヲ  
 起スコト大人ヨリモ頗ル稀レナルコト卒中及腦炎ハ多シハ半身麻痺ヲ  
 發シ下半身麻痺ヲ起スハ稀レナルコトヲ論スレハ足レリトス予カ曾  
 テ實驗セシ半身麻痺ノ患者二名ハ之ヨリ先キ別ニ患恙ナカリシニ忽  
 然人事不省シテ麻痺ヲ發シタリ死後剖觀セシニ甲ニ於テハ新發卒中  
 竈乙ニ於テハ腦炎及ヒ腦瘦削ヲ發見セリ又一小兒アリ齡三歳下半身  
 麻痺ヲ發シ八月ヲ經テ全ク快復セリ又一男兒アリ齡四歳心臟瓣膜缺  
 損ヲ挾ニ忽然左半身麻痺ヲ起シ言語スルコト能ハサリシカ八週ヲ經テ  
 全ク快復セリ其他總テ腦水腫、軟腦膜炎、腦瘦削、腦硬結、腦膜内卒中、及脊



髓病ト相伴ヒ殊ニ其兼症トナル所ノ麻痺ハ此種類ニ屬スリュースチル氏ノ記セシ脊髓ノ肉腫狀新生物ニ由リテ發スル麻痺ハ稀有ノ一症ナリ又岩狀骨ノ腐潰ヨリ起ル所ノ顔面神經麻痺及ヒ脊柱腐潰ノ經過中ニ發スル麻痺ハ屢見ル所ノ一症ニシテ甲ハ腺病質若クハ結核質ノ小兒ニ於テ往々中耳及内耳ノ慢性炎ヨリ起ル或ハ又急性發疹病殊ニ猩紅熱ノ後患トシテ發スルコトアリ

岩狀骨ノ腐潰ヨリ起ル顔面神經麻痺ハ多クハ治セス予ハ未ダ輕快シ若クハ快復ニ趣キシ者ヲ目撃セシコトナシ蓋シハルロビ一管及大淺在岩狀神經ノ此方若クハ彼側ノ顔面神經荒蕪セラル、ニ從テ或ハ懸壅垂毫モ斜傾ノ位置ヲ呈ハサ、ルズリ或ハ麻痺シテ其尖端麻痺スル顔面ノ方側ニ牽掣セラル、アリ又脊柱ノ腐潰ヨリ起ル麻痺ハ腐潰スル位地異ナルニ從テ或ハ上下兩肢ニ發シ或ハ下肢ニ起ル多クハ膀胱及ヒ直腸ノ麻痺ヲ兼ヌ蓋シ此種ノ麻痺モ亦往々全治セサレヒ輕快シ難キコト非ス

〔六〕偽性筋肥大性麻痺 Paralysis myo-sclerotica oder die pseudohypertrophische Muskellähmung

此疾ハ近頃シュヘンチ氏初メテ詳記セシ者ニシテ稀有ノ一症ナリ下條ノ論ハ殊ニ同氏ノ報告一千八百六十八年小兒病日誌第五號及第六號ヨリ集録ス即チ此疾ノ主徴ハ左ノ如シ曰ク脚及腰部ノ運動軟弱ニシテ此軟弱次第ニ腕ニ累及シ終リニ更ニ蔓延ノ諸運動全ク撲滅スルニ至ル曰ク麻痺部ノ一二筋或ハ稀レニ殆ント諸筋ノ容積増盛ス曰ク麻痺スル筋ノ實質間結組織夥シク發育シ時期進ムニ至リ兼テ纖維組織若クハ脂肪球夥シク發生スル是レナリ

此疾ハ既ニ初生兒ニ起リ或ハ小兒ノ第一期ニ起リ或ハ第六歲第七歲乃至第十歲ニ起ル者ナリ其主症ハ左ノ如シ即チ脚ノ軟弱嬰孩ノ時ヨリ存シ若クハ後來ニ至リ初メテ起レヒ脚ノ筋肉頗ル發生ス次テ軟弱トナル筋肉ノ容積非常ニ増大シ行歩及ヒ起立スレハ腰部甚シク彎屈シテ軟狀ヲナシ且ツ起立スレハ軀幹側方ニ動搖シ更ニ一年ヲ經加之



在萬久シク經過シ次テ麻痺上肢ニ累及シ諸運動撲滅シ終リニ肺勞ヲ  
 起シ脱亡シテ斃ル、者ナリ時トシテ此諸症ニ兼テ輕重ノ腦機能障礙、  
 困重且ツ寛慢ナル言語、一種ノ才智遲鈍加之十全痲呆ヲ見ルコアリシ  
 ヘンチ氏ハ全經過ヲ三期ニ分テリ即チ第一期ハ軟弱第二期ハ假性筋  
 肥大第三期ハ假性筋肥大麻痺ニ由リテ徵知スヘキ者トス  
 此疾ノ本性ハ尙ホ未タ詳カラスシニヘンチ氏曰ク假性筋肥大ノ病理  
 ハ尙ホ未タ分明ナラス病體解剖ヲ行フテ検査シト雖モ腦脊髓ノ變  
 化ヲ發見スルコトナシ故ニ次第二増進スル運動ノ衰弱ヲ腦脊髓ノ變化  
 ニ歸シ難シ又此衰弱ヲ實質間結組織ノ増殖過度ヨリ起ル筋纖維ノ壓  
 迫ニモ歸シ難ク溶解ニモ歸スルコト能ハス何トナレハ此軟弱ハ既ニ此  
 増殖ニ先テ現存シ且ツ過度ニ増殖スル結組織ノ分量ト直接ノ關係ヲ  
 ナサ、ルナリト然レモ實質間結組織中ニアリテ其増殖ヲ過度ナラシ  
 ムル如ク病的ニ亢進スル一種ノ成形機ハ此軟弱ノ原因中比類ナキ者  
 ナラン抑此病的ニ亢進スル一種ノ成形機ハ何モノナルカニ至テハ更

ニ明析ヲ要スル一問題ト謂フ可シ此麻痺ハ小兒ノ一患ニシテ從來ノ  
 實驗ニ據ルニ女兒ヨリモ男兒ニ多シ或ハ一血族ノ數兒皆此疾ニ罹ル  
 アリ恐クハ遺傳ニ由ルナラン

豫後ハ佳ナラスシニヘンチ氏ノ說ニ據ルニ此疾、肥大ノ時期ニ達スレハ  
 必ス斃レシト云フ蓋シ第一期ニ於テハ尙ホ治癒ヲ期スヘキモノナラ  
 シ

療法脊髓性小兒麻痺殊ニ未タ經久ナラサル者ニハ香竈酒精例之龍腦  
 精、石鹼精及ハイチ氏ノ稱用スル番木鱈丁幾擦入法ヲ試ム可シ又番木  
 鱈丁幾ヲ一日數滴ツ、内服セシムレハ効アリ然レモ予ハ効績ヲ收メ  
 シコトナシ若シ毫モ腦刺衝ノ症候ヲ帶ヒサレハ猶豫セス直チニ感傳電  
 氣或ハ平流電氣ヲ施ス可シ但シ初生ノ第一歳ニ於テハ注意セサル可  
 カラス殊ニ初頭ニ於テ一頓ニ長ク施スコ勿レ(二分時乃至五分時)又毎  
 日之ヲ行フヲ要セス予ハ電氣ニ兼テ其間日ニ於テフランツェン鐵泉ノ  
 鐵泥鹽(フランツェン鐵泉泥土ノ鐵鹽中ニ含ム者ナリ)ヲ以テ浴湯ヲ行フ



クリ即チ局處浴ニハ此鹽半磅、全身浴ニハ一磅ヲ以テ足レリトス但シ此浴法ハ聊カ刺衝シ且ツ睡眠ヲ妨クル者ナレハ早朝浴セシムルヲ尤モ佳トス或ハ又力ニ從ヒ麻痺スル四肢ニ舐探法ヲ行フテ之ヲ搜攪スレハ能ク筋瘦削及脂化ヲ抑止スルヲ以テ稱用スヘシ畸形及連綿タル麻痺ニ於テハ適當ノ裝置ヲ施ス可シ又尙僂病ヲ挾ミ或ハ貧血ノ徵ヲ呈ハサハ以上ノ外用藥ニ兼テ肝油、鎂及沃土鎂等ヲ用ユ可シ

實弗帝里亞性麻痺(上ニ論セシ如ク大抵治スル者ナリ)ニ於テハ佳良ナル補復食料、新鮮氣中ノ居住ニ兼テ就中須要ナルハ規尼涅及鐵劑ナリ更ニ治療ヲ施サ、ルモ自然ニ全治スル者少ナカラス外傷性麻痺モ亦有力ノ治療ヲ要セス單ニ酒精ヲ擦入シ吸収膏ヲ塗擦シ頻回微温浴ヲ行ヘハ通常治癒ス予曾テテプリッツ温泉ヲ服セシムル後速ニ快復セシ者ヲ目撃セリ 僂麻質性麻痺ハ電氣ヲ施セハ大抵治スル者ナリ 腦出血ヨリ起ル麻痺ニハ殊ニ初頭ニ於テ頗ル單純ノ療法ヲ行ヒ腦症盡ク散スルニ至リ初メテ感傳電氣ヲ注意シテ施ス可シ 危篤ナル腦患ヨリ

來ル麻痺ハ百方治療ヲ施スモ効績ヲ收メ難シ 假性筋肥大麻痺ニ於テシユヘンチ氏ハ氷治療法及定式搜攪法ニ兼テ筋ニ直接感傳電氣ヲ施シ疾未ク第一期ヲ超エサル間ハ治癒シ得ヘシト云フ第二期ニ於テハ療法毫モ効ヲ奏セス私的里規尼、麥奴、沃土加里等ノ有力藥モ亦寸効ナシ 膀胱及直腸ノ麻痺ニ於テハ測胞子及灌腸法ニ由リ時期ヲ誤ラスノ通利ヲ促スベシ

[リ]眞之攣縮 Arthrogryposis, Contractura arthrum, essentielle  
Contracturen

所謂眞ノ攣縮ハ緊張性ノ苦楚ナル關節攣縮ノ一種ニシテ稀有ノ一患ナリ即チ手指關節、足趾關節、并ニ腕關節、手關節、及足關節ノ病的屈曲稀ニハ展伸トナリテ呈ハレ腕前關節ニ於テハ指甚シク屈曲シ内方ニ傾キ拇指上ヲ被ヒ其形恰モ半拳ノ如ク且ツ手モ亦多クハ屈曲シテ殆ト前膊ト直角ヲナシ足ハ通常彎曲足ノ形狀ヲナシ足趾ハ疼痛狀ニ展伸



シ或ハ屈曲ス稀レニハ臂關節及膝關節モ亦病的ニ屈曲ス痙攣ハ下肢ヨリモ多クハ上肢ニ起リ往々均シク上下肢ニ發シ其起ル忽然ナルアリ或ハ不快涕泣驚怖ノ安穩ナラサル睡眠嘔吐苦楚ナル號泣ノ如キ他ノ全身患恙前驅シテ發シ若クハ之ト相伴フアリ其經過ハ一二時一二日乃至一二週ノ差違アリ且ツ定期ノ寛解若クハ充分ナル數週間ノ間歇ヲ起スアリ或ハ喉頭口痙攣搖擗ノ如キ他ノ痙攣ト交換スルアリ蓋シ此緊張性關節痙攣ニ二性アリ曰ク反射性即チ純粹ノ運動神經病チナス曰ク症候性即チ漸々發スル危篤ノ腦患ニ關ス甲性ノ原因ハ尙未ク詳カナラス蓋シ齒牙發生及胃寒ニアルナランヘンノク氏ハ腎石ヨリ起ルチ目撃セシト云フ予ハ佝僂病ヲ患フル小兒ニ於テ往々甲性ノ者ヲ目撃セリ蓋シ佝僂病ハ一箇ノ誘因ト見做スモ可ナリ又此疾ニ罹ル小兒ハ通常他患殊ニ腸加答兒ヲ患フル虛弱家ナレハ予ハ肥健ノ小兒ニ於テモ亦此痙攣ヲ目撃セリ第一歳ヨリ第三歳ノ間此疾ニ罹ルト尤モ多ケレハ又後來ニ至テ發スルトアリ蓋シ反射性關節痙攣ハ

通常良性ニシテ早晚全ク快復ス然レハ危篤ナル腦患ヨリ起ル症候性ノ者ハ然ラス予ハ曾テ其内腦水腫ヨリ起ルチ證明セシト數回ニ及ヘリ其一例ヲ舉クレハ下ノ如シ曾テ一少女アリ齡九ヶ月佝僂病ヲ患フ數月以來手足痙攣ヲ起シ四日乃至十四日間稽留シ四週乃至五週間歇シテ再ヒ反復セリ痙攣ノ起リシ間ハ夜間一種ノ不安ヲ起シ体温少シク亢進シ食氣缺乏スルノ外別ニ患恙ナカリシニ忽然大痙攣ヲ起スト二回終リニ麻痺ヲ發シ二日ヲ經テ既ニ死亡ニ趣ケリ病牀解剖ヲ行フテ之ヲ檢査セシニ腦室水腫ヲ發見シタリシ

療法反射性關節痙攣ニ於テハ詳カニ全身ノ情態ニ注目シ兼テ亞鉛劑阿片ヲ投シ時日ヲ期シテ起ル者ニハ規尼涅ヲ與ヘ嚼囉防ヲ外用シ綿ヲ以テ患脚ヲ包裹スヘシ又症候性ノ者ニ於テハ腦患ヲ疑察シ或ハ判然鑑別スル時慣用スル藥石ヲ試ム可シ通常効績ヲ收ムルトナシ

〔又〕神經性顔面瘦削 Neurotische Gesichtsatrophie

此疾ハ甚ク稀ナルチ以テ之ヲ知ル者少ナシ其徵ハ半面多少瘦削シ他



ノ半面ハ發育全ク平常ノ如ク鮮紅健全ノ狀ヲ呈ハス疾ニ罹ル半面ノ皮膚薄クシテ緊張シ脂肪消滅シ筋薄ク骨軟小ニシテ眼小ナルカ如ク眼窩中ニ深陷シ半舌狹ク頭髮少ク或ハ灰白トナル知覺力及運動力ハ通常依然トシテ障礙セラレズ此疾ハ偏頗ナク全半面ニ蔓延シ或ハ數處ニ斑點狀ノ深陷ヲ起シテ次第ニ蔓延シ終リニ全半面ヲ侵ス而シテ此瘦削ハ三叉神經ノ全區域ニ起リ稀レニハ其一枝ヲ侵スゲルハルド氏ノ經驗セシ十患者ノ中八名ハ女子二名ハ男子ニシテ其八名ハ從一歲至五歲ノ小兒ナリシト云フ此疾ノ本性ハ未ダ詳カナラス蓋シ半面ノ湯火傷(ヘリソング氏)卒中狀發作(バッサエ氏)頸腺ノ腺病化膿性咽頭實弗帝里亞百日咳ハ一半ハ證明ス可ク一半ハ疑察ス可キ原因ナリ凡テ從來用ユル醫藥ハ効績ヲ收ムルコトナシ

### 第三套

#### 呼吸器疾病之論

Frankheit der Athmungsorgane

#### 初生兒之假死

Asphyxia neonatorum Scheintod der Neugeborenen

初生兒ノ假死トハ全然分娩スルノ後其心跳及ヒ脈搏ハ著ルシク存スレル其呼吸運動ハ全ク缺ケ或ハ頗ル微弱コシテ長ク休歇セル狀態ヲ謂フナリ此ノ時兒體能ク榮養セラレ大ニ發育シテ圓實シ顔面膨腫シテ青赤色ヲ帯ヒ臍帶大ニシテ膨滿シ(キリアソ氏及ヒスカンソコ一氏ハ之ヲ鉛色假死即チ充血性假死ト名ク)口吻ニ泡沫狀ノ粘液ヲ含ミ舌ハ口蓋ニ膠粘或ハ接着シ若クハ顎間ニ箝頓スルアリ或ハ又兒休ノ榮養良シカラス皮膚萎凋シテ灰白色ヲ帯ヒ四肢軟弱ニシテ墮垂シ心跳非常ニ微弱ナルアリ(灰白色假死即チ古人ノ所謂貧血性假死是レナリ)然リト雖モ必ス皆判然トシテ此二種類ニ區別スルコト能ハス小兒臥シテ運動セス呼吸聴取シ難ク或ハ唯頗ル僅カニ呼吸シ通常躰外ノ刺衝ニ感格セス此狀態ハ適當ノ醫治ヲ施サ、ルカ若クハ醫治ヲ施スモ効績ナクシテ一二時間連綿スレハ微弱ナル呼吸運動全ク歇絶シ心跳次第ニ撲滅シ遂ニ死亡ニ陥ル者ナリ凡テ假死ノ近因ハ血中ニ炭酸鬱積シ之ニ由リテ呼吸ノ中樞即チ延髓



ノ刺衝機次第ニ消滅シ頗ル秩然タル呼吸運動ヲ營ムト能ハサルニ至ルニアリ乃チ假死ニ見ル所ノ諸症ハ此呼吸運動ノ缺乏ニ由リテ容易ク辨解ス可シ蓋シ此狀態ハ絕息ナル名稱ヲ附スレハ却テ妥當ナルカ如シ凡ソ酸化セル血液ノ兒脉ニ流通スルヲ妨ケ若クハ其流通ヲ歇絶スル障礙ハ皆假死ヲ起ス例之早キニ過クル胎盤ノ離脱臍帶ノ壓迫總絡及ヒ潰裂長ク頭蓋ヲ壓迫シ若クハ難産ノ經過中ニ血液夥シク頭蓋中ニ漏出スルカ如キ是レナリ

療法凡ソ此疾ノ療法中無二喫緊ノ條件ハ務メテ速ニ呼吸運動ヲ奮起スルニアリ即チ之ヲ奮起セントスルニハ小兒ノ分娩スルヤ否ヤ直チニ其臍帶ヲ結紮シテ之ヲ切斷シ口内及ヒ鼻孔ノ粘液ヲ拂拭シ去リ且ツ手掌ヲ以テ一二回兒背ヲ打拍シ若クハ兒肩ヲ握リ其背ヲ前上ニ向ケテ揮霍廻振シ(シユルチ)氏ノ法若クハ刺戟性藥液ヲ胸部ニ塗擦シテ吸氣筋ノ反射運動ヲ奮起ス可シ此法ヲ行フモ呼吸運動ヲ起スヲ能ハサル時ハ猶豫セス感傳電氣ヲ施シ直チニ頸部ノ橫隔膜神經ヲ刺戟シテ

橫隔膜ノ攣縮ヲ起シ或ハ氣管中ニ測胞子ヲ插入シテ空氣ヲ吹入シ以テ假死ヲ救フノ策ヲ試ム可シ許多ノ患兒殊ニ輕性ノ者ニハ電氣ヲ施シ空氣吹入法ヲ行フテ救急ノ効アリト雖モ劇性ノ者ニ偉効ヲ奏スルハ實ニ例外ニ屬ス

〔甲〕鼻腔之疾病

○(一)鼻腔加答兒 Coriza

鼻粘膜加答兒ニ急慢二性ノ別アリ或ハ原發症トナリテ發シ或ハ他病ノ一症トナリテ起ル蓋シ鼻粘膜腫起シテ甚ク赤色ヲ帶ヒ初メニハ澄明ニシテ水様終リニハ硝子樣粘液狀ニシテ混濁ナル分泌物ノ增多スルハ此疾ノ解剖學上本性ナリ鼻孔及ヒ上唇ノ直チニ赤色ヲ發シテ腫起シ且ツ表皮ノ剝脱スルハ此分泌物ニ腐蝕ノ性アルカ爲メナリ而シテ鼻腔加答兒ハ發熱セスシテ起リ或ハ初生ノ第一歳ニ於ケルカ如ク劇熱若クハ微熱シテ發ス又初起頗ル劇甚ノ全身症ヲ起シテ看護者ヲ煩ハス者少ナカラス乃チ此ノ如キ者ニ在リテハ大ニ煩躁シ苦痛



ノ啼泣ヲ起シ、鼻呼吸ヲ營ミ、睡中屢醒覺シ加之謔妄ヲ發シ肌熱灼シカ  
 如ク脈搏一分時間一百四十至乃至一百六十至呼吸頻數トナリ直チニ  
 之ニ伴フニ頻數ノ噴嚏、額竇痛、終リニ鼻涕ノ增多ヲ以テス蓋シ鼻加答  
 兒ノ依然トノ處ヲ局スルハ稀レニシテ多クハ淚管ヲ傳ヘ結膜ニ蔓延  
 シテ其加答兒ヲ起シ或ハ咽頭、喉頭加之氣道ノ深部ニ波及シテ嚥下困  
 難、嘔嘔及ヒ吠フルカ如キ咳嗽ヲ起シ或ハ終リニ歐斯太幾斯氏喇叭管  
 ヲ傳ヘ鼓室中ニ波及シ耳痛、耳鳴等ヲ起ス而シテ鼻加答兒ハ成長スル  
 小兒ニ於ルヤ全ク危險ノ一患ニ非サレヒ乳兒ニ在リテハ頗ル危篤ニ  
 シテ其關係容易ナラス蓋シ鼻孔ニ由リテ營ム所ノ呼吸機ハ眞個ニ吸  
 乳ニ緊要ニシテ缺ク可ラス然ルニ今鼻孔狹窄シテ梗塞スルヲ以テ唯  
 暫ク吸乳シ直チニ乳房ヲ放却シ終リニ全ク之ヲ含ムコト能ハス乃チ小  
 兒ノ榮養機ノ著ルシク減却スルモ亦自ラ之ニ由リテ明カナリ其他吸  
 乳ノ困難ニ兼テ呼吸困難及ヒ著ルシキ窒息發作ヲ起ス其窒息發作ノ  
 狀ハ猶ホ聲門痙攣ニ於テ見ルカ如ク然リ加之口蓋ニ壓貼セラル、舌

ノ後方ニ吸攝セラレテ窒息及ヒ眞ノ死亡ヲ起ス(ポット氏)ヲ見ルコトアリ

急性鼻腔加答兒ハ慢性ニ陥リ易シ殊ニ腺病性及ヒ梅毒性ノ小兒ニ於  
 テ然リトス經久ニ涉レハ其分泌物敗壞シテ惡臭ヲ放チ血膿狀ヲナシ  
 遂ニ潰瘍ヲ起シ實布的里室斯性ノ皮膚ヲ生シ加之鼻腔内ノ一二骨ヲ  
 腐潰セシム乃チ此ノ如キ小兒ニ近接スレハ直チニ認ムヘキ劇甚ノ惡  
 臭ヲ以テ其鼻患ノ潰瘍性ニシテ且ツ撲滅性ナルコトヲ決定ス可シ此種  
 ノ者ヲ名ツケテ腦漏ト謂フ其性頑固ナルヲ常規トス往々治癒セスシ  
 テ早晚嗅官ノ機能減却シ或ハ全ク消滅ス  
 胃寒、劇熱ノ浴湯、化學的若クハ器械的ニ不潔トナル處ノ空氣ノ吸入、及  
 ヒ或ル全身病殊ニ麻疹ハ急性鼻腔加答兒ヲ起ス而シテ腺病、梅毒、新生  
 物及ヒ贅肉狀發生物ハ常ニ慢性鼻腔加答兒ヲシテ連綿タラシム蓋シ  
 其性頑固ニシテ屢再發スル乳兒ノ鼻加答兒ハ其原因必常惡液質ニア  
 ルコトヲ疑察セシム但シ其徵候ノ存セサル時モ亦然リトス



療法特發鼻加答兒ハ通常唯攝生療法ヲ要スルノミ乃チ風氣ノ胃觸ヲ避ケシメ務メテ室内ノ溫度ヲ平等ニシ(殊ニ冬天此加答兒ノ越毘瑛密性ニ流行スル時ニ於テ)浴湯ヲ禁スヘシ又乳兒ニ於テハ直チニ鼻腔ノ梗塞ヲ疏通スルヲ忽カセニスルヲ勿レ乃チ此目的ニハ海綿ヲ微温湯ニ蘸シ之ヲ以テ一日ニ數回鼻孔ノ結痂ヲ軟解シテ刷除ス可シ通常此法ヲ行ヘハ數滴ノ水鼻内ニ搾入セラレ直チニ之ニ次テ數回噴嚏シ半流動若クハ硬固ナル粘液塊ヲ噴出ス又兒母及ヒ乳母ハ宜シク乳兒ノ鼻中ニ乳汁一二滴ヲ注キ且ツ一日數回温扁桃油及ヒ穢列布油ヲ鼻背ニ塗擦シテ此目的ヲ達スヘシ其他乾癢藥例之亞鉛花明礬及ヒ硝酸銀ヲ散若クハ稀溶解水トナシ毛筆ヲ以テ鼻腔内ニ輸ル可シ又分泌物ノ臭氣甚シキ慢性鼻加答兒及ヒ腦漏ニハ格魯兒加里過滿俺酸加里ヲ注射シ單寧若クハ明礬ヨリ成ル所ノ嗅藥ヲ貼シ或ハ硝酸銀棍ヲ以テ腐蝕ス可シ(カチエナードイ氏又グイルサント氏ハ嗅藥トシテ左ノ合劑ヲ稱用セリ其方 白降汞一分 アルター根末十五分又方 甘汞二分

幾那皮十五分

腺病ヨリ起ル鼻加答兒ハ以上ノ局處療法ニ兼テ肝油沃頓沃頓ヲ含ム鐵泉鐵劑及ヒ沃頓鐵ヲ用フ可シ又其原因煤毒ニアル者ニハ水銀若クハ沃土加里ヲ以テ適切ノ内服藥トス又乳兒ノ鼻加答兒ノ爲メニ吸乳スルヲ能ハス將サニ生命ヲ殞サントスル患アル時ハ患兒再ヒ吸乳シ得ルニ至ルマテ小匙ヲ以テ母乳若クハ牛乳ヲ注輸ス可シ

(二) 衄血 Epistaxis, Rhinorrhagic, Nasen bluten

衄血ハ初生兒及ヒ乳兒ニ於テハ頗ル稀有ノ一症ナレモ成長スル小兒殊ニ可婚期ニ於テハ常ニ見ル所ノ一患ナリ而シテ其出血大ニ寛徐ナルアリ或ハ快速ニ點滴スルアリ或ハ束聚シテ放射狀ヲナスアリ蓋シ偏側ノ鼻孔ヨリ出血スルハ常規ニシテ兩孔ヨリ起ルハ例外ニ屬ス又出血劇甚ナルカ若クハ之カ爲メニ卒倒スル時ハ血液咽頭ニ入テ吐出セラレ或ハ嚥下セラレテ大便ト共ニ排出セラル頭痛眩暈眼前ノ閃光及ヒ耳鳴ハ往々衄血ニ先驅スルヲアリ



原因其原因局處性ナルアリ例之創傷衝突、打撃、鼻粘液膜ノ爪傷潰瘍、新生物及ヒ血管ノ疾病是レナリ又全身のナルアリ然ル時ハ血行系統ノ血壓異常ニ關ス即チ熱性諸患ノ初起殊ニ急性發疹病、室扶斯、實布帝里室斯、腎臟實質炎、間歇熱ニ發スルモノ、心臟病、百日咳、肺炎、胸膜炎及ヒ膿胸ニ起ルモノ之ニ屬ス又所謂出血病ナル出血質(單純紫斑及ヒ出血性血斑貧血、萎黃病及ヒ腺病ハ輕久連綿スル一原因トナル又吐血ハ血痘ニ普通ノ一症ニシテ且ツ子カ屢目撃セシ如ク其初症ヲナス

吐血ハ其由リテ起ル所ノ原因ノ殊ナルニ從テ或ハ輕易ナルアリ或ハ其關係頗ル容易ナラサルアリ乃チ急性諸患ニ於テハ輕快ヲ獎起スルヲ以テ却テ喫緊ナレモ紫斑病、血痘及ヒ萎黃病ニ在リテハ實ニ恐怖ス可キ一症トス

療法輕性ノ吐血殊ニ急性病ノ初起ニ發スルモノハ止血療法ヲ要スルヲ稀ナリ予ハ曾テ腎臟實質炎ノ患者吐血劇甚ニシテ直チニ止血法ヲ要スルヲ目撃セシヲアリ是レ蓋シ例外ニ屬ス然レモ出血ノ量夥ク瀉

出傾クルカ如ク且ツ出血性紫斑、萎黃病及ヒ腺病ニ發スル時ハ初頭直チニ額、鼻及ヒ頂部ニ寒卷法ヲ施シ冷水ヲ飲マシメ出血スル鼻孔内ニ小氷塊ヲ插入ス可シ此法ヲ行フモ止血ノ効ナキ時ハ宜シク栓塞法ヲ行フ可シ即チ明礬末ヲ糝附シ若クハ一半格魯兒鐵液中ニ蘸セル綿織絲栓ヲ鼻中ニ插入シテ全ク之ヲ栓塞スルナリ且ツ以上ノ局處療法ニ兼テ其原因ニ注目シ之ニ適切セル療法ヲ行フ可キヲ亦自ラ明ナリ

〔三〕鼻腔之新生物及鼻中隔之膿瘍 *Neubildungen der Nase und Abscess der Nasenschleimwand*

凡ソ小兒ニ於テ見ル所ノ新生物ハ唯息肉ノミ而シテ此種ノモノモ亦稀有ニ屬ス但シ六歳以下ノ小兒ニハ稀ニシテ通常大兒ニ發ス

通常二種ニ區別ス曰ク**粘液性息肉**(其質軟ニシテ緻密ナラサルヲ以テ一ニ之ヲ軟息肉ト名ツク)曰ク**結組織ヨリ成ル所ノ纖維狀若クハ纖維兼肉腫狀息肉**(其質堅シ故ニ一ニ之ヲ肉性息肉若クハ硬息肉ト名ツク)甲種ノ者ハ鼻腔ノ粘膜ヨリ生シ依然トシテ更ニ發大セス乙種ノモノハ



軟骨膜ヨリ生シ往々頭蓋底ニ根着シ且ツ次第ニ發大シ諸方ニ向テ分岐ス乃チ或ハ上方ニ分岐シテ眼窩底ニ至リ或ハ後下方ニ分岐シテ咽喉及ヒ喉頭ニ達シ或ハ外下方ニ分岐シテ顎竇中ニ入ル而シテ此息肉ハ有莖ナルアリ或ハ廣潤基根ナルアリ

症候鼻腔息肉ハ尙ホ未タ著ルシク増大セサルノ間ハ毫モ特別ノ症ヲ發スルコトナシ然レモ其大サ既ニ鼻腔ヲ梗塞スルニ至リ且ツ鼻腔ヲ超ヘテ以上論セシ諸部中ニ播延スルトキハ之ニ應スル諸般ノ障礙ヲ起ス乃チ鼻粘膜ノ刺衝過敏、剝脫、出血、嗅官消滅、鼻音、口ヲ哆開シテ營ム所ノ呼吸、重聽、嚥下及ヒ咀嚼ノ困難、淚液滴落、呼吸不利、窒息發作、咳嗽發作及ヒ空氣ヲ吸入センカ爲メニ屢、鼻翼ヲ開闔スルハ此疾ノ症候ナリ

予カ曾テ小兒病院ニ於テ目撃セシ六歳ノ一小女ハ纖維兼肉腫狀ノ鼻咽頭息肉其硬口蓋ノ骨膜ヨリ生シテ後鼻孔ノ入口ヲ覆ヘ葉狀ノ腫瘍トナリテ鼻腔及ヒ咽喉腔中ニ蔓延シ喉頭ニ達シ會厭軟骨ヲ聲門ノ上ニ壓排シ頻回手術ヲ行ヒシト雖モ遂ニ鬼籙ニ登レリ死後之ヲ剖驗セ

シニ肺臟及ヒ頸水脈腺中ニモ亦此種ノ腫瘍ヲ發見シタリシ

原因其原因ハ多クハ詳カナラス往々之ヲ鼻腔慢性加答兒ニ歸スト雖モ衆多ノ患者ニ於テ全ク之ヲ見ルコトナク或ハ却テ息肉ニ繼發スルカ故ニ其原因ト看做スコト能ハス

鑑別鑑別ハ唯其病初ニ於テ疑ハシキノミ其既ニ判然證明ス可キ者ニ於テハ他患ト誤診ス可キ患アルコトナシ

療法之ヲ治癒スルコトハ務メテ速カニ手術ヲ行フテ除去スルノ外他策アルコトナシ蓋シ此拔除法ヲ行フコトヲ得ベキ狀態ハ頗ル稀レナリトス即チ息肉進ンテ鼻中ニ顯ハレ甚シク發大セスシテ且ツ唯細狹ノ基根ヲ具フル者ニノミ之ヲ行フ可シ乃チ平行鉗子若クハ彎曲鉗子ヲ以テ拔去スルノ法ハ唯此種ノ息肉ニ於テ行フ可キノミ又息肉莖ヲ具ヘテ之ニ達ス可キ者ニハ結紮法ヲ適切トナス宜シク諸種ノ係蹄線殊ニ念珠線ヲ以テ行フ可シ又其莖ノ鼻若クハ口ニ通シテ剪刀ノ達ス可キ者ニハ結紮法ニ換アルニ剪除法ヲ以テス可シ(グイルサント氏)又頗ル分



裂シテ深在セル息肉ヲ除去スルニハ大抵常ニ危重ナル手術ヲ要ス且ツ充分ニ腫瘍ヲ除去セントスルニハ預メ上頸截去法ヲ行ハサル可ラサルアリ(ツッパキトレン氏ロベルト氏リスフランク氏ウィルベアウ氏及ヒ他氏)

鼻中隔之膿瘍モ亦稀レナレトシテ見ル所ノ一患ナリ或ハ迅速ニ發シ或ハ徐々ニ起ル殊ニ乙種ノ者ハ惡液性ノ小兒ニ見ル所ナリ試ニ鼻腔ヲ検査スレハ大小ノ扁圓形腫瘍ヲ發見ス此腫瘍ハ波動ヲ起シ且ツ自發疼痛ヲ發シ或ハ輕々之レニ觸ルレハ疼痛ス鼻中隔ハ膿瘍ノ爲メニ甲側若クハ乙側ニ壓推セラル又此疼痛ノ他呼吸障礙ハ此疾ヲシテ頗ル苦楚ナラシム稍大ナル者ニ於テ殊ニ然リ若シ之ヲ破開セサレハ早晚自然ニ破潰ス又腺病性ノ小兒ニ於テハ其經過多クハ寛慢ナリ予カ曾テ目撃セシ腺病性ノ小兒ハ鼻中隔ニ慢性膿瘍的炎ヲ起シ之カ爲ニ其中隔ニ豌豆大ノ一孔穿開シタリシ

原因此膿瘍ノ原因ハ胃寒、外傷(鼻ノ打撃及ヒ衝突等)若クハ腺病ナリ

鑑別殊ニ息肉ト誤診スルコト勿レ即チ膿瘍ハ移動セス波動シ殊ニ劇甚ノ外傷性疼痛ヲ起スコト忘却スルコト勿レ

療法鼻上ニ氈布ヲ貼シ鼻腔ニ緩和劑ヲ注射シ尖端ノ鈍圓ナル刀ヲ以テ直チニ膿瘍ヲ破開スヘシ又其原因、腺病ニアル者ニハ之ニ應用スル藥石ヲ投スヘシ就中骨質モ亦既ニ患ニ罹ルノ疑アル時ニ然リトス

〔乙〕喉頭之疾病 *Kehlkopfkrankeiten*

〔一〕喉頭加答兒及偽性格魯弗 *Catarrhus laryngis, pseudocroup*

凡ツ小兒ノ喉頭ノ屢疾病ニ罹ル所以ハ其狹隘ナルト軟弱ナルト外因ニ抗抵スルノ力尙ホ甚ク少ナキトニアリ以上生理諸因ノ外尙ホ各人、各血族及ヒ某子孫ニハ一種喉頭ノ疾病ヲ起シ易キ肺勢アル者ニシテ殊ニ喉頭加答兒ニ於テ然リトス即チ此肺勢ヲ加答兒素質ト名ツク是レ獨リ榮養佳良ナラスシテ其父母疲弱ナル腺病質ノ小兒ノミナラス夫ノ榮養佳良ニシテ全ク肥健ノ者モ亦此素質ヲ抱ク者ナリ而シテ喉頭加答兒ハ多クハ急性ニシテ慢性ナル者ハ少ナシ其急性ナル者ハ或